

FORTRAN 版 NetCDF ユーザマニュアル

自己記述的アクセスインターフェース, ポータブルデータ

Version 3

May 1999

Russ Rew, Glenn Davis, Steve Emmerson, and Harvey Davies
Unidata Program Center

Copyright © 1997 University Corporation for Atmospheric Research, Boulder, Colorado.

このマニュアルは変更を一切加えない状態で、作成・配布しても構いません。ただし、その場合には前記の著作権の一文と以下の説明文が全ての複製版に明記されていなければなりません。このソフトウェアと付属しているマニュアル等の文章は全て「原状のままで（無保証で）」提供されており、いかなる保証も付きません。UCAR は保証に関する一切の責任を放棄することを宣言します。それらの保証は明示・黙示に関わらず責任を放棄し、又商品としての黙示的保証及び特定の目的のための適応性に関する保証も致しません。

Unidata Program Center は University Corporation for Atmospheric Research に よって運営され、National Science Foundation による補助を受けています。この出版物中に示されている見解・発見・結論・推奨等は著者のものであり、必ずしも National Science Foundation の見解・発見・結論・推奨等を反映しているとは限りません。

この文章中に会社・製品名が記載されていても Unidata Program Center がそれらの会社・製品等を推奨しているわけではありません。Unidata はこの著作物から得られた情報を宣伝・広告等の目的に使用することを許可していません。

FORTRAN 版 NetCDF ユーザマニュアルについて

netCDF マニュアルの日本語訳は地球流体電脳倶楽部 (<http://www.gfd-dennou.org>) のプロジェクトとして行われました。日本語版の内容については精確を期していますが、本文章の内容に基づく運用結果について責任は負いかねます。また誤訳などお気づきの点がありましたら netcdf@gfd-dennou.org までご連絡ください。

訳 鶴留 里栄子

編集 飯澤 功 / 北村 祐二 / 塩谷 雅人

序文

Unidata (<http://www.unidata.ucar.edu>) は National Science Foundation がスポンサーであるプログラムで、全米の大学にコンピューター及びネットワークの革新的な使用方法を提供することによって、大気及び大気関連のデータを最大限に利用し教育・研究に活かしています。そのようなデータを解析・表示するにあたって Unidata Program Center は University of Wisconsin, Purdue University, NASA および National Weather Service 等を含む他団体が開発したソフトウェアパッケージを大学側に提供しています。これらのソフトウェアに共通していることはデータをリアルタイムで取得し管理する Unidata が開発したシステムを使用していることです。このことによって Unidata の主張でもある、各地域に必要とされている各大学によるデータベースの独自取得・自己管理を実現することができました。重要なのは Unidata 計画がデータセンターを有しないことです。データ管理は「分担」される任務であるべきなのです。

このマニュアル中で紹介されている Network Common Data Form (NetCDF) ソフトウェアは、本来、数ある Unidata のアプリケーション用に共通のデータアクセス方法を提供する目的で開発されました。これらは定点観測・時系列・等間隔格子・衛星やレーダー観測等の様々なデータの種類を網羅しています。

NetCDF ソフトウェアは I/O ライブラリとして機能し、C・FORTRAN・C++・Perl 等の NetCDF ライブラリが存在するすべての言語から呼び出し可能です。このライブラリは自己記述的マシン独立型のデータベースにデータを格納し、データベースからデータを取得します。個々の NetCDF ファイルは多次元の定義された変数（整数・実数・文字・バイト等の複数の種類を含む）を含むことが可能で、さらにそれぞれの変数に従属的なデータ（単位・説明文など）を付随させることができます。このインターフェースは既存の NetCDF ファイルにデータを追加することができ、機能的には（固定長の）記録方式と類似しているところもあります。しかしながら、NetCDF ライブラリでは変数名・インデックスによってのみデータの直接アクセス格納や取得が可能であり、ディスク（もしくはメモリ）保存型のファイルにのみ対応することができます。

Unidata のソフトウェアの半分ほどは既に NetCDF アクセス可能になっており、今後、残りの Unidata のアプリケーションについても同様の共有性を持たせる予定です。それによって次のことが可能になります。

- ・ 異なるアプリケーションによる同一ファイルの共有
- ・ 異なるコンピュータ間における透過的な（変換の必要がない）ファイルの転送、もしくは共有
- ・ フォーマットの違いに対応するために必要とされるプログラミングの時間の短縮
- ・ データ、または従属的なデータの誤った解釈の防止
- ・ あるアプリケーションからの出力データを別のアプリケーションの入力データとして簡単に使用すること
- ・ Unidata システムに新たなソフトウェアを導入する作業を容易にする標準を設けること

NetCDF は既にいくつか成功を収めています。現在では NetCDF は CRAY からパーソナルコンピュータ、そしてほとんどの UNIX ワークステーションを含むコンピュータのプ

ラットフォームで幅広く使用されています。NetCDF を使っているコンピュータ上で（例えば FORTRAN で）複雑なファイルを作成し、その同じ自己記述的なファイルを他のコンピュータ上（例えば C）で一切の変換なく取り出すことができます。NetCDF のファイルはネットワーク経由で転送したり、適切なネットワークファイルシステムを使用することによってリモート・アクセスすることも可能です。

Unidata ソフトウェア以外のソフトウェアにおいて NetCDF アクセスを可能にすることは Unidata の利用者の利益に繋がると信じ、NetCDF ライブラリをライセンスや重大な規制無く配布し、最新のバージョンを anonymous FTP 経由で手に入れられるようにしてあります。このように自由に使えるようにすることによって Unidata の情報を解析・表示する手段の選択肢が豊富になると思われます。Unidata のソフトウェアは大気科学コミュニティ以外でも幅広く受け入れられているようで、現在では数多くのパブリックドメインや商業用データ解析システムが NetCDF ファイルを読み込むことができます。

いくつかの組織で NetCDF はデータ・アクセス法の標準として採用されており、NCSA (National Center for Supercomputer Applications; University of Illinois at Urbana-Champaign と提携している) では HDF ファイル形式 (NCSA で使用されているツールで使われる形式) が NetCDF プログラミング・インターフェースを支持する動きもあります。我々はこれらの動きを支持し、協力してきました。

NetCDF のソフトウェアがどれほどサポートされているのかという疑問が時々寄せられます。Unidata の正式な立場は NetCDF ライブラリに添付されている著作権に関する事項にも述べられていますが、ソフトウェアはすべて ‘as is (無保証)’ で提供されています。実際には、ソフトウェアは随時アップデートされていくものなので、Unidata は当面、ソフトウェアを改良しつづける予定です。Unidata の目的は米国の地球科学者をサポートすることなので、それらの学会・団体より寄せられた問題点が最優先されることをご了承下さい。

ユーザーの皆様がこのソフトウェアを活用し、その活用法に関するフィードバックや改良点に関する提案を返していただけることを希望します。

David Fulker

Unidata Program Center Director

University Corporation for Atmospheric Research

概要

Network Common Data Form (NetCDF) インターフェースの目的は、配列指向型のデータを自己記述的かつポータブルなフォーマットとして作成・アクセス・共有することにあります。「自己記述的」とはそのファイルが自身に含まれるデータに関する情報を内包しているという意味です。「ポータブル」とはファイル内のデータが整数・文字・浮動小数点の格納方式が異なるコンピュータ間でやり取りできるということです。NetCDF インターフェースを使用して作った新しいファイルは、即、「ポータブル」になります。データアクセス・管理・解析・表示するソフトウェアに NetCDF インターフェースを使用することによって、より有用なソフトウェアを作ることができます。

NetCDF のソフトウェアは NetCDF データアクセス用に C と FORTRAN のインターフェースを搭載しています。共通のプラットフォーム用のためにこのようなライブラリは用意されています。

NetCDF データアクセス用の C++ と Perl のインターフェースも Unidata により提供されています。NetCDF ユーザの助力によってその他のプラットフォームや他のプログラム言語用に移植されたソフトウェアもあります。配列指向型のデータやソフトウェアを共有し、より価値のあるファイルを作成することを目的に、NetCDF のソフトウェア・ライブラリのソースコードは無料で配布されています。

このユーザー・ガイドは NetCDF データモデルの紹介ですが、FORTRAN のインターフェースのみで解説します。他の言語のインターフェースリンクについては NetCDF World Wide Web Site <http://www.unidata.ucar.edu/packages/NetCDF/> を参照してください。C、FORTRAN、C++ および Perl 用の解説文書がオンラインで存在します。同じサイトに UNIX システム用の参照文書も C と FORTRAN のインターフェース用に UNIX 'man' ページの形式で存在します。NetCDF World Wide Web Site には他にも NetCDF に関する膨大な情報と NetCDF データを使用できるソフトウェアへのポインタも掲載されています。

1 はじめに

1.1 NetCDF インターフェース

Network Common Data Form、すなわち NetCDF は、配列形式のデータを格納・取り出すためのデータアクセス関数ライブラリへのインターフェースです。**配列** (array) とは n 次元 (n は 0, 1, 2, ...) の矩形構造を持ち、その要素がすべて同じ**データ型** (data type) (例: 8 ビット文字、32 ビット整数) のものを指します。**スカラー** (scalar) (単純な一つの値) は 0 次元の配列です。

NetCDF は、データとは自己記述的でポータブルなオブジェクトの集合体であり、簡単なインターフェースを通じて取り出し可能であるべきであるという見方を支持する抽象概念です。配列値はデータの格納方式に関する事前の知識なしに直接アクセスできます。データに関する補助的な情報 (例えば単位等) はデータとともに格納できます。NetCDF のデータベースは、一般的なユーティリティやアプリケーションプログラムを使用してアクセスでき、データの特定フィールドを変換・統合・解析・表示することが可能です。そのようなアプリケーションの開発はデータの有用性を向上させ、また、配列指向型のデータの管理・解析・表示を行うソフトウェアの再利用性の向上に繋がるでしょう。

NetCDF ソフトウェアは**抽象的データ型** (abstract data type) を利用します。これは NetCDF ファイル内のデータにアクセス・操作する命令はすべてインターフェースによって提供されている関数のみを使わなければならないということです。データの表現はインターフェースを使うアプリケーションからは隠されており、データの格納方式は既存のプログラムに影響を及ぼすことなく変更できます。NetCDF データの物理的な表現方法は、データが作成されたコンピュータから独立しているように設計されています。

Unidata は C・FORTRAN・C++・Perl・色々な UNIX OS のための NetCDF インターフェースをサポートしています。このソフトウェアは各メジャーリリース前に、他数種類の OS 用にこれらの OS のユーザーの助力で移植テストが行われています。Unidata の NetCDF ソフトウェアは幅広い利用を促進するために FTP を通じて無料で配布されています。

1.2 NetCDF はデータベース管理システムではありません

なぜ、配列指向型のデータ格納に関して既存のデータベース管理システムより NetCDF の方が優れているのでしょうか？それはリレーショナルデータベースソフトウェアが NetCDF インターフェースがサポートするデータアクセス法に適していないからです。

まず、既存の関係モデルをサポートするデータベースシステムは、データアクセスの基本単位として多次元のオブジェクト (配列) をサポートしていません。配列を関係として表示することは便利なデータアクセス法を不便にし、また、多次元データや座標系の抽象化に対してはほとんど何のサポートもしていません。配列指向型データを取得・修正・数学的に扱い・表示するためにはまったく異なるデータモデルが必要なのです。

これに関連して、汎用的なデータベースシステムに関する 2 番目に大きな問題があります。大きな配列に対するパフォーマンスの悪さです。衛星写真・科学的数値モデルの結果・長期的な全地球気象観測のデータなどの集積を効率的に取得できるよう系統立て、索引をつけることは既存のデータベースシステムの能力を超えています。

最後に、汎用的なデータベースシステムは資源面でもアクセスパフォーマンス面でも多大な犠牲のもとに、配列指向型のデータを解析・管理・表示するためには不必要な機能を提供しています。例えば、精巧なアップデート機能・履歴検査・報告書のフォーマット・業務処理用の機能など科学的な操作には不必要なものばかりです。

1.3 File Format

ネットワーク透過性（機種非依存性）を達成するために、NetCDF はデータの表現・エンコードのための標準プロトコルである XDR (eXternal Data Representation ; ftp://ds.internic.net/rfc/rfc1832.txt 参照) に似た外部表現機能を利用します。この表現機能はデータをマシン独立型のビット列へとコード化します。これは 8 ビットのバイトのみが一貫してコード化されるという前提で、多種類のコンピューター上で既に実装されています。IEEE 754 浮動小数点標準プロトコルが浮動小数点のデータを表現するのに使用されています。

NetCDF ファイルのおおまかな構造の説明は 9 章「NetCDF ファイルの構造と性能」(p. 101) にあります。

ファイル形式の詳細については Appendix B 「ファイルフォーマット仕様」(p. 121) を参照してください。ただし、ファイル形式を指定した形で NetCDF ファイルを読み取り・作成する独自の低レベルソフトウェアを開発することは好ましくありません。あとで、フォーマットが更新された時、互換性に問題が生じる危険性があります。

1.4 パフォーマンスは？

NetCDF の目的の一つは大きなファイルの部分集合へのアクセスを効率的に行うことです。この目的のために、NetCDF は順次アクセスではなく直接アクセスを行います。その方がデータが作成された順番と異なる順序で読み取られる場合や異なるアプリケーションによって読み取られる順番が異なる場合に有効です。

ポータブルな外部表現機能 (XDR) に必要なオーバーヘッドの量は多くの要素、例えばデータの種類・コンピューターの種類・データアクセスの粒度¹・コンピューターの実装がどの程度チューニングされているか、に左右されます。通常の場合、オーバーヘッドはアプリケーションが使用する全リソース量に比べると小さいため、いずれの場合にも、XDR レイヤーにかかるオーバーヘッドはデータのポータブルアクセスの利便性を考えるとたいした犠牲ではありません。

NetCDF を設計・実装するにあたってデータアクセスの効率は重大な要素でした。しか

1. 訳注：並列計算における単位。

しながら、NetCDF インターフェースを非効率的に利用することは不可能ではありません。例えば、各記録から一つの値を要求するようなデータ抽出を行う場合などがそれにあたります。効率的にインターフェースを利用する方法については9章「NetCDF ファイルの構造と性能」(p. 101)を参照して下さい。

1.5 NetCDF は良いアーカイブフォーマットですか？

NetCDF は配列を格納するための汎用的なアーカイブフォーマットとして使用できます。NetCDF におけるデータ圧縮は（低解像度の浮動小数点数を 32 ビットの配列で表す代わりに 8 ビットもしくは 16 ビットの整数配列を使用することによって）可能です。しかし、NetCDF の現行版はデータ圧縮率を最適にする設計にはなっていません。したがって、NetCDF は特定のデータベースのある特徴を生かした特殊目的用アーカイブフォーマットよりも多くのスペースを必要とするかもしれません。

1.6 規約に従った自己記述的データの作成法

NetCDF を使うことは、人間とマシンにとって意味のある「自己記述的」データを作成することと等価ではありません。変数や次元の名前は意味のあるものを用い、存在する規約に従った形を取るべきです。次元に関しては（意味があると思われる場合には）対応する座標変数も与えるべきです。

属性は従属的な情報を供給する上で大変重要です。関連する規約に従い、対応する標準属性を使用することが大切です。8.1 節「属性の規約」(p. 86)に一般的なアプリケーションソフトウェアのための NetCDF ライブラリ専用の属性やその規約が記述されています。

いくつかの団体は NetCDF データ用に独自のコンベンション（付加的規約）やスタイルを定義しています。これらの規約やそれらの利用法については NetCDF Conventions site, <http://www.unidata.ucar.edu/packages/NetCDF/conventions.html> を参照してください。

上記の規約は都合の良い場合には使用すべきです。ローカルな使用のためにはしばしば付加的な規約が必要とされます。このような規約を敷く場合には、関連分野のユーザのためにも上記の NetCDF conventions site に掲載しておくことが望ましいです。

1.7 NetCDF の背景と発展

NetCDF の開発は Unidata の必要に迫られた控えめな目標に向かって始められました。その目標とは Unidata のアプリケーションとリアルタイムの気象データとの間に共通のインターフェースを提供することです。元々 Unidata のソフトウェアは複数のハードウェアプラットフォーム上で実行され、C と FORTRAN の両方からアクセスされることが前提にあったので、Unidata の目標を達成することはより広く応用できるパッケージを提供する可能性をも秘めていました。これらのパッケージを広く提供し、かつ同じような需要のある団体と協力することによって、我々は科学的なデータを取得するために作

られたあるソフトウェアが他の分野ばかりではなく同じ分野の中ですえも利用されない現状を打破しようと試みました (Fulker, 1988)。

NetCDF ソフトウェアの重要なコンセプトは NASA Goddard National Space Science Data Center (NSSDC) で開発されたデータアクセスソフトウェアの解説である論文、Treinish and Gough (1987) に記述されています。このソフトウェアによって提供されているインターフェースは Common Data Format (CDF) と呼ばれ、NASA CDF は元は配列を格納するための抽象化をサポートするプラットフォーム特定型の FORTRAN ライブラリとして開発されました。

NASA CDF パッケージは様々な種類のデータと幅広いアプリケーションに応用されてきました。NASA CDF は単純さ (サブルーチンは 13 個のみ)・格納フォーマットからの独立性・汎用性・データの論理的な見方をサポートする能力・一般的なアプリケーションに対するサポートという利点を備えていました。

我々は 1987 年の 8 月に Unidata はコロラド州ボルダーでワークショップを開催しました。NASA と協力し、NASA の既存のインターフェースと互換性を持たせながら CDF FORTRAN インターフェースを拡張・C インターフェースを定義・一つのセルによるデータ集合体のアクセス許可をする可能性が追求されました。

それとは独自に New Mexico Institute of Mining and Technology の Dave Raymond は UNIX 用にある C ソフトウェアのパッケージを開発していました。それは自己記述的データへの順次アクセスを可能にし、データの解析・分析・表示に対して「パイプとフィルター (またはデータフロー)」的なアプローチをサポートするものでした。このパッケージもまた、「Common Data Format」という名を冠しており、後に C-Based Analysis and Display System (CANDIS) へと改められました。Unidata は Raymond の成果を知り (Raymond, 1988)、名前付き次元、及び同一データオブジェクト内に形の異なる変数を使用するなどといった、彼の着眼点のいくつかを Unidata NetCDF インターフェースに採用しました。

1988 年の初頭に Unidata の Glenn Davis が C で書かれ XDR の上に被さった NetCDF パッケージの試作品を完成させました。この試作品は次の 2 点を証明しました。ひとつは単一ファイルの XDR 上に実装された CDF インターフェースの開発費用が許容内であること。そして 2 点目はそのようなプログラムが UNIX と VMS との両方に実装可能であることでした。しかし、それは同時に、望まれている汎用性をもつような、小さくポータブルで NASA CDF と互換性のある FORTRAN インターフェースの開発の実現が困難であることを証明しました。NASA CDF と Unidata's NetCDF とはその後独自の発展を遂げましたが、NASA CDF の最新版は NetCDF と似たような特徴を持っています。

1988 年の初頭に、1987 年の Unidata CDF ワークショップにも参加した SeaSpace, Inc. (カリフォルニア州サンディエゴにある商用ソフトウェア開発会) の Joe Fahle が独自に NASA CDF インターフェースをいくつか重要な点で拡張した CDF パッケージを C で開発しました (Fahle, 1989)。Raymond のパッケージと同様に、SeaSpace CDF ソフトウェアは関連の無い形の変数を同一データオブジェクト内に含むことを許容し、多次元の配列に対する一般的なアクセス方法を可能にしました。Fahle の成果は SeaSpace 社では、画像処理システムにおける中間的な段階での格納形態として使われていました。このインターフェースとフォーマットは後に Terascan データフォーマットへと発展し

ていきます。

Fahle のインターフェースは NASA のインターフェースを我々の目的に応じる形に拡張しようとした際に直面した問題の大部分を解決していました。1988 年 8 月に Unidata NetCDF 用インターフェースの形式を決定し、残された問題を解決するために小規模のワークショップが開催されました。参加者は SeaSpace 社の Joe Fahle、Apple 社の Michael Gough (NASA CDF ソフトウェアの開発者の一人)、Miami 大学の Angel Li (VMS に NetCDF ソフトウェアの試作品を実装し、ユーザーになりえた人)、それに Unidata のシステム開発部のスタッフ達でした。いくつか簡略できる点が指摘された後にワークショップとしての合意が得られました。Glenn Davis と Russ Rew がソフトウェアの最初のバージョンを完成させる前に、ワークショップの成果を含んだ Unidata NetCDF インターフェースの仕様に関する文書が意見交換を促すために広く配布されました。他のデータアクセスインターフェースとの比較や NetCDF を使用した感想については Rew and Davis (1990a)、Rew and Davis (1990b)、Jenter and Signell (1992)、および Brown, Folk, Goucher, and Rew (1993) で議論されています。

1991 年 10 月に NetCDF ソフトウェア 2.0 版の配布開始を発表しました。C インターフェースに小さな修正を加えた (次元の長さを `int` ではなく `long` で宣言した) ことによって MS-DOS コンピューター等の安価なプラットフォーム上での NetCDF の利便性を向上させました。さらに他のプラットフォーム上での再コンパイル作業を必要としないという利点もありました。このインターフェースへの変更は関連するファイルフォーマットの変更が必要となることもありませんでした。

1993 年 6 月に NetCDF 2.3 版がリリースされました。このバージョンではファイルフォーマットに変更はなされませんでした。記録への単一呼び出しアクセス・不連続なデータに関する断面へのアクセスの最適化・`'stride'` を使用した指定断面への部分サンプリング・`'mapped array sections'` (マップされた配列断面) を使用した不連続データへのアクセス・`ncdump` と `ncgen` ユーティリティの改良・試験的な C++ インターフェース等が追加されました。

1996 年 2 月にリリースされた 2.4 版では新たなプラットフォームや C++ インターフェースへのサポートが加えられ、また、スーパーコンピューターのアーキテクチャに関しては重要な最適化がなされました。

1996 年 5 月に NetCDF データに高レベルなインターフェースを提供するソフトウェアの FAN (File Array Notation) の配布が開始された。FAN のユーティリティーには NetCDF のデータセットから配列指向データを抽出し操作する・NetCDF 配列から特定のデータを印刷する・ASCII データを NetCDF データにコピーする・NetCDF 配列上で様々な統計操作 (`sum`, `mean`, `max`, `min`, `product`, ...) を行う等が含まれました。FAN に関する詳細は FAN Utilities document, http://www.unidata.ucar.edu/packages/NetCDF/fan_utils.html にあります。

1.8 過去のリリースから何が新しくなったか？

このガイドは 1997 年 1 月にリリースされた netCDF 3 の説明文です。NetCDF 3 版は過

去のバージョンと同じファイルフォーマットを使用しますが、2.4 版に比べていくつかの大きな変更がなされています。

- NetCDF ライブラリの ANSI C での完全な再記述
- C と FORTRAN の新しい型安全なインターフェース
- 自動型変換機能
- 内部アーキテクチャの重大な変更による新しいプラットフォーム上での高パフォーマンス化と容易な最適化
- NetCDF 2 関数インターフェース・グローバル変数・後方互換性のすべてに対するサポート
- 文書の修正、及び報告されたバグに対する修正

1.9 NetCDF の制限

NetCDF データモデルは名前付き属性を持つ名前付き配列変数の集合として系統だてられるデータに関しては広く応用が利きます。しかしながらこのモデルとソフトウェアの実装にはいくつかの重要な制限があります。この制限の一部は NetCDF が包含する要求の中で相反するものに対するトレードオフに内在するものであります。他の制限に関しては次のバージョンで対応していく予定です。

現在 NetCDF で使用できる外部数値データ種は 8、16、32 ビットの整数、32 もしくは 64 ビットの浮動小数点数に限られています。これらの限られたサイズはビットフィールドにデータを格納することに比べるとファイルスペースを無駄に使用する可能性があります。例えば、9 ビットの数値の配列は 16 ビットの短い整数として格納しなければなりません。1、2 ビット長の数値を 8 ビット長の値として格納するのは更に無駄が多くなります。

現行の NetCDF ファイルフォーマットでは一つの NetCDF ファイルに格納できるデータは 2 ギガバイトです。この制約は、ファイル内の位置を記録するために 32 ビットオフセットを使っているために生じています。

現行のモデルの制約の一つに各 NetCDF ファイルに対して無制限の（可変の）次元が一つしか使用できないことです。無制限の次元においては複数の変数を共有することが可能ですが、それらの変数は同時に発展しなければなりません。これによって NetCDF モデルでは同一ファイル内において複数の無制限次元を持つ変数を扱ったり異なる変数に複数の無制限次元を持たせることができません。つまり、NetCDF モデルは矩形でない変数（例えば不揃いな配列）の表現には不向きということになります。

データの完全な自己表現性にも限界があります。実際にデータを共有したり格納したりする際には必ずと言って良いほど既存の決まり事が存在します。NetCDF では変数・次元・属性に意味のある名前、計算する際に使用可能な形態の単位、ファイル全体に関する属性値のテキスト文字列、簡単な座標系に関する情報を格納できます。しかし、より複雑なメタデータ（例えば一般的ではないグリッド上に正確に地球座標系のデータを投影したり衛星からの映像を正確に表現するために必要な情報等）に対応するためには規約を敷く必要がでてきます。

NetCDF データモデルに適切な修正を加えることによりこれらの規約が不必要になったり、メタデータのいくつかの種類を統一かつコンパクトな方法で表現できるようになるかもしれません。例えば、NetCDF データモデルに明確な地球座標系を与えることによって複雑な地球座標系の規約を簡易化することは可能ですが、データモデルが複雑になるという弊害があります。ここで問題となるのはモデルの多様性と汎用性（多種多様なデータを扱える能力）との間に適切なトレードオフを見つけることです。ある特定の分野の研究者同士が共有する概念を表すために作られたデータモデルは複数の分野でデータを共有したり統合したりすることには不向きかもしれません。

NetCDF データモデルはツリー・ネスト配列・循環的なデータ等のネスト型配列構造をサポートしていません。その最も大きな理由は現行の FORTRAN インターフェースによって任意の NetCDF ファイルを書き込み読み取れなければならないからです。複雑な表現方法や規約によって、いくつかのネスト型構造を表現することは可能ですが、その結果、NetCDF の目標である自己記述的データではなくなってしまう可能性があります。

最後に、現行の実装では NetCDF ファイルへの同時アクセスは制限されています。一つのファイルは同時に複数の人が読み取ることができですが、書き込める人は一人に限られており、複数人による同時書き込みはサポートされていません。

1.10 NetCDF の将来計画

現時点における計画では透過的なデータパッキングの追加、同時アクセスのサポートの向上、2 ギガバイト以上のファイルへのアクセス機能です。他にも実現可能であれば加えられる可能性のある拡張機能としてキーもしくは座標値によるデータアクセス、効率的な構造変更（例えば、新しい変数や属性の追加・変更等）、別のファイルのデータ断面へのポインタ機能、ネスト型配列（矩形でない配列・ツリー配列・循環型配列の表現の実現）への対応、複数の無制限次元の導入などです。

References

1. Brown, S. A, M. Folk, G. Goucher, and R. Rew, "Software for Portable Scientific Data Management," *Computers in Physics*, American Institute of Physics, Vol. 7, No. 3, May/June 1993.
2. Davies, H. L., "FAN - An array-oriented query language," Second Workshop on Database Issues for Data Visualization (Visualization 1995), Atlanta, Georgia, IEEE, October 1995.
3. Fahle, J., *TeraScan Applications Programming Interface*, SeaSpace, San Diego, California, 1989.
4. Fulker, D. W., "The netCDF: Self-Describing, Portable Files---a Basis for 'Plug-Compatible' Software Modules Connectable by Networks," *ICSU Workshop on Geophysical Informatics*, Moscow, USSR, August 1988.
5. Fulker, D.W., "Unidata Strawman for Storing Earth-Referencing Data," *Seventh International Conference on Interactive Information and Processing Systems for Meteorology, Oceanography, and Hydrology*, New Orleans, La., American Meteorology Society, January 1991.

6. Gough, M. L., *NSSDC CDF Implementer's Guide (DEC VAX/VMS) Version 1.1*, National Space Science Data Center, 88-17, NASA/Goddard Space Flight Center, 1988.
7. Jenter, H. L. and R. P. Signell, "NetCDF: A Freely-Available Software-Solution to Data- Access Problems for Numerical Modelers," *Proceedings of the American Society of Civil Engineers Conference on Estuarine and Coastal Modeling*, Tampa, Florida, 1992.
8. Raymond, D. J., "A C Language-Based Modular System for Analyzing and Displaying Gridded Numerical Data," *Journal of Atmospheric and Oceanic Technology*, 5, 501-511, 1988.
9. Rew, R. K. and G. P. Davis, "The Unidata netCDF: Software for Scientific Data Access," *Sixth International Conference on Interactive Information and Processing Systems for Meteorology, Oceanography, and Hydrology*, Anaheim, California, American Meteorology Society, February 1990.
10. Rew, R. K. and G. P. Davis, "NetCDF: An Interface for Scientific Data Access," *Computer Graphics and Applications*, IEEE, pp. 76-82, July 1990.
11. Rew, R. K. and G. P. Davis, "Unidata's netCDF Interface for Data Access: Status and Plans," *Thirteenth International Conference on Interactive Information and Processing Systems for Meteorology, Oceanography, and Hydrology*, Anaheim, California, American Meteorology Society, February 1997.
12. Treinish, L. A. and M. L. Gough, "A Software Package for the Data Independent Management of Multi-Dimensional Data," *EOS Transactions*, American Geophysical Union, 68, 633-635, 1987.

2 NetCDF ファイルの構成

2.1 NetCDF データモデル

NetCDF ファイルは**次元** (dimensions)、**変数** (variables)、**属性** (attributes) 等の情報を含み、すべてに固有の名と ID 番号が割り振られています。データの意味や配列指向のデータフィールド間の関係を把握するためにこれらの構成成分を同時に使用することができます。NetCDF ライブラリでは通常ファイル名のみでなく ID 番号によっても指定される複数の NetCDF ファイルに同時にアクセス可能です。

NetCDF ファイルには記号テーブルが存在し、変数の名・データ型・ランク (次元数)・次元・開始ディスクアドレス等の情報が記載されています。個々の要素はその ID を表す配列インデックス (subscript、添字) の一次関数であるディスクアドレスに記憶されています。つまり、これらの索引を別々に保存する必要が無く (この点で関係データベースと異なる)、素早くコンパクトな記憶法です。

2.1.1 命名の規約

次元、変数、属性の名前はローマ字もしくはアンダースコアで始まる任意のアルファベットと数字で構成されている文字列 (アンダースコア '_'、ハイフン '-' を含む) で表されます。(ただし、アンダースコアで始まる名前はシステム用にのみ使用します。)

2.1.2 Network Common Data Form Language (CDL)

ここでは簡単な NetCDF の例を使い、NetCDF データモデルの原理を説明します。このデータには次元も変数も属性も含まれています。この簡単な NetCDF オブジェクトの表記は CDL (network Common Data form Language) と呼ばれ、NetCDF ファイルを表記するのに大変適しています。NetCDF システムにはバイナリの NetCDF ファイルから人間指向の CDL テキストファイルを作成する、及び逆の操作を行うためのユーティリティが含まれています。

```
NetCDF example_1 { // example of CDL notation for a NetCDF dataset

dimensions:          // dimension names and lengths are declared first
    lat = 5, lon = 10, level = 4, time = unlimited;

variables:           // variable types, names, shapes, attributes
    float    temp(time,level,lat,lon);
                temp:long_name      = "temperature";
                temp:units          = "celsius";
    float    rh(time,lat,lon);
                rh:long_name        = "relative humidity";
                rh:valid_range      = 0.0, 1.0;          // min and max
    int      lat(lat), lon(lon), level(level);
```

```

        lat:units      = "degrees_north";
        lon:units      = "degrees_east";
        level:units    = "millibars";
short   time(time);
        time:units     = "hours since 1996-1-1";
// global attributes
        :source = "Fictional Model Output";

data:      // optional data assignments
level     = 1000, 850, 700, 500;
lat       = 20, 30, 40, 50, 60;
lon       = -160,-140,-118,-96,-84,-52,-45,-35,-25,-15;
time      = 12;
rh        = .5,.2,.4,.2,.3,.2,.4,.5,.6,.7,
            .1,.3,.1,.1,.1,.1,.5,.7,.8,.8,
            .1,.2,.2,.2,.2,.5,.7,.8,.9,.9,
            .1,.2,.3,.3,.3,.3,.7,.8,.9,.9,
            0,.1,.2,.4,.4,.4,.4,.7,.9,.9;
}

```

NetCDF ファイル用の CDL 表記は後述 (10.5 節「ncdump」(p. 111) を参照) のユーティリティプログラム ncdump を使って簡単に自動作成できます。別の NetCDF ユーティリティである ncgen は NetCDF ファイル (もしくはオプションとして NetCDF ファイルを作成するために必要な呼び出しを含む C 及び FORTRAN のソースコード) を CDL 形式から作成します。(10.4 節「ncgen」(p. 110))

CDL 表記法は単純で大部分が自明です。NetCDF ファイルの構成要素を説明してゆくに従い CDL 表記法により詳細な部分を明らかにしていきます。この時点では、CDL 文がセミコロンで終わることに注意してください。スペース・タブ・改行は自由に使って文を読みやすくしてください。CDL のコメントはどの行においても `///` に続きます。NetCDF ファイルは CDL では以下のように記述されます。

```

NetCDF name {
    dimensions: ...
    variables: ...
    data: ...
}

```

ここで**名前** (name) は ncgen ユーティリティーを使ってファイル名を作成する際に単にデフォルトとして使用されます。CDL 記述には 3 つのオプションがあり、dimensions・variables・data のキーワードによって開始されます。NetCDF 次元の宣言は dimensions の後に記述されます。NetCDF 変数及び属性は variables の後に定義され、変数データの割り当ては data の後に続きます。

2.2 次元

次元は実際の物理的な次元 (例えば、時刻・緯度・経度・高度等) を表すために使用し

ます。また、次元は他の数量のインデックス（例えば、観測点やモデル現行番号）としても使用できます。

NetCDF 次元は**名前** (name) と**長さ** (length) を持っています。次元長とは任意の正の整数ですが、NetCDF ファイル中の一つの次元は UNLIMITED の長さを持つことができます。

そのような次元は**無制限次元** (unlimited dimension) もしくは**記録次元** (record dimension) と呼ばれます。無制限次元を持つ変数はその次元に沿って無制限に伸ばすことができます。無制限次元インデックスは従来の記録指向型ファイルにおける記録番号のようなものです。一つの NetCDF ファイルは最大で一つの無制限次元しか持てませんが、無制限次元を持たなくても構いません。もし、変数が無制限次元を持つとしたら、その次元は最も重要な（最も遅く変化する）ものでなくてはなりません。従って、無制限次元は必ず CDL 形式の最初の次元でなければならず、FORTRAN 配列宣言においては最後の次元でなくてはなりません。

CDL 次元宣言は CDL キーワードの次元 dimensions に続く行（複数行でも可）に書かれます。同一行における複数の次元宣言はコンマで区切ります。宣言はおのおの**名前＝長さ** (name = length) で表されます。

上記の例では 4 つの次元 lat, lon, level, そして time があります。最初の 3 つの次元は固定長です。time は無制限長 UNLIMITED を与えられており、これは time が**無制限** (unlimited) であることを意味します。

NetCDF ファイル中で名前のあるデータの基本単位は**変数** (variable) です。変数はその**形** (shape) が次元のリストとして定義されます。それらの次元は既に存在していなければなりません。次元の個数は**ランク** (rank) もしくは**ディメンショナリティ** (dimensionality) と呼ばれます。スカラー変数はランク 0 となり、ベクトルはランク 1、行列はランク 2 ということになります。

変数の形を定義するのに同じ次元を複数回使用しても構いません。（以前のバージョンの NetCDF ではこれは不可能でした。）例えば、correlation(instrument, instrument) と定義して、異なる機器で測定された値の相関を示す行列を表すことができます。しかし、物理的な空間 / 時間に相当する次元を持つデータは、たとえその次元のいくつかが同じ値を取る場合においても、異なる次元で構成される形を取るべきです。

2.3 変数

変数はデータを NetCDF ファイルに格納するのに使用されます。変数とは同一型の値の配列を指します。スカラー値は 0 次元の配列として扱われます。変数は名前・データ型・変数が定義されたときに与えられた次元のリストによる形を持ちます。また、変数は関連する属性を持つこともできます。この属性は後に加え・削除し・変更することができます。

変数外部データ型とは NetCDF の**型** (types) の小さな集合の一つであり、次のような名前を持ちます。FORTRAN インターフェースで NF_BYTE (同義語 NF_INT1), NF_CHAR, NF_SHORT (同義語 NF_INT2), NF_INT, NF_FLOAT (同義語 NF_REAL) 及び NF_DOUBLE。

CDL 表記ではこれらはより単純な `byte`・`char`・`short`・`int`・`float`・及び `double` 等の名前を与えられています。`real` は CDL 表記において `float` の同義語として使用できます。`long` は `int` に対する同義語です。各変数の厳密な意味については「NetCDF 外部データ型」3.1 節「NetCDF 外部データ型」(p. 19) を参照して下さい。

CDL 変数宣言は CDL 単位中のキーワード `variable` に続きます。それらの形式は次元付きの変数については

```
type variable_name ( dim_name_1, dim_name_2, ... );
```

また、スカラー変数については

```
type variable_name;
```

という形を取ります。

前述の CDL の例では変数が 6 つあります。次に述べるように、そのうち 4 つは座標変数です。残りの 2 つの変数 `temp` と `rh` は**主変数** (primary variables) と呼ばれ、一般的にデータと見なされるもので構成されています。それぞれの変数は `time` という無制限の次元を第一次元として含み、**記録変数** (record variables) と呼ばれます。記録変数ではない変数は固定長 (データ値の個数) を持ち、次元長の積に相当します。記録変数の長さはその次元長の積ですが、この場合には無制限次元の長さが一定ではないためにその積は変数であり、当然変化します。無制限次元の長さは記録数に該当します。

2.3.1 座標変数

NetCDF においては変数が次元と同一の名前を持つことが許されています。それらの変数は NetCDF ライブラリにとっては特別な意味を持ちません。しかしながら、そのライブラリを使用するソフトウェアに特別な意味を持つ変数として扱われるという規約があります。

次元と同じ名前を持つ変数は**座標変数** (coordinate variable) と称されます。通常はその次元に対応する物理的な座標を定義するために使われます。前出の CDL の例には次のように定義される座標変数 `lat`、`lon`、`level` 及び `time` が含まれています。

```
int      lat(lat), lon(lon), level(level);
short    time(time);
...
data:
level    = 1000, 850, 700, 500;
lat      = 20, 30, 40, 50, 60;
lon      = -160, -140, -118, -96, -84, -52, -45, -35, -25, -15;
time     = 12;
```

これらはこの次元に沿った地点における緯度・経度・気圧・時刻を定義しています。つまり、ここでは高度 1000, 850, 700, 及び 500 mbar に相当する高度と北緯 20, 30, 40, 50, 60 度におけるデータが存在するということです。各座標変数はベクトルであり同一の名前を持つ次元のみで構成されている形を持つことに注意してください。

次元に沿った位置は**インデックス** (index) を使用することによって指定できます。インデックスは整数であり、最小値は FORTRAN では 1 になります。前出の例では 700 mbar レベルにおけるインデックスは 3 となります。

次元に対応する座標変数が存在する場合には、その次元に沿った位置を指定するための代替的で通常はより便利な方法があります。現行の座標変数を使用するアプリケーションパッケージでは、それらの値が数値ベクトルであり、狭義の意味で単調である（すべての値は異なり、一方的に増加もしくは減少する）という仮定をしています。

2.4 属性

NetCDF の**属性** (attributes) はデータに関するデータ、例えば**補助的データ** (ancillary data) や**メタデータ** (metadata) を格納するために使用されます。その手法は従来のデータベースシステムのデータ辞書や図表を格納するのに使用されている手法と多くの類似点があります。大半の属性は特定の変数に関する情報を含んでいます。その変数の名前（もしくは ID）と属性の名前とがあわせて識別されます。

いくつかの属性はファイル全体の情報を与えており、**グローバル** (global) 属性と呼ばれます。これらは属性の名前と CDL の場合には空白の変数名、C 及び FORTRAN の場合には特別な null グローバル変数 ID によって識別されます。

属性には関連する変数（グローバル属性の場合には null グローバル変数）、名前、データ型、データ長、そして値があります。現行版においてはすべての属性をベクトルとして扱っています。スカラー値は単一要素ベクトルとして扱われます。

可能な場合には従来の属性名を使用の方が好ましいでしょう。新しく名前をつける場合にはできる限り意味のあるものを付けましょう。

属性の外部型は定義される際に指定されます。属性に使用できる型は変数の場合の NetCDF の外部データ型と同じです。異なる変数に同一の名前の属性がある場合には異なる型の場合があります。例えば、変数型 `int` の有効データ値の最大値を特定する属性 `valid_max` は `int` 型であるべきです。それに対して変数型 `double` に対する属性 `valid_max` は `double` 型であるべきです。

属性は変数や次元よりもダイナミックです。属性は削除可能で、作成後にも型・長さ・値を変更することが可能です。それに対して、NetCDF インターフェースでは変数を削除したり、変数の型や形を変更することはできません。

属性を定義するための CDL 表記法では変数属性は

```
variable_name:attribute_name = list_of_values;
```

であり、グローバル属性は

```
:attribute_name = list_of_values;
```

となります。CDL において各属性の型や長さは明確に宣言されません。それらは属性に

割り振られた値によって決定されます。単一の属性に属する値はすべて同一型でなければなりません。色々な NetCDF 型の定数に使用される表記法については後述します。(10.3 節「データ定数の CDL 表記」(p. 108))

NetCDF の例 (2.1.2 節「Network Common Data Form Language (CDL)」(p. 12)) では `units` は変数 `lat` に対する属性で 13 文字列 `'degrees_north'` の配列値を持ちます。そして `valid_range` とは長さ 2、値 `'0.0'` と `'1.0'` を持つ変数 `rh` の属性です。

NetCDF ファイルの例では一つのグローバル属性 `---source---` が定義されています。実際の NetCDF ファイルではファイル全体の起源・歴史・規約・特徴などを記述するためにより多くのグローバル属性を持つかもしれません。

NetCDF ファイルを処理する一般的なアプリケーションの多くは標準的な属性の規約に従っており、特に理由がない場合には規約に従うことをお勧めします。Units, long_name, valid_min, valid_max, valid_range, scale_factor, add_offset, _FillValue 及び他の規約的な属性については 8.1 節「属性の規約」(p. 86) を参照してください。

任意の NetCDF ファイルが最初に作成されてから時がたっても属性を定義することは可能です。ですから、ファイルの作成当初に使用される可能性のある属性をすべて網羅しようと悩む必要はありません。しかし、既存のファイルに新しい属性を加えることはファイルをコピーするのと同じ作業量が必要となる場合があります。より詳しい議論は 9 章「NetCDF ファイルの構造と性能」(p. 101) にあります。

2.5 属性と変数との違い

データのかたまりを処理するために使われる変数に対し、属性は補助的なデータやデータに関する情報のために使用されます。NetCDF のオブジェクトに関連し、属性に格納された補助的なデータの総量は通常、メモリ上に十分保存できます。それに対し、変数は全体をメモリ上に保管するにはしばしば大きすぎ、処理するために分割する必要があります。

属性と変数の異なる点はまだあります。それは変数は多次元であることができることです。属性はすべてスカラー（単一数値）もしくはベクトル（一方向に既定された次元）です。

変数はデータ値を割り当てられる前に名前・型・形を定義されます。ですから値の無い変数が存在することもあります。属性の値は作成時に指定する必要があるため、値の無い属性は存在しません。

変数は属性を持ち得ますが、属性は属性を持つことができません。変数に割り当てられた属性は変数と同じ単位を持つことができます（例えば `valid_range`）。単位の無い属性というのも可能です（例えば `scale_factor`）。関連する変数と異なる単位を使用するデータを格納したい場合には属性よりも変数を使うことをお勧めします。より一般的には、データが説明のための補助的なデータを必要としたり、多次元であったり、データの値のインデックスとして定義された NetCDF 次元を必要としたり、格納量が多大である

場合には場合には、データは属性よりも変数として表現されるべきでしょう。

3 データ

この章では6つの基本的な NetCDF の外部データ型、及び NetCDF インターフェースによってサポートされているデータアクセスの種類を紹介し、さらに配列型以外のデータ構造が NetCDF ファイルによって実装可能であることを紹介します。

3.1 NetCDF 外部データ型

NetCDF インターフェースによってサポートされている外部データ型は以下の通りです。

char	テキストを表現するための 8 ビット文字
byte	符号付、または符号無しの 8 ビット整数（下記参照）
short	符号付 16 ビット整数
int	符号付 32 ビット整数
float, real	32 ビットの浮動小数点数
double	64 ビットの浮動小数点数

これらはデータの精度と個々の値に必要なビット数のトレードオフの幅を広げるために設定されました。これらの外部データ型は任意のマシンや言語の組み合わせによってサポートされている内部データ型から完全に独立しています。

これらのデータ型が「外部」と呼ばれるのは NetCDF データのポータブル外部表記に対応するからです。あるプログラムがデータを内部変数として読み込む際に、必要であれば指定された内部変数型に変換されます。同様に、内部データ型が NetCDF 変数の外部データ型と異なる場合には、内部データを NetCDF 変数として書き込む際に、異なる外部データ型に変換されてしまう可能性があります。

外部型と内部型を分離し、自動的に外部 - 内部型変換をすることにはいくつかの利点があります。数値変数の外部データ型を知らなくても自動的にどのような数値型にも変換できるからです。この特性を利用して、十分に幅広い範囲の内部データ型を使用することによって外部データ型から独立した形にコードを単純化したりすることも可能です。即ち、数種類の異なる外部データ型を持つ数値 NetCDF データに関しては倍精度になります。ある変数の外部データ型が変更されてもプログラムを書き換える必要は無いのです。

外部数値型から、もしくは外部数値型へ変換をする場合にはライブラリに任せます。このように外部データ表記と内部データ型間の変換を自動化し、両者を切り離すことは NetCDF の将来のバージョンにとってはより一層重要な意味を持ちます。圧縮データに新たな外部データ型が加えられ、それに対応する内部データが存在しないケースも出てくるかもしれません。（例えば 11 ビット値の圧縮配列等）

ある数値型から別の型に変換する場合に、変換された値を表現しきれない型に変換する

とエラーが生じます。例えば、内部の短い整数型では外部で整数として格納されているデータを表しきれないでしょう。数値配列にアクセスする際に、表現可能な領域から一つ以上の値がはみ出してしまった場合にはレンジエラーが返されてきます。領域内に収まる他の数値については正常な変換が行われます。

ここで注意しなければならないのはデータ型の変換に伴う単なる精度の悪化ではエラーが返されないということです。つまり、倍精度の数値を単精度の浮動小数点数に変換した場合には、倍精度の値が変換先のプラットフォームで表現可能な単精度の浮動小数点数の範囲から逸脱しない限り、エラーは返されません。同様に、浮動小数点数の仮数の有効桁数では表しきれない程の大きな整数値を読み込んだ場合にも、この操作によって失われた精度に対するエラーは返されません。このような精度のロスを避けるにはアクセスする前に外部データの変数型をチェックし、十分な精度を持つ内部データ型に変換するようにしてください。

基本外部データ型の名前 (byte, char, short, int, float または real 及び double) は CDL においては予約語です。ですから、変数・次元・属性の名前はこれらを使用してはいけません。

バイトデータ型は符号付整数値 (-128 ~ 127) としても符号なし整数値 (0 ~ 255) としても扱うことができます。しかし、バイトデータ型を他の数値表現型に変換する場合には符号付数値として認識されます。

NetCDF 外部データ型と任意の言語のデータ型との互換性については 2.3 節「変数」(p. 14) を参照してください。

3.2 データアクセス

NetCDF データにアクセスする (読み込む・書き込む) 場合には、オープンされた NetCDF ファイル、NetCDF 変数、及び変数の要素を特定する情報 (例: 番号) を指定します。アクセス機能の名前は内部データ型の名前に対応します。内部データ型と外部変数型の表現が異なる場合にはデータが読み書きされる際に内部型と外部型との間の変換が行われます。

データへは**直接** (direct) アクセスします。これによって大きなファイルから小さな部分集合を効率的にアクセスすることができます。その部分集合の前にあるデータを先にアクセスしないからです。データを、ファイル中の位置ではなく、変数を指定することによって読み書きすることは、データアクセスをそのファイルの中に他にいくつ変数が存在するかとは無関係になります。これによってデータに新たな変数が加わるデータフォーマットの変更に対してプログラムの書き換えは不必要になります。

C と FORTRAN インターフェースでは、データアクセスをする毎にファイルを名前で特定せず、ファイルが初めて作成・オープンされた時に割り当てられるファイル ID と呼ばれる小さな整数によって識別します。

同様に、任意の変数はデータアクセスの毎に名前で識別されません。その代わりに、変数 ID と呼ばれる、NetCDF 中の各変数を識別するのに使用される小さな整数によって識別

されます。

3.2.1 データアクセスの形式

NetCDF インターフェースにはオープンされた NetCDF ファイル中のデータ値に直接アクセスする方法がいくつか用意されています。これらのアクセス形式を一般性の低いほうから順に説明します：

- すべての要素へのアクセス形式
- **インデックスベクトル** (index vector) によって識別された個々の要素へのアクセス形式
- インデックスベクトルと**カウントベクトル** (count vector) によって識別された配列断面へのアクセス形式
- インデックスベクトル、カウントベクトルまたは**ストライドベクトル** (stride vector) によって識別された部分サンプルされた配列断面へのアクセス形式
- インデックスベクトル、カウントベクトル、ストライドベクトル、及び**インデックスマッピングベクトル** (index mapping vector) によって識別されたマップされた配列断面へのアクセス形式

4 種類のベクトル (インデックスベクトル、カウントベクトル、ストライドベクトル、及びインデックスマッピングベクトル) は変数の各次元に対応する要素を一つずつ持っています。ですから、 n 次元の変数 ($\text{rank} = n$) については n 個のベクトルが必要となります。変数がスカラー量 (無次元) の場合には、これらのベクトルは無視されます。

配列断面 (array section) とは 2 つのベクトルによって指定される連続的な直方体、もしくは「板切れ」のようなものです。インデックスベクトルが原点に最も近い角の要素の座標を表します。カウントベクトルは各変数の次元に沿った板切れの縁の長さを順番に表します。アクセスされた値の個数はこれらの縁の長さの積です。

部分サンプルされた配列断面 (subsamped array section) は配列断面に似ていますが、さらにストライドベクトルというベクトルを使用してサンプリングを識別するために使用されます。このベクトルは各次元ごとに要素があり、その次元に沿って取るべきストライドの長さを表しています。例えば、ストライドが 4 であるなら、その次元に沿って 4 つおきの値をとるという意味になります。この場合にも、アクセスされた値の総数はカウントベクトルの各要素の積になります。

マップされた配列断面 (mapped array section) は部分サンプルされた配列断面に似ていますが、さらにインデックスマッピングベクトルが加わり、NetCDF 変数に関連するデータのメモリー中の配置を指定することができます。各値の参照値からのオフセットは各インデックスと対応するインデックスマッピングベクトルの要素を掛け合わせたものの和になります。(マッピングがされていない場合には仮想的な内部配列のインデックスが使用されます。) アクセスされた値の個数は部分サンプルされた配列断面の場合と同じになります。

マップされた配列断面の応用については後により詳細に述べます。その前に、より一般的な配列断面へのアクセスの例を見ましょう。

3.2.2 配列断面のアクセス例

先に扱った NetCDF ファイルの例 (2.1.2 節「Network Common Data Form Language (CDL)」(p.12)) において、あるレベル (例えば 2 段目) の temp 変数の全データの断面を読み取りたいとし、そしてその NetCDF ファイルには記録が 3 つ (time 値) あるとま
す。次元は

```
lat = 5, lon = 10, level = 4, time = unlimited;
```

と定義されます。そして、変数 temp は CDL 表記においては

```
float temp(time, level, lat, lon);
```

と宣言されます。

FORTTRAN の場合には CDL 表記法とは次元が逆転しており、第一次元が最も早く変化し、記録変数の最後尾が記録次元となっています。それ故、一つのレベルのみのデータを保持している変数の FORTRAN における宣言は次のようになります。

```
INTEGER LATS, LONS, LEVELS, TIMES  
PARAMETER (LATS=5, LONS=10, LEVELS=1, TIMES=3)  
...  
REAL TEMP(LONS, LATS, LEVELS, TIMES)
```

2 段目のレベルにある全時刻・全緯度・全経度のデータブロックを識別するためには、始点インデックスとブロックの縁の長さを与えなければなりません。time・lon・lat 次元については最初の値から、そして level 次元については 2 番目の値から開始されるので始点インデックスは FORTRAN では (1, 1, 2, 1) になります。time 値については 3 個すべて、level 値については 1 個のみ、lat 値については 5 個すべて、そして lon 値については 10 個すべてを取得したいので、縁の長さは FORTRAN では (10, 5, 1, 3) になります。この操作によって合計 150 個 (3*1*5*1) の浮動小数点数が返されるので、これだけの数を収容するのに十分な配列スペースを確保しなければなりません。このデータが返される順番は最も早く変化する最初の次元 LON になります：

```
TEMP( 1, 1, 2, 1)  
TEMP( 2, 1, 2, 1)  
TEMP( 3, 1, 2, 1)  
TEMP( 4, 1, 2, 1)
```

...

```
TEMP( 8, 5, 2, 3)  
TEMP( 9, 5, 2, 3)  
TEMP(10, 5, 2, 3)
```

C や FORTRAN などの異なる言語インターフェースにおける次元の順番が異なるのはディ

スク上で保存されている順番が異なるからではなく、単に各言語に対する手続きインターフェースによってサポートされている順番が異なっているからです。一般的に、NetCDF ファイルが C や FORTRAN、または他の言語インターフェースで作成されていても何も変わりません。NetCDF をサポートする言語で作成された NetCDF ファイルは他の言語で書かれたプログラムを使って読み取ることができます。

3.2.3 一般的な部分アクセスに関する追記

マップされた配列断面を使用することによって変数要素のディスクアドレスとメモリ上で格納されているアドレスの間に自明ではない関係を確立することができます。例えば、メモリ上の行列はディスク上の行列を変換したもので、要素が全く異なる順番で格納されるかもしれません。通常の配列断面においてはディスク上とメモリアドレスの関係は自明です：メモリ内での値の構造（次元サイズと順番）は配列断面のものと一致しています。しかしながら、マップされた配列断面においては NetCDF の変数要素のインデックスとそれらのメモリ上のアドレスとのマッピングを定義するのにインデックスマッピングベクトルが使用されます。

マップされた配列へのアクセスによって、メモリに常駐する配列の原点とある任意の点との間のオフセット量（配列の要素の数）はインデックスマッピングベクトルとその点の**座標オフセットベクトル** (coordinate offset vector) の**内積**¹ (inner product) で表されます。ある任意の点の座標オフセットベクトルは各次元が含んでいる配列の原点からその点までのオフセット量を与えます。FORTRAN ではある点の座標オフセットベクトルの値は元の座標ベクトルの値より 1 小さくなります。つまり、配列要素 A(3, 5) の座標オフセットベクトルは [2, 4] になります。

通常の配列部分のインデックスマッピングベクトルは‘最も早く変化する次元から最も遅く変化する次元の順番に’常に定数 1 を持つはずですが、なぜならば、その値と最も早く変化する次元の一辺の長さの積を取り、その値と次に早く変化する次元の一辺の長さとの積を取る、という操作を繰り返すからです。しかし、マップされた配列においては NetCDF 変数のディスク上での位置とメモリ上での位置との対応関係は異なることもあります。

マップされた配列へのアクセスに関する詳しい例はマップされた配列へのアクセスに関するインターフェースの説明文にあります。7.9 節「マップされた配列の値を書き込む：nc_put_varm_type」(p.67) を参照して下さい。

NetCDF 抽象化によって部分サンプルされた配列断面やマップされた配列断面によるアクセスが可能ですが、これらを使用する必要はありません。これらのより汎用的なアクセス法が不必要な場合には、これらの機能を見捨てて単一値によるアクセスや通常の配列断面アクセス方法を使用してください。

1. ベクトル $[x_0, x_1, \dots, x_n]$ と $[y_0, y_1, \dots, y_n]$ の内積は単に $x_0*y_0+x_1*y_1+\dots+x_n*y_n$ となります。

3.3 型変換

NetCDF 変数にはそれぞれ、最初に定義された時に指定される外部型があります。この外部型によってデータがテキストや数値として扱われるか判別されます。数値として扱われる場合には、その範囲と精度も指定されます。

NetCDF の変数の外部型が `char` の場合、テキスト配列である文字データのみが変数として書き込み、読み取ることが可能です。テキストデータを異なる型のデータに自動変換する機能はサポートされていません。

ただし、数値データである場合には変数を異なるデータ型としてアクセスし、メモリに格納されている数値データと NetCDF 変数との間で自動的に型変換する機能を NetCDF ライブラリは保有しています。例えば、すべての数値データを倍精度の浮動小数点数として扱うプログラムを作成した場合には、NetCDF 変数の外部型がどんな型であるかを気にせず、NetCDF データを倍精度配列に読み取ることができます。NetCDF データを読み取る際、様々な大きさの整数や単精度の浮動小数点数は、倍精度の数値用のデータアクセスインターフェースを使ってアクセスすれば、自動的にすべて倍精度数値になります。もちろん、このように自動的に数値が変換されることを望まない場合には、その数値の型が存在すれば、それぞれの NetCDF 変数の外部データ型に対応したインターフェースを使用すれば避けられます。

NetCDF が行う数値変換は大変わかりやすいものばかりです。それは、数値変換が任意の型のデータを別のデータ型の変数を取るよう指定する操作であるからです。例えば、浮動小数点 NetCDF データを整数として読む場合には、小数点以下は切り捨てられます。浮動小数点数を整数の変数に割り付ける場合と同様です。このような打ち切りは数値変換に伴う精度悪化の例といえます。

ある数値型から他の異なる数値型に変換する場合にも、変換先の型が変換された数値を表すことのできない型の場合にもエラーが生じます。例えば、整数では外部型として IEEE 浮動小数点数として格納されているデータを表せません。数値の配列をアクセスする際には、一つ以上の数値が表せる範囲外である場合にはレンジエラーが返ってきます。その他の範囲内にある数値については正しく変換されます。

注意すべき点は、型変換による精度のロスのみではエラーを引き起こさないということです。例えば、倍精度の数値を整数として読む場合には、倍精度の数値の大きさが読込先のプラットフォームで表し切れる整数の範囲外でなければエラーと判定されません。同様に、大きな整数を浮動小数点数に変換する際に、浮動小数点数の仮数部にその整数のすべてのビットを表し切れなくて精度にロスが生じたとしてもエラーにはなりません。このような精度のロスを避けたい場合にはアクセスする変数の外部型をチェックして、使用する内部型と整合性があることを確認してください。

表し切れる範囲の境界に近い大きな浮動小数点数を書き込む場合にレンジエラーが生じるかどうかはプラットフォーム次第です。NetCDF 浮動小数点変数に書き込める最大の浮動小数点数は、使用しているシステムで表せる最大の浮動小数点数であり、2 の 128 乗よりは小さい値です。倍精度変数に書き込める最大の倍精度数値は、使用しているシステムで表せる最大の倍精度数値であり、2 の 1024 乗より小さくなります。

この自動変換と外部データ表示を内部データ型から切り離すことは、NetCDF の将来のバージョンにおいてより重要性を増してくるでしょう。それは、将来、対応する内部型が存在しないデータ表現（例えば 11 ビット数値の配列等）に新たな外部データ型が導入されることが考えられるからです。

3.4 データ構造

NetCDF による抽象化で直接的にサポートされる唯一のデータ構造はベクトル属性つきの名前前のついている配列の集合のみです。NetCDF はリンクされたリストや、ツリー、粗い配列、不均一な配列等、ポインタを必要とする種類のデータ構造を表現するには適していません。

ある配列のデータを他の配列のデータへのポインタとして使用することに関する様々な規約を採用することにより、配列の集合により他のデータ構造を構築することは可能です。そのようなデータ構造を構築する際に、NetCDF ライブラリは役にも立ちませんが阻害もしません。その代わりに、そのような規約を設計する手段を提供します。

次の例は属性 `row_index` を使用して不均質な配列 `ragged_mat` を格納し、それによって各列の始点となるインデックスを指定することにより関連するインデックス変数の名前を与えています。この例では、最初の列は 12 個 (12-0) の要素からなり、2 列目は 7 個 (19-12)、という具合に続きます。

```
float    ragged_mat(max_elements);
         ragged_mat:row_index = "row_start";
int      row_start(max_rows);
data:
row_start = 0, 12, 19, ...
```

もう一つの例として、NetCDF 変数を任意の NetCDF ファイルの中でグループ化することが挙げられます。各グループの変数の名前を、伝統的な区切り文字であるスペースやコンマを挟んで並べた属性を定義することによってこれは可能になります。このようなグループ化のために属性名の規約付けをすることによっていくつもの名前のある変数グループを作ることが可能になります。ある特定の規約に従った属性をそれぞれの変数に与えることによって変数がどのグループに属しているかのリストが作れます。他の属性や変数を指定する属性や変数の導入により、NetCDF ファイルにおける幾種の複雑な構造を表すための柔軟な手段が与えられます。

4 NetCDF ライブラリの使用

NetCDF ライブラリを使用するために NetCDF インターフェースの事をすべて知っている必要はありません。NetCDF ファイル作るのであれば片手で足りるほどのルーチンさえ知っていれば必要な次元・変数・属性を定義し、NetCDF ファイルにデータを書き込むことができます。(ncgen ユーティリティを使用してあらかじめファイルを作成しておいてから、NetCDF ライブラリのデータ書き込み呼び出しを活用したプログラムを走らせたならば、使用するルーチンの数はより少なくなります。同様に、ある NetCDF オブジェクトに格納されたデータにアクセスするソフトウェアを作成する際、NetCDF ファイルをオープンし、データにアクセスするためには NetCDF ライブラリのほんの一部しか使用しません。もちろん、任意の NetCDF ファイルにアクセスする包括的なアプリケーションを作る場合には、NetCDF ライブラリにより精通している必要があります。

この章では通常の使用に必要な一般的な NetCDF の呼び出し手順の例をいくつか紹介します。明確さのため、ここではルーチンの名前のみを挙げています。宣言やエラーチェックについては触れていません。また、型に限定される変数や属性のルーチン名のサフィクスについても省略してあります。複数回使用される宣言文は字下げをしてあります。また、... を使用して他の宣言文の任意のシークエンスを表しています。全パラメーターのリストは後の章で説明します。

4.1 NetCDF ファイルを作成する

これは新しい NetCDF ファイルを生成するために使用する一般的な NetCDF 呼び出し手順です：

```
NF_CREATE          ! NetCDF ファイルを作成： 定義モードに入る
...
NF_DEF_DIM         ! 次元の定義：名前とサイズから
...
NF_DEF_VAR        ! 変数の定義：名前、型、次元から
...
NF_PUT_ATT        ! 属性を設定：属性値を割り当てる
...
NF_ENDDEF         ! 定義終了：定義モードから抜ける
...
NF_PUT_VAR        ! 変数に値を与える
...
NF_CLOSE          ! クローズする：新しい NetCDF ファイルを保存する
```

NetCDF ファイルを作成は呼び出し一つで可能です。その時点では、二つある NetCDF **モード** (mode) の最初のモードに入っています。オープンされた NetCDF ファイルにアクセスする際でしたら、定義モードもしくはデータモードに入るはずですが。定義モードでは次元・変数・新しい属性などを作れますが、変数データを読んだり書き込んだりすることはできません。データモードではデータにアクセスし、既存の属性を変更することはできますが、次元・変数・属性を新たに作ることはできません。

新たに作られた次元にはそれぞれ `NF_DEF_DIM` への呼び出しが一つ必要となります。同様にすべての変数には `NF_DEF_VAR` への呼び出しが一つ必要です。さらに、定義され、値を割り振られた属性には `NF_PUT_ATT` ファミリーのメンバーへのコールが必要となります。定義モードから出て、データモードに入るには `NF_ENDDEF` と呼び出して下さい。

一度データモードに入ると、変数に新たなデータを加えたり、古い値を変更したり、既存の属性値を変更することができます（ただし、属性については格納スペースが増加しないことが条件です。）NetCDF 変数に単一の値を書き込むためには、書き込むデータ種によっては `NF_PUT_VAR1` ファミリーのメンバーが必要となります。`NF_PUT_VAR` ファミリーのメンバーを使用して変数の取るべき値をすべて一度に書き込むにもできます。変数の配列や配列断面は `NF_PUT_VARA` ファミリーを使って書き込めます。部分サンプルされた配列断面も `NF_PUT_VARS` ファミリーのメンバーを使うことによって書き込めます。マップされた配列断面も `NF_PUT_VARM` ファミリーのメンバーを使うことによって書き込めます。（部分サンプルやマップされたアクセスは通常のデータアクセス法の一つであり、後に説明します。

最後に、書き込むために開いた NetCDF ファイルは `NF_CLOSE` を使って必ずクローズしてください。ファイルシステムへのアクセスはデフォルトで NetCDF ライブラリによってバッファされています。ファイルがデータを書き込めるオープンされた状態でプログラムが異常終了した場合には、その回に加えた変更がすべて無効になる可能性があります。デフォルトでバッファしてしまうこの機能は、ファイルをオープンする際に、`NF_SHARE` フラグを立てることによって避けられます。フラグが立っていても、定義モードで行なわれた属性値の変更や定義モードで変更された事項は `NF_SYNC` または `NF_CLOSE` が呼び出されない限り、実行されません。

4.2 既知の名前の NetCDF ファイルを読む

ここでは NetCDF ファイルの名前ばかりでなく、それに含まれている次元・変数・属性の名前も既知である場合を取り上げます。（そうでない場合には「問い合わせ」呼び出しをする必要があります。）NetCDF ファイルの中の変数のデータを読むためのごく一般的な FORTRAN での呼び出しの順序は：

```
NF_OPEN           ! 既知の NetCDF ファイルをオープンする
...
NF_INQ_DIMID      ! 次元 ID を取得する
...
NF_INQ_VARID      ! 変数 ID を取得する
...
NF_GET_ATT        ! 属性値を取得
...
NF_GET_VAR        ! 変数の値を取得
...
NF_CLOSE          ! NetCDF ファイルをクローズする
```

まず、ファイルの名前を与えることにより、最初のコールが NetCDF ファイルをオープ

ンします。そして、その後、オープンされたファイルを参照するために必要な NetCDF ID を返します。

次に、NF_INQ_DIMID へのコールでアクセスする次元ごとに次元名に由来した次元 ID が割り振られます。同様に、必要な変数 ID も変数名に由来する名前が NF_INQ_VARID へのコールで決定されます。一旦、変数 ID を手に入れば、NetCDF ID、変数 ID、そして必要な属性名を使うことで、NF_GET_ATT ファミリーのなかのメンバーに対する入力として、変数の属性値も読み取れます（通常、それぞれの属性に対して NF_GET_ATT_TEXT もしくは、NF_GET_ATT_DOUBLE）。変数データの値は NetCDF ファイルから、直接アクセスすることができます。単一の値の場合には、NF_GET_VAR1 ファミリーのメンバーへのコールのよって、そして変数全体の場合には NF_GET_VAR ファミリーへ、または配列・部分サンプル・マップされたアクセスの場合には NF_GET_VARA, NF_GET_VARS, もしくは NF_GET_VARM ファミリーへのコールを使います。

最後に、NetCDF ファイルは NF_CLOSE によってクローズされます。読み取るだけのためにファイルを開いた場合にはクローズする必要はありません。

4.3 名前が未知の NetCDF ファイルを読む場合

変数の名前を前もって知らなくてもそのすべての変数を処理するようなプログラム（例えば総括的なソフトウェア）を作成することは可能です。同様に、次元や属性名も明らかではない場合もあります。

NetCDF のオブジェクトに関する他の情報も問い合わせ関数を使用して NetCDF ファイルから得られます。この関数は全 NetCDF ファイル・次元・変数・属性等の情報を返します。下記のテンプレートはそれらの使用法を示しています：

```
NF_OPEN                ! 既存の NetCDF ファイルをオープンする
...
NF_INQ                 ! 内容を調べる
...
NF_INQ_DIM             ! 次元名と次元長を得る
...
NF_INQ_VAR             ! 変数名・型・形状を得る
...
NF_INQ_ATTNAME        ! 属性名を得る
...
NF_INQ_ATT             ! 属性型と属性長を得る
...
NF_GET_ATT             ! 属性値を得る
...
NF_GET_VAR             ! 変数の値を得る
...
NF_CLOSE              ! NetCDF ファイルをクローズする
```

上記の例のようにコール一つで既存の NetCDF ファイルがオープンし、NetCDF ID を返します。この NetCDF ID は NF_INQ ルーチンに送られ、その操作によって次元数・変数

の数・グローバル属性の数・そして存在すれば無制限次元の ID が返されます。

この問い合わせ関数は手頃で、I/O を必要としません。それは、最初に NetCDF ファイルを開いた時に、提供する情報がメモリ内に格納されるからです。

次元 ID は 1 で始まる連続な整数を取り、一度割り当てられると消去することはできません。また、次元も定義されたら消去することはできません。ですから、NetCDF ファイル中の次元 ID の数を知るということはすべての次元 ID を知ることと同義になります。それらは 1, 2, 3, ... 等の整数で次元の数だけ存在します。各次元 ID に対しては、問い合わせ関数への `NF_INQ_DIM` で次元名と次元長が返されます。

変数 ID もまた連続した整数 1, 2, 3, ... で表され、変数の数だけ存在します。変数 ID は `NF_INQ_VAR` コールを使用して各変数に割り当てられた名前、型、形状および属性数を知ることができます。

一度ある変数の属性値が既知になると、`NF_INQ_ATTNAME` コールによって任意の変数に割り当てられた NetCDF ID・変数 ID・属性数を知ることができます。属性名が分かると、`NF_INQ_ATT` コールで属性型と属性長が分かります。型と長さから、属性値を格納するために十分なスペースを確保しておくことができます。次に、`NF_GET_ATT` ファミリーのメンバーへ呼び出すことにより変数値が返されます。

一度 NetCDF 変数の ID と形状が既知になると、データの値は単一の値の場合は `NF_GET_VAR1` ファミリーへの一員へのコール、そして複数の場合には、`NF_GET_VAR`, `NF_GET_VARA`, `NF_GET_VARS` または様々な種類の配列アクセス法に関しては `NF_GET_VARM` への呼び出すこととなります。

4.4 新たに次元・変数・属性を加える

既存の NetCDF ファイルには変更を加えることができます。すでに存在している次元・変数・属性などを新たに加えたり、名前を変更することも可能ですし、既存の属性は抹消することができます。次のコードのテンプレートは既存のファイルに新しい要素を加えるためのごく一般的な例です。

```
NF_OPEN          ! 既存の NetCDF ファイルをオープンする。
...
NF_REDEF         ! 定義モードに入る。
...
NF_DEF_DIM      ! (あれば) 新しい次元を定義し、加える。
...
NF_DEF_VAR      ! (あれば) 新しい変数を定義し、加える。
...
NF_PUT_ATT      ! (あれば) 新しい属性を定義し、加える。
...
NF_ENDDEF       ! 定義をチェックし、定義モードから出る。
...
NF_PUT_VAR      ! 新しい変数に値を与える。
...
```


NF_CLOSE

! NetCDF ファイルをクローズする。

NetCDF ファイルは、まず、NF_OPEN を呼び出すことによってオープンします。この呼び出しによって、オープンされたファイルは**データモード** (data mode) に入ります。このモードでは既存のデータ値にアクセスしたり変更を加えたりすることができます。また、属性値も (大きくならない限りにおいては) 変更できます。ただし、このモードでは何もたすことはできません。新しい NetCDF 次元・変数・属性を加えるには NF_REDEF を呼び出して**定義モード** (define mode) に入らなければなりません。定義モードでは、新しい次元を定義するためには NF_DEF_DIM を、新しい変数を加えるには NF_DEF_VAR を、そして古い変数や増大してしまった古い属性に新しい属性を与えるには NF_PUT_ATT ファミリーを呼び出します。

定義モードから出て、再びデータモードに入ることもできます。そこで、新しい定義に矛盾が無いか等をチェックし、ディスクに保存するには NF_ENDDEF を呼び出してください。データモードに戻りたくなければ、単に NF_CLOSE を呼び出してください。これは、最初に NF_ENDDEF を呼び出したことと同義になります。

NF_ENDDEF が呼び出される前であれば、NF_ABORT を呼び出すことによって、定義モードで行なったすべての再定義を無効にして NetCDF ライブラリを元のステータスに戻せます。また、この NF_ABORT を呼び出すことによって、NF_ENDDEF の呼び出しが失敗した場合に NetCDF ファイルを矛盾の無いステータスまで復帰させることができます。定義モードから NF_CLOSE を呼び出したら自動的に追従する NF_ENDDEF への呼び出しが失敗した際には、NF_ABORT が自動的に呼び出され、NetCDF ライブラリはクローズされ、元の矛盾の無い状態 (定義モードに入る前の状態) に戻ります。

一つのプロセスは書き込み用に一時に最大一個の NetCDF ファイルを開いていなければなりません。ライブラリは、統制の取れた NF_SYNC 関数の利用と NF_SHARE フラグを立てることによって、同時に単一の書き込みと複数の読み込み用に扱われることに対して限定されたサポートをしています。もし、書き込み側が定義モードに変更を加えれば (例: 新しい変数、次元、属性)、そのライブラリに対して読み込み側に対し同時にアクセスすることを防ぐ制約を外部から加える必要があり、また、読み込み側に対して次のアクセスの前に NF_SYNC を呼び出すように注意を促す必要が出てきます。

4.5 エラー処理

NetCDF ライブラリはエラー処理を柔軟に行なうのに必要な機能を揃えています。個々の NetCDF 関数は整数のステータス値を返します。もし、返されたステータス値によってエラーが発見されると、その処理方法をどのようにするかは自由です。関連するエラーメッセージを表示することから、エラー表示を無視して続行することも (後者は推奨しませんが) 可能です。簡単な例として、このマニュアル中の例はエラーステータスを調べ、エラーを処理するために別個の関数を呼び出すようになっています。

返された整数のエラーステータスをエラーメッセージ文字列に変換するために NF_STRERROR 関数が準備されています。

時に、low level I/O エラーが NetCDF ライブラリより下層で起こる可能性があります。例えば、ある書き込みオペレーションにより割り当てられたディスク容量を越えてしまった、あるいは既に存在しないデバイスに書き込もうとした場合に、NetCDF ライブラリより下層からエラーメッセージが表示されることがあります。しかしながら、結果として書き込みエラーは返されたステータス値に反映されます。

4.6 NetCDF ライブラリへのコンパイルとリンク

NetCDF の C や FORTRAN インターフェースを使用するプログラムのコンパイルと NetCDF ライブラリとリンクさせる方法はそれぞれの条件（オペレーティングシステム、使用するコンパイラ、NetCDF ライブラリやインクルードファイルの格納先など）により異なります。ここでは、UNIX プラットフォーム上で NetCDF ライブラリを使用するプログラムをコンパイルしリンクする例を挙げます。各自、使用する状況に応じてこれらの例を応用してください。

NetCDF 関数や定数を参照する FORTRAN ファイルには適切な INCLUDE 文を最初に参照する前に含んでいなければなりません：

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
```

FORTRAN コンパイラが必ず参照するディレクトリに netcdf.inc ファイルがインストールされていない限り、コンパイラを呼び出す際には `-I` オプションを使用し、netcdf.inc がインストールされているディレクトリを指定する必要があります。例えば：

```
f77 -c -I/usr/local/NetCDF/include myprogram.f
```

別の手段として、INCLUDE 文内に絶対パスを指定することもできます。しかし、この方法でプログラムを作成すると、NetCDF ファイルが異なる場所にインストールされているプラットフォーム上ではコンパイルできなくなってしまう。

NetCDF ライブラリが必ずリンクが参照する標準的なディレクトリにインストールされていない限り、`-L` と `-l` オプションを使用して NetCDF ライブラリを使用するオブジェクトファイルをリンクしなければなりません。例えば：

```
f77 -o myprogram myprogram.o -L/usr/local/NetCDF/lib -lnetcdf
```

別の手段として、ライブラリに絶対パスを指定することもできます：

```
f77 -o myprogram myprogram.o -l/usr/local/NetCDF/lib/libnetcdf.
```

5 ファイル

この章では、単独の NetCDF ファイルもしくは NetCDF ライブラリ全体に関する NetCDF 関数のインターフェースについて解説します。

オープンされていない NetCDF ファイルを参照する場合にはそのファイル名でのみ参照することが可能です。一度 NetCDF ファイルがオープンされた後には、**NetCDF ID** によって参照されます。NetCDF ID とはファイルを生成または開いた時に返される小さな非負の整数です。NetCDF ID は C におけるファイル記述子もしくは FORTRAN における論理装置番号によく似ています。単一のプログラムにおいては、オープンされた NetCDF ファイルの NetCDF ID はファイルごとに個別の値をとります。ある NetCDF ファイルが複数回オープンされた場合には複数の異なる NetCDF ID を持つこととなります。しかし、書き込み可能な NetCDF ファイルはオープンされたファイルのある一つの ID のファイルに限定されます。オープンされていた NetCDF ファイルがクローズされると、割り当てられていた NetCDF ID とそのファイル間の関連付けはなくなります。

NetCDF ライブラリを操作する関数には以下のものがあります：

- ・ ライブラリのバージョンの取得
- ・ 返されたエラーコードに呼応するエラーメッセージの取得

単一のオブジェクトとして NetCDF ファイルでサポートされている操作は以下の通りです。

- ・ ファイル名と上書き可能にするかどうかを指定しファイルを生成する。
- ・ ファイル名と読み／書き込みを指定し、アクセスのためにファイルをオープンする。
- ・ 次元・変数・属性を加えるために定義モードに入る。
- ・ 追加された内容の一貫性をチェックして定義モードを出る。
- ・ ファイルをクローズし、必要な場合にはディスクに書き込む。
- ・ 次元の数・変数の数・グローバル属性の数・存在するならば無制限次元の ID を取得する。
- ・ 最新の状態であるかどうかをディスクと同期して確認する。
- ・ 最適な連続書き込みのために *nofill* モードをセット／解除する。

この章では、NetCDF のインターフェースを表現するために使用される規約のまとめの後に、これらの操作のためのインターフェースについて詳細に記述します。

5.1 NetCDF ライブラリインターフェースについての記述

この章、及びこれに続く章の中で、それぞれのインターフェースでの NetCDF 関数についての解説には以下の項目が含まれます：

- ・ 関数の説明と目的
- ・ FORTRAN におけるその関数のプロトタイプ、関数の正式なパラメーターの型・順序の提示

- ・ FORTRAN インターフェースにおける各正式パラメーターの解説
- ・ 起こりうるエラーステータスと原因
- ・ その NetCDF 関数（時に他の関数も）を呼び出す FORTRAN プログラムの例

FORTRAN の関数プロト型と正式なパラメーターの定義では、出力パラメータ（返された値が格納される場所）は小文字で書かれ、大文字で書かれている入力パラメータと区別されています。

これらの例はエラーハンドリングに関する単純な規約に沿って、各 NetCDF 関数に対する呼び出しで返されたステータスをもらさずチェックし、エラーが発見されると `HANDLE_ERR` サブルーチンを呼び出します。そのようなサブルーチンの例は 5.2 節「エラーステータスに対応したエラーメッセージを得る：`nc_strerror`」(p. 34) にあります。

5.2 エラーステータスに対応したエラーメッセージを得る： `NF_STRERROR`

関数 `NF_STRERROR` は、他の NetCDF 関数を呼び出したときに返されであろう、整数 NetCDF エラーステータスまたはシステムエラー番号に対応するエラーメッセージ文字列に対し、ポインタを返します。NetCDF のエラーステータスのリストは各言語バインディング中の対応する内部ファイルにあります。

用法

```
CHARACTER*80 FUNCTION NF_STRERROR(INTEGER NCERR)
```

`NCERR` 以前の NetCDF 関数への呼び出しに対して返されたかもしれないエラーステータス

エラー

どの NetCDF エラーメッセージ、または、（システム `strerror` 関数によって理解される場所の）システムエラーメッセージのどれにも対応しない、無効な整数エラーステータスを入力すると、`nc_strerror` はそのようなエラーステータスが存在しない旨の文字列を出力します。

例

これは簡単なエラー取り扱いサブルーチンの例で、`NF_STRERROR` を使用し、任意の NetCDF 関数呼び出しによって返された NetCDF エラーステータスに対応するエラーメッセージを出力した後 `exit` します。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
SUBROUTINE HANDLE_ERR(STATUS)
  INTEGER STATUS
```

```

IF (STATUS .NE. NF_NOERR) THEN
  PRINT *, NF_STRERROR(STATUS)
  STOP 'Stopped'
ENDIF
END

```

5.3 NetCDF ライブラリバージョンを取得：NF_INQ_LIBVERS

関数 NF_INQ_LIBVERS は NetCDF ライブラリのバージョンと、いつ作成されたかを示す文字列を返します。

用法

```
CHARACTER*80 FUNCTION NF_INQ_LIBVERS()
```

エラー

この関数は引数を取らないのでこの呼び出しによってエラーは発生し得ません。

例

この例では NF_INQ_LIBVERS を使ってプログラムとリンクしている NetCDF ライブラリのバージョンを表示します。

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
PRINT *, NF_INQ_LIBVERS()

```

5.4 NetCDF ファイルの生成：NF_CREATE

この関数によって新規の NetCDF ファイルが生成されます。これによって返された NetCDF ID は他の NetCDF 関数呼び出しにおいてこのファイルを参照するために使用できます。書き込みアクセス用にオープンされ、定義モードになっている NetCDF ファイルに、新しい次元・変数・属性などを加えることができます。

生成モードのフラグによって、既存の同一名のファイルを上書きするか、あるいはファイルへのアクセスが共有されるかなどを指定できます。

用法

```

INTEGER FUNCTION NF_CREATE (CHARACTER*(*) PATH, INTEGER CMODE,
                           INTEGER ncid)

```

PATH 新しい NetCDF ファイルの名前

CMODE 生成モード。零値（または `NF_CLOBBER`）はデフォルトステータス（既存の同一名のファイルは上書きし、また、効率のためにアクセスをバッファリングおよびキャッシュを行う）を指定します。それ以外の場合は、生成モードは `NF_NO_CLOBBER`, `NF_SHARE`、または `IOR(NF_NO_CLOBBER, NF_SHARE)` です。`NF_NO_CLOBBER` フラグを立てることによって既存のファイルを上書きしないことを宣言できます。既に指定されたファイルが存在する場合には、エラー (`NF_EEXIST`) が返されます。`NF_SHARE` フラグはファイルに書き込む処理とファイルを読み取る処理が一つもしくは複数行なわれている場合に適当です。これによって、ファイルへのアクセスはバッファされず、キャッシュも制限されます。バッファ機構は連続アクセスに対して最適化されているので、データを連続的にアクセスしないプログラムにおいては `NF_SHARE` フラグを設定することによりパフォーマンスの向上が望めます。

ncid 出力された NetCDF ID

エラー

エラーが発生していない場合には、`NF_CREATE` は `NF_NOERR` の値を返します。エラーの原因として下記が挙げられます。

- 存在しないディレクトリを含むファイルを渡している。
- 既存のファイル名もしくはファイルを指定しながら、`NF_NO_CLOBBER` も同時に指定している。
- 生成モードにとって無意味な値を与えている。
- ファイルの作成が許可されていないディレクトリに新しい NetCDF ファイルを生成しようとしている。

例

この例では、`foo.nc` という名前の NetCDF ファイルを生成します。現行のディレクトリに同一名のファイルが存在しない場合に限り、新しいファイルを生成します。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER NCID, STATUS
...
STATUS = NF_CREATE('foo.nc', NF_NO_CLOBBER, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

5.5 アクセスするために NetCDF ファイルをオープンする： `NF_OPEN`

関数 `NF_OPEN` は既存の NetCDF ファイルとアクセスするためにオープンします。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_OPEN(CCHARACTER*(*) PATH, INTEGER OMODE, INTEGER ncid)
```

PATH	オープンする NetCDF ファイルのファイル名
OMODE	零値は（または <code>NF_NOWRITE</code> ）はデフォルトステータス（ファイルは読取専用オープンし、効率のためにバッファリング及びキャッシュする）を指定します。 それ以外の場合には、生成モードは <code>NF_WRITE</code> 、 <code>NF_SHARE</code> 、または <code>IOR(NF_WRITE, NF_SHARE)</code> です。 <code>NF_WRITE</code> フラグを設定することによりファイルを読取 - 書き込み両用にオープンします。（”書き込み”とはファイルに加え得るすべての変更を指し、データの付加または変更、次元・変数・属性の付加または名前の変更、属性の削除等の操作を含みます。） <code>NF_SHARE</code> フラグはファイルに書き込む処理とファイルを読み取る処理が一つもしくは複数行なわれている場合に適切です。これによって、ファイルへのアクセスはバッファをさえず、キャッシュも制限されます。バッファ機構は連続アクセスに対して最適化されているので、データを連続的にアクセスしないプログラムにおいては <code>NF_SHARE</code> フラグを設定することによりパフォーマンスの向上が望めます。
ncid	出力された NetCDF ID.

エラー

エラーが発生していなければ、`NF_OPEN` は `NF_NOERR` の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として下記が挙げられます。

- ・ 指定された NetCDF ファイルが存在しない。
- ・ 意味の無いモードが指定された。

例

この例は `NF_OPEN` を使って、既存の `foo.nc` という NetCDF ファイルを読取専用、非共有アクセス用にオープンします。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'  
...  
INTEGER NCID, STATUS  
...  
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', 0, NCID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

5.6 オープンされた NetCDF ファイルを定義モードにする：NF_REDEF

関数 `NF_REDEF` はオープンされた NetCDF ファイルを定義モードにし、次元・変数・属性などを付加またはそれらの名前を変更し、さらに属性を削除できるようにします。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_REDEF(INTEGER NCID)
```

NCID 以前の `NF_OPEN` or `NF_CREATE` 呼び出しで返された NetCDF ID。

エラー

エラーが発生していなければ、`NF_REDEF` は `NF_NOERR` の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として下記が挙げられます。

- ・ 指定された NetCDF ファイルが既に定義モードにある。
- ・ 指定された NetCDF ファイルは読取専用でオープンされている。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では `NF_REDEF` を使って、既存の `foo.nc` という NetCDF ファイルをオープンし、それを定義モードにします。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER NCID, STATUS
...
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_WRITE, NCID)    ! ファイルをオープンする
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_REDEF(NCID)                       ! 定義モードに入る
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

5.7 定義モードから抜ける：NF_ENDDEF

関数 `NF_ENDDEF` が呼ばれるとオープンされた NetCDF ファイルは定義モードから抜けまます。定義モード中に NetCDF ファイルに加えられた変更はチェックされ、問題がなければディスクに書き込まれます。この時、非記録変数を“フィル値”に初期化することも可能です。(5.12 節「書き込みのフィルモードを設定する：`nc_set_fill`」(p.45)を参照。)NetCDF ファイルはデータモードになり、変数データの読み取り・書き込みが可能になります。

この呼び出しは、場合によってデータをコピーする作業が含まれます。これに関しての

詳細は 9 章「NetCDF ファイルの構造と性能」(p. 101) にあります。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_ENDDEF(INTEGER NCID)
```

NCID 以前の NF_OPEN or NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID

エラー

エラーが発生していなければ、NF_ENDDEF は NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として下記が挙げられます。

- ・ 指定された NetCDF ファイルが定義モードに無い。
- ・ 指定された NetCDF ID が開いている NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例は NF_ENDDEF を使って foo.nc という NetCDF ファイルの定義モードを終了し、データモードにします。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER NCID, STATUS
...
STATUS = NF_CREATE('foo.nc', NF_NO_CLOBBER, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

... ! 次元・変数・属性を生成

STATUS = NF_ENDDEF(NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

5.8 オープンされた NetCDF ファイルをクローズする：NF_CLOSE

関数 NF_CLOSE は開いている NetCDF ファイルをクローズします。ファイルが定義モードにある場合には、クローズする前に NF_ENDDEF が呼び出されます。(この場合には、もし NF_ENDDEF がエラーを返せば、NF_ABORT が自動的に呼び出され、最後に定義モードに入った時の矛盾の無い状態に復旧します。) オープンされた NetCDF ファイルがクローズされた後は、その NetCDF ID は次にオープンされるまたは生成される NetCDF ファイルに割り当てることができます。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_CLOSE(INTEGER NCID)
```

NCID 以前のNF_OPEN or NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID。

エラー

エラーが発生していなければ、NF_CLOSE はNF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として下記が挙げられます。

- ・ 定義モードに入り、NF_ENDDEF への自動呼出しが失敗した。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では、NF_CLOSE を使って、新しいfoo.nc という NetCDF ファイルの定義モードを終了し、その NetCDF ID を開放します。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'  
...  
INTEGER NCID, STATUS  
...  
STATUS = NF_CREATE('foo.nc', NF_NO_CLOBBER, NCID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)  
  
... ! 次元・変数・属性を生成  
  
STATUS = NF_CLOSE(NCID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

5.9 オープンされた NetCDF ファイルについて問い合わせる：NF_INQ ファミリー

関数NF_INQ のファミリーは NetCDF ID を与えられオープンされた NetCDF ファイルに関する情報を返します。ファイル問い合わせ関数は定義モードとデータモードのどちらからでも呼び出すことができます。最初の関数NF_INQ は次元の数・変数の数・グローバル属性の数・無制限長で定義された次元があればその次元 ID を返します。このファミリーの他の関数はこれらのうちどれか一つの情報を返します。

FORTRAN では、これに属する関数には NF_INQ、NF_INQ_NDIMS、NF_INQ_NVARS、NF_INQ_NATTS、NF_INQ_UNLIMDIM があります。

これらの関数が呼び出されても、必要な情報はオープンされた個々の NetCDF ファイルについてメモリ上にあるので、I/O は行われません。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ          (INTEGER NCID, INTEGER ndims,  
                                INTEGER nvars,INTEGER ngatts,  
                                INTEGER unlimdimid)  
  
INTEGER FUNCTION NF_INQ_NDIMS   (INTEGER NCID, INTEGER ndims)  
  
INTEGER FUNCTION NF_INQ_NVARS   (INTEGER NCID, INTEGER nvars)  
  
INTEGER FUNCTION NF_INQ_NGATTS  (INTEGER NCID, INTEGER ngatts)  
  
INTEGER FUNCTION NF_INQ_UNLIMDIM (INTEGER NCID, INTEGER unlimdimid)
```

NCID	以前の NF_OPEN or NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID。
ndims	この NetCDF ファイルで定義されている、返された次元数
nvars	この NetCDF ファイルで定義されている、返された変数の数
ngatts	この NetCDF ファイルで定義されている、返されたグローバル属性の数
unlimdimid	この NetCDF ファイルで定義されている無制限長の次元（存在すれば）の返された ID。無制限長の次元が存在しなければ、-1 の値が返されます。

エラー

エラーが発生していなければ、NF_INQ のファミリーはすべて NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因としては下記が挙げられます。

- 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では NF_INQ を使って、foo.nc という NetCDF ファイルに関する情報を得ます。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'  
...  
INTEGER STATUS, NCID, NDIMS, NVAR, NGATT, UNLIMDIMID  
...  
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)  
...  
STATUS = NF_INQ(NCID, NDIMS, NVAR, NGATT, UNLIMDIMID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

5.10 オープンされた NetCDF ファイルをディスクに同期させる： NF_SYNC

関数 `NF_SYNC` はメモリ内バッファと NetCDF ファイルのディスク上コピーとを同期させる方法を提供します。書き込み後に同期させたい理由としては2つ挙げられます。

- ・ 異常終了の場合のデータ損失を最低限に抑える。
- ・ 書き込まれた直後から他の処理においてデータをアクセス可能にする。しかしながら、既にファイルを開いている処理に関しては、書き込み処理が `NF_SYNC` を呼び出すときに記録数が増加していることはわからないことに注意してください。その処理が記録数の増加を知るためには、読み取り処理が `NF_SYNC` を呼び出さなくてはならない。

この関数は NetCDF ライブラリの以前のバージョンと後方互換性があります。その目的は、一つの NetCDF ファイルを複数の読み込みと単一の書き込みの間で共有可能にすることにあります。書き込み側は書き込み後に `NF_SYNC` を呼び出し、読み取る場合は読み取る前に毎回 `NF_SYNC` を呼び出します。書き込み側では、この操作によってバッファされているものがすべてディスク上に移動します。読み取り側では、この操作によって次に読み取られる記録が以前にキャッシュされたバッファからではなく、ディスクからの読み取りであることが保証されます。これによって、読み取り側はファイルをクローズして新たにオープンすることなく、書き込み操作によって加えられた変更を見ることができます（例えば書き込まれた記録数）。わずかなデータ量をアクセスする場合には、書き込み後にいちいちディスクと同期させることは、バッファすることの有用性を手放すことになり、コンピュータ資源のコストを上げてしまいます。

共有を簡単にするために（そして推奨される方法は）、書き込み・読み取り共にファイルを `NF_SHARE` フラグを立ててオープンすることです。そうすれば `NF_SYNC` を呼び出す必要は全くなくなります。しかし、異なる処理間において少数の NetCDF アクセスのみを同期させる場合には、`NF_SYNC` 関数は `NF_SHARE` フラグよりもより細かい粒度を持ちます。

従属的なデータ（属性値など）に加えられた変更にも注意する必要があります。これらは `NF_SHARE` フラグによっては自動的に伝達されません。このためには `NF_SYNC` 関数を使わなければなりません。

書き込み側がデータの設計を変えるために定義モードに入った時にファイルを共有する場合は特に注意しなくてはなりません。以前のバージョンでは、書き込み側が定義モードを抜けると、変更は新ファイルに加えられたために、読み込み側は旧ファイルを参照したままでした。読み込み側が変更を見るためにはファイルを一度クローズしてオープンしなおさなければなりませんでした。それによって、変更されたファイルが手元にあっても、読み込み側の内部テーブルが新しいファイルの設計と一致していないことには読み込み側には伝わりません。再定義後にも NetCDF ファイルが共有されるためには、再定義中に読み込み側がデータにアクセスするのを防ぎ、次にアクセスする前に読み込み側に `NF_SYNC` を呼び出させる、何らかの NetCDF ライブラリ以外のメカニズムが必要になります。

NF_SYNC を呼び出すとき、NetCDF ファイルはデータモードになくてもなりません。定義モードの NetCDF ファイルは NF_ENDDEF が呼び出されたときにのみディスクと同期します。他の処理によって書き込まれている NetCDF ファイルを読み取る処理は、NF_SYNC を呼び出すことによって、ファイルをクローズして再度オープンすることなく、書き込み処理によって変えられた最新の変更（例えば、書かれた記録数）に関する情報を得られます。

NetCDF ファイルをクローズした時、または定義モードから抜けるたびに、データは自動的にディスクと同期します。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_SYNC(INTEGER NCID)
```

NCID 以前の NF_OPEN or NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID

エラー

エラーが発生していなければ、NF_SYNC は NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として下記が挙げられます。

- NetCDF ファイルが定義モードにある。
- 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では NF_SYNC を使って、foo.nc という NetCDF ファイルのディスク書き込みを同期させます。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER STATUS, NCID
...
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
! データを書き込む、または属性を変更する
...
STATUS = NF_SYNC(NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

5.11 最新の定義を取り消す：NF_ABORT

この関数は陽に、呼び出す必要はありません。ファイルが定義モード中に不具合が生じて変更を決定できない場合には、NF_CLOSE によって自動的に呼び出されます。関数

NF_ABORT は定義モードに無い場合には、単に NetCDF ファイルをクローズします。もし、ファイルが生成されている最中で、まだ定義モードにある場合には、ファイルは削除されます。NF_REDEF への呼び出しによって定義モードに入った場合には、NetCDF ファイルは定義モードに入る以前のステータスに復旧され、ファイルはクローズされます。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_ABORT(INTEGER NCID)
```

NCID 以前の NF_OPEN or NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID。

エラー

エラーが発生していなければ、NF_ABORT は NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として下記が挙げられます。

- NetCDF ファイル生成中に定義モードから呼ばれた際、ファイルの削除が失敗した。
- 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では NF_ABORT を使って、foo.nc というファイルの再定義を中止します。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER STATUS, NCID, LATID
...
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_REDEF(NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_DEF_DIM(NCID, 'LAT', 18, LATID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) THEN ! 次元定義失敗
    CALL HANDLE_ERR(STATUS)
    STATUS = NF_ABORT(NCID) ! 再定義中止
    IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
ENDIF
...
```

5.12 書き込みのフィルモードを設定する：NF_SET_FILL

この関数は以下に述べる状況下での書き込みを最適化するための高度な利用を目的としています。関数 NF_SET_FILL は書き込み用にオープンされた NetCDF ファイルの**フィルモード** (fill mode) を設定し、戻り値として現行のモードを返します。フィルモードは

NF_FILL または NF_NOFILL のどちらでも設定でき、NF_FILL に対応したデフォルトステータスはデータがフィル値によって既に埋められているというものです。即ち、非記録型変数を生成する際、もしくは未だに書き込まれていないデータを超えた値を記入する際に、フィル値が記入されます。これによって書き込まれる前にデータを読み取ってしまうことを感知できます。フィル値の使用法の詳細については、7.16 節「フィル値」(p. 83)を参照して下さい。独自のフィル値の定義の仕方については 8.1 節「属性の規約」(p. 86)を参照して下さい。

NF_NOFILL に対応する動作は、データをフィル値で満たそうとするデフォルト動作を無効にします。これによって、NetCDF ライブラリがフィル値を書き込み、さらにそれらの値が後にデータによって上書きされるという二重の操作を避けることができ、パフォーマンスが向上します。

戻り値によって NetCDF ファイルがどのモードにあったかということが分かります。この値を利用して、オープンされた NetCDF ファイルのフィルモードを一時的に変更し、後で元のモードに復旧させることができます。

オープンされた NetCDF ファイルを NF_NOFILL モードにした後は、後で読み取られるすべての位置に有効なデータが書き込まれていることを確認してください。nofill モードは書き込み用にオープンされた NetCDF ファイルの一時的な性質でしかない点に注意してください。ファイルを一度クローズして再度開いたときには、デフォルト動作に戻ります。また、フィルモードを陽に NF_NOFILL に設定するために、再び NF_SET_FILL を呼び出すことによってデフォルト動作に戻ることができます。

nofill モードを設定することが有益な場合が 3 つあります。

1. NetCDF ファイルを生成・初期化するとき。この場合には NF_ENDDEF を呼び出す前に nofill モードを設定しましょう。その後、非記録型変数と初期化したい記録変数の初期値を**完全に**書き込んで下さい。
2. 既存の記録指向の NetCDF ファイルを拡張する時。書き込み用にファイルを開いた後に、nofill モードを設定し、追加する記録を漏れなく付加します。間に書き込まれていない記録が存在してはいけません。
3. 既存の NetCDF ファイルに初期化する予定の新しい変数を追加するとき。NF_ENDDEF を呼び出す前に nofill モードを設定し、新しい変数を完全に書き込んで下さい。

もし、NetCDF ファイルが無制限次元を持ち、最後の記録が nofill モードにおいて書き込まれた場合には、nofill モードが設定されていない場合に比べてファイルが短い可能性があります。しかし、これは NetCDF インターフェースを通してのみデータアクセスすれば完全に透過性は保たれます。

将来のリリースでは、この機能はなくなっている（または不必要である）かもしれません。プログラマーはこの機能に必要以上に頼らないことが望ましいでしょう。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_SET_FILL(INTEGER NCID, INTEGER FILLMODE,  
                             INTEGER old_mode)
```

NCID	以前の NF_OPEN or NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
FILLMODE	ファイルの取るべきフィルモード。NF_NOFILL または NF_FILL
old_mode	この呼び出し以前の返された現行のフィルモードの位置を示すポインタ。NF_NOFILL または NF_FILL

エラー

エラーが発生していなければ、NF_SET_FILL は NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として下記が挙げられます。

- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。
- ・ 指定された NetCDF ID が読み取り専用でオープンされたファイルを参照している。
- ・ フィルモード引数が NF_NOFILL または NF_FILL のどちらでもない。

例

この例では NF_SET_FILL を使って、foo.nc という NetCDF ファイルの連続書き込みの nofill モードを設定します。

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER NCID, STATUS, OMODE
...
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
! デフォルトの prefill 設定でデータを書き込む
...
OMODE = NF_SET_FILL(NCID, NF_NOFILL)
...
! prefill 無しでデータを書き込む
...

```


6 次元

NetCDF ファイルの次元はファイルが作成されると同時に定義され、NetCDF ファイルが定義モード中に行われます。後に次元数を増やしたい場合などには定義モードに再び入れれば良いです。NetCDF 次元には次元名と次元長が存在します。一つの NetCDF ファイルは最大で一つの unlimited (無制限) 次元を持つことができます。この次元を使用する変数はこの次元沿いには無制限に伸ばすことができます。

一つの NetCDF ファイルには定義できる次元数に上限 (100) が推奨されています。この上限値は 事前に定義されたマクロ `NF_MAX_DIM` です。上限値を規定する目的は一般的なアプリケーションをより簡潔に作成できる点にあります。それらのアプリケーションでは `NF_MAX_DIMS` 配列を用意することによって任意の NetCDF ファイルを扱うことができます。NetCDF ライブラリの実装においてはこの勧告された上限値は強制項目ではありません。したがって、必要に応じてそれ以上の次元数を使用することも可能です。しかし、勧告された上限値を仮定した NetCDF ユーティリティは、その結果生じる NetCDF ファイルを扱えなくなる可能性もあります。

通常、次元名と次元長は次元がはじめて定義されるときに固定されます。後に次元名を変更することは可能ですが、(無制限次元以外の)次元長を増やす手段は、既存のファイルの内容を新たに次元長を固定した新しい NetCDF ファイルにコピーする以外にはありません。

オープンされた NetCDF ファイル中の NetCDF 次元は **次元 ID**(dimension ID) と呼ばれる小さい整数によって参照されています。FORTRAN インターフェースでは、次元 ID は定義された順に 1, 2, 3, ..., となります。

次元に対してサポートされている操作は以下の通りです。

- ・ 次元名と次元長を与えて次元を作成する。
- ・ 次元名から次元 ID を取得する。
- ・ 次元の ID から次元名と次元長を取得する。
- ・ 次元の名前を変更する。

6.1 次元を生成する： `NF_DEF_DIM`

関数 `NF_DEF_DIM` 等は定義モード中であれば、新しい次元をオープンされた NetCDF ファイルに加えることができます。NetCDF の ID、次元名、次元長を与えると、(引数として)次元 ID を返します。最大で一つの無制限次元(記録次元)が NetCDF ファイルごとに定義できます。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_DEF_DIM (INTEGER NCID, CHARACTER*(*) NAME,  
                             INTEGER LEN, INTEGER dimid)
```

NCID	以前の <code>NF_OPEN</code> or <code>NF_CREATE</code> 呼び出しで返された NetCDF ID
NAME	次元名。アルファベットの文字で始まり、次にアンダースコア ('_') を含む 0 個以上の英数字が続く。大文字小文字は区別されません。
LEN	次元長。この次元をインデックスとして使用する変数に対して、この次元が持ちうる値の数。正の整数 (<code>size_t</code> 型) もしくは事前に定義された定数 <code>NF_UNLIMITED</code>
dimid	返された次元 ID

エラー

エラーが発生していなければ、`NF_DEF_DIM` は `NF_NOERR` の値を返します。それ以外の場合には返されたステータスがエラーの発生を示します。エラーの原因としては：

- NetCDF ファイルが定義モードにない。
- 指定された次元名は別の既存の次元名である。
- 指定された次元長が零より大きくない。
- 指定された次元長は無制限であるが、その NetCDF ファイル内に既に無制限の次元長を持つ次元が定義されている。
- 指定された NetCDF ID がオープンされている NetCDF ファイルを参照しない。

例

これは `NF_DEF_DIM` 機能を使用して次元名 `lat`・次元長 18、そして次元名 `rec`・次元長無制限の二つの次元を持つ新しい `foo.nc` という NetCDF ファイルを生成する例です：

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER STATUS, NCID, LATID, RECID
...
STATUS = NF_CREATE('foo.nc', NF_NO_CLOBBER, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_DEF_DIM(NCID, 'lat', 18, LATID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_DEF_DIM(NCID, 'rec', NF_UNLIMITED, RECID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

6.2 次元名から次元 ID を取得する： `NF_INQ_DIMID`

関数 `NF_INQ_DIMID` は次元名を与えると、(引数として) NetCDF の次元 ID を返します。仮に `ndims` ある NetCDF ファイルに定義された次元数だとすると、それぞれの次元の ID は 1 と `ndims` の間の値を取ります。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_DIMID (INTEGER NCID, CHARACTER*(*) NAME,  
                               INTEGER dimid)
```

NCID	以前の NF_OPEN or NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
NAME	次元名。アルファベットの文字で始まり、次にアンダースコア ('_') を含む 0 個以上の英数字が続きます。大文字小文字は次元名において区別されます
dimid	返された次元 ID

エラー

エラーが発生していなければ、NF_INQ_DIMID は NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーの発生を示します。エラーの原因としては：

- ・ 指定された次元名に対応する次元名が NetCDF ファイル内に存在しない。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

これは NF_INQ_DIMID を使用して次元名 lat の次元 ID を取得する例です。この lat は以前に foo.nc という NetCDF ファイル内で定義されているという仮定です：

```
INCLUDE 'netcdf.inc'  
...  
INTEGER STATUS, NCID, LATID  
...  
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)  
...  
STATUS = NF_INQ_DIMID(NCID, 'lat', LATID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

6.3 次元について問い合わせる：NF_INQ_DIM ファミリー

この関数のファミリーは NetCDF 次元についての情報を返します。次元に関するの情報には次元名と次元長があります。無制限長の次元の長さは、存在していれば、その段階までに書かれた記録の数です。

このファミリーに属する関数は NF_INQ_DIM, NF_INQ_DIMNAME そして NF_INQ_DIMLEN があります。関数 NF_INQ_DIM はその次元についてのすべての情報を返します。他の機能はその次元についてある一つの情報を返します。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_DIM      (INTEGER NCID, INTEGER DIMID,  
                                CHARACTER*(*) name, INTEGER len)
```

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_DIMNAME (INTEGER NCID, INTEGER DIMID,  
                                CHARACTER*(*) name)
```

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_DIMLEN  (INTEGER NCID, INTEGER DIMID,  
                                INTEGER len)
```

NCID	以前の NF_OPEN or NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
DIMID	以前の NF_INQ_DIMID もしくは NF_DEF_DIM 等への呼び出しからの次元 ID
name	返された 次元名。呼び出すにはあらかじめスペースを割り当てておく必要があります。次元名の文字数の最大長は、事前に定義した定数 NF_MAX_NAME によって決まります。
len	返された次元長。無制限次元においてこれは、この次元を使用して書かれた変数が使用している最大値、即ち、最大の記録数です。

エラー

これらの関数はエラーが発生していない場合には NF_NOERR 値を返します。それ以外の表示が出た場合は、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因としては：

- ・ 指定された NetCDF ファイルに対して次元 ID が無効である。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされている NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では NF_INQ_DIM を使用して既存の NetCDF ファイル foo.nc の lat と名づけられた次元の長さとして無限長次元の現在の長さを求めます：

```
INCLUDE 'netcdf.inc'  
...  
INTEGER STATUS, NCID, LATID, LATLEN, RECID, NRECS  
CHARACTER*(NF_MAX_NAME) LATNAM, RECNAM  
...  
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)  
! 無制限次元の ID 取得  
STATUS = NF_INQ_UNLIMDIM(NCID, RECID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)  
...  
STATUS = NF_INQ_DIMID(NCID, 'lat', LATID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)  
! lat の長さ取得
```

```

STATUS = NF_INQ_DIMLEN(NCID, LATID, LATLEN)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
! 無制限次元の名前と現在の長さ取得
STATUS = NF_INQ_DIM(NCID, RECID, RECNAME, NRECS)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

6.4 次元の名前を変更する：NF_RENAME_DIM

関数 `NF_RENAME_DIM` はオープンされた書きこみ状態にある NetCDF ファイル中の次元の名前を変更します。新しい名前が古い名前よりも長い場合には NetCDF ファイルは定義モードになければなりません。他に同名の次元がある場合にはその名前に変更することはできません。

用法

```

INTEGER FUNCTION NF_RENAME_DIM (INTEGER NCID, INTEGER DIMID,
                                CHARACTER*(*) NAME)

```

NCID	以前の <code>NF_OPEN</code> or <code>NF_CREATE</code> 呼び出しで返された NetCDF ID
DIMID	以前の <code>NF_INQ_DIMID</code> または <code>NF_DEF_DIM</code> 呼び出しによって返された次元 ID
NAME	新規の次元名

エラー

エラーが発生していない場合には関数 `NF_RENAME_DIM` は `NF_NOERR` 値を返します。それ以外の場合には返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因としては：

- ・ 新規の次元名がすでに他の次元名に使用されている。
- ・ 指定された NetCDF ファイルに対して次元 ID が無効である。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされている NetCDF ファイルを参照していない。
- ・ 新規の次元名が旧次元名よりも長く、さらに NetCDF ファイルが定義モードに入っていない。

例

この例では `NF_RENAME_DIM` を使用して既存の NetCDF ファイル `foo.nc` 中の次元 `lat` を `latitude` に変更します：

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER STATUS, NCID, LATID
...
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

```
...
! 次元の名前を変更するために定義モードに入る
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_INQ_DIMID(NCID, 'lat', LATID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_RENAME_DIM(NCID, LATID, 'latitude')
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
! 定義モードから抜ける
STATUS = NF_ENDDEF(NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

7 変数

NetCDF ファイルにおける変数は、NetCDF ファイルが生成され、定義モードにあるときに定義されます。再度、定義モードに入ることによって変数を追加することができます。NetCDF 変数には名前、型、及び形があり、変数が定義されるときに指定されます。変数は値を持つこともでき、後にデータモードにある時に確定されます。

通常、変数が最初に定義された段階で名前、型、及び形は固定されますが、名前は後から変更できます。しかし、変数の型と形は変更できません。無限長次元を使用して定義された変数はその次元に沿っては無限に成長できます。

オープンされた NetCDF ファイル中の NetCDF 変数は**変数 ID** (variable ID) という小さな整数によって参照されます。

変数 ID は NetCDF ファイル中に定義された順番になっています。よって、変数 ID は 1, 2, 3, ... という値を取ります。変数 ID から変数名を取得、またその逆をもできる関数が備わっています。

単位などの性質を指定するために変数に属性 (8 章「属性」(p. 86)) を関連付けることもできます。

変数に対してサポートされている機能は：

- ・ 名前・データ型・形を与えて変数を生成する。
- ・ 名前から変数 ID を取得する。
- ・ 変数 ID から変数の名前・データ型・形・属性の数を取得する。
- ・ 変数 ID・番号・値を与えて変数に値を入れる。
- ・ 変数 ID・角の座標・縁の長さ・値のかたまりを与えて変数に値の配列を入れる。
- ・ 変数 ID・角の座標・縁の長さ・ストライドベクトル・インデックスマッピングベクトル・値のかたまりを与えて部分サンプルされたまたはマッピングされた配列断面を変数に入れる。
- ・ 変数 ID と番号を与えて変数からデータの値を取得する。
- ・ 変数 ID・角の座標・縁の長さを与えて変数から値の配列を取得する。
- ・ 変数 ID・角の座標・縁の長さ・ストライドベクトル・インデックスマッピングベクトルを与えて部分サンプルされたまたはマップされた配列断面を取得する。
- ・ 変数の名前を変更する。

7.1 NetCDF 外部データ型に対応した言語の型

下の表には変数を FORTRAN インターフェースで定義するために必要な NetCDF 外部データ型とそれに対応する型の定数を示してあります。

NetCDF/CDL Data Type	FORTTRAN API Mnemonic	Bits
byte	NF_BYTE	8
char	NF_CHAR	8
short	NF_SHORT	16
int	NF_INT	32
float	NF_FLOAT	32
double	NF_DOUBLE	64

1 列目には NetCDF 外部データ型がリストされていますが、これは CDL データ型と同じです。2 列目は NetCDF 関数で使用する対応する FORTRAN パラメーター（パラメーターは NetCDF FORTRAN インクルードファイル `netcdf.inc` で定義されている）です。最後の列は対応する型の値を外部表記するために使用されるビット数です。

なお、現行の NetCDF ライブラリには 64 ビット整数または複数バイトの文字に対応する NetCDF 型はありません。

7.2 変数を生成する：NF_DEF_VAR

関数 `NF_DEF_VAR` は定義モードにあるオープンされた NetCDF ファイルに新たに変数を追加します。NetCDF ID・変数名・変数型・次元数・次元 ID のリストを与えると、（引数として）変数 ID を返します。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_DEF_VAR(INTEGER NCID, CHARACTER*(*) NAME,
                           INTEGER XTYPE, INTEGER NVDIMS,
                           INTEGER VDIMS(*), INTEGER varid)
```

NCID	以前の <code>NF_OPEN</code> or <code>NF_CREATE</code> 呼び出しで返された NetCDF ID
NAME	変数名。アルファベット文字で始まり、アンダースコア（ <code>'_'</code> ）を含む零もしくは英数字が続かなければなりません。大文字小文字は区別されます。
XTYPE	変数の外部型。前もって定義された NetCDF 外部データ型の集合のひとつ： <code>NF_BYTE</code> , <code>NF_CHAR</code> , <code>NF_SHORT</code> , <code>NF_INT</code> , <code>NF_FLOAT</code> または <code>NF_DOUBLE</code> です。

NVDIMS	変数の次元の数。例えば、2 は行列、1 はベクトル、0 はをの変数が次元のないスカラーであることを表します。この値は負であったり、前もって定義された 定数 NF_MAX_VAR_DIMS より大きくてもいけません。
VDIMS	変数の次元に対応する次元 ID NVDIMS のベクトル。無制限次元の ID が含まれる場合にはそれが最後の次元でなければなりません。この引数は NVDIMS が 0 の場合には無視されます。
varid	返された変数 ID

エラー

エラーが発生していなければ NF_DEF_VAR 関数は NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合は、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因としては：

- NetCDF ファイルが定義モードになっていない。
- 指定された変数名は既存の別な変数の名前である。
- 指定された型が有効な NetCDF 型ではない。
- 指定された次元の数が負、もしくは NetCDF 変数に許された最大の次元の数を表す定数 NF_MAX_VAR_DIMS より大きい。
- 次元のリストの中の 次元 ID のひとつ、もしくはそれ以上が NetCDF ファイル中で有効ではない次元 ID である。
- 変数の数が NetCDF 変数に許された最大の次元の数を表す定数 NF_MAX_VARS より大きい。
- 指定された NetCDF ID が開いている NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では NF_DEF_VAR を使用して、新しい foo.nc という名前の NetCDF ファイル中に、time, lat, lon の 3 つの次元を持つ、変数名 rh の倍精度型の変数を生成します：

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER STATUS, NCID
INTEGER LATDIM, LONDIM, TIMDIM ! 次元 IDs
INTEGER RHID ! 変数 ID
INTEGER RHDIMS(3) ! 変数の形
...
STATUS = NF_CREATE ('foo.nc', NF_NOCLOBBER, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
! 次元を定義
STATUS = NF_DEF_DIM(NCID, 'lat', 5, LATDIM)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_DEF_DIM(NCID, 'lon', 10, LONDIM)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_DEF_DIM(NCID, 'time', NF_UNLIMITED, TIMDIM)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

```

...
! 変数を定義
RHDIMS(1) = LONDIM
RHDIMS(2) = LATDIM
RHDIMS(3) = TIMDIM
STATUS = NF_DEF_VAR (NCID, 'rh', NF_DOUBLE, 3, RHDIMS, RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

7.3 変数名から変数 ID を取得する : NF_INQ_VARID

関数 NF_INQ_VARID は変数名を与えると NetCDF 変数の ID を返します。

用法

```

INTEGER FUNCTION NF_INQ_VARID(INTEGER NCID, CHARACTER*(*) NAME,
                              INTEGER varid)

```

NCID	以前の NF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
NAME	取得したい ID の変数名
varid	返された変数 ID

エラー

関数 NF_INQ_VARID はエラーが発生していなければ NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因としては：

- ・ 指定された変数名が指定された NetCDF ファイル内で有効な変数名ではない。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では NF_INQ_VARID を使用して rh という名の変数の ID を既存の NetCDF ファイル foo.nc 内で探します：

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER STATUS, NCID, RHID
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

7.4 ID から変数の情報を取得する : NF_INQ_VAR ファミリー

この関数のファミリーは変数の ID を与えるとその NetCDF 変数に関する情報を返します。変数に関する情報にはその名前・型・次元の数・変数の形を表す変数 ID のリスト・変数に割り当てられている変数属性の数等です。

関数 NF_INQ_VAR はある変数の ID を与えると NetCDF 関数に関する情報をすべて返します。その他の関数はある変数に関する一つの情報を返します。

この他の関数とは NF_INQ_VARNAME, NF_INQ_VARTYPE, NF_INQ_VARNDIMS, NF_INQ_VARDIMID, NF_INQ_VARNATTS 等です。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_VAR (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                             CHARACTER*(*) name, INTEGER xtype,  
                             INTEGER ndims, INTEGER dimids(*),  
                             INTEGER natts)
```

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_VARNAME (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                 CHARACTER*(*) name)
```

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_VARTYPE (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                 INTEGER xtype)
```

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_VARNDIMS (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                 INTEGER ndims)
```

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_VARDIMID (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                 INTEGER dimids(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_VARNATTS (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                 INTEGER natts)
```

NCID	以前の NF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID。
VARID	変数 ID
name	返された 変数名。あらかじめ返される名前のためのスペースを確保しておく必要があります。変数名の最大文字数はあらかじめ定義された定数 NF_MAX_NAME で表されます。
xtype	返された変数の外部型で、あらかじめ定義された NetCDF 外部データ型の集合の一つ。有効な NetCDF 外部データ型は NF_BYTE, NF_CHAR, NF_SHORT, NF_INT, NF_FLOAT, と NF_DOUBLE です。
ndims	この変数に対して返された次元の数。例えば、2 は行列、1 はベクトル、ゼロはその変数が無次元のスカラーであることを示します。

`dimids` 返された 変数の次元に対応する次元 ID `NDIMS` のベクトル。あらかじめ `NDIMS` 整数のベクトル用のスペースを確保する必要があります。変数が取れる最大の次元数はあらかじめ定義された定数 `NF_MAX_VAR_DIMS` によって表されます。

`natts` 返されたこの変数に割り当てられた変数属性の数

エラー

これらの関数はエラーが発生していない場合には `NF_NOERR` 値を返します。それ以外の場合は、返されたステータスがエラーの発生を示します。エラーの原因としては：

- ・ 変数 ID が指定された NetCDF ファイルに対して有効ではない。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

これは `NF_INQ_VAR` を使用して NetCDF ファイル `foo.nc` の中の `rh` という変数に関するの情報を探す例です。

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER  STATUS, NCID
INTEGER  RHID           ! 変数 ID
CHARACTER*31 RHNAME     ! 変数名
INTEGER  RHTYPE        ! 変数型
INTEGER  RHN           ! 次元の数
INTEGER  RHDIMS(NF_MAX_VAR_DIMS) ! 変数の形
INTEGER  RHNATT        ! 属性の数
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID) ! get ID
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_INQ_VAR (NCID, RHID, RHNAME, RHTYPE, RHN, RHDIMS, RHNATT)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

7.5 単一のデータ値を書きこむ： `NF_PUT_VAR1_type`

関数 `NF_PUT_VAR1_type` は指定された型 (`type`) の単一のデータ値をオープンされたステータスでデータモードにある NetCDF ファイルの変数に書きこみます。入力には NetCDF ID・変数 ID・書き加えまたは変更するインデックス・データ値です。必要な場合には、その値は変数の外部データ型に変換されます。

用法

```
INTEGER FUNCTION  NF_PUT_VAR1_TEXT(INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                   INTEGER INDEX(*), CHARACTER CHVAL)  
  
INTEGER FUNCTION  NF_PUT_VAR1_INT1(INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                   INTEGER INDEX(*), INTEGER*1 I1VAL)  
  
INTEGER FUNCTION  NF_PUT_VAR1_INT2(INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                   INTEGER INDEX(*), INTEGER*2 I2VAL)  
  
INTEGER FUNCTION  NF_PUT_VAR1_INT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                   INTEGER INDEX(*), INTEGER   IVAL)  
  
INTEGER FUNCTION  NF_PUT_VAR1_REAL(INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                   INTEGER INDEX(*), REAL      RVAL)  
  
INTEGER FUNCTION  NF_PUT_VAR1_DOUBLE(INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                   INTEGER INDEX(*), DOUBLE   DVAL)
```

NCID 以前の NF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID

VARID 変数 ID

INDEX 書きこまれるデータ値のインデックス。インデックスは 1 に相対的なものであり、例えば 2 次元の変数の最初のデータ値のインデックスは (1, 1) になります。インデックスの要素は変数の次元に対応しなければなりません。よって、変数が記録変数であれば、最後のインデックスは記録数に対応します。

CHVAL, I1VAL, 書きこまれるデータ値。データ値は呼び出し関数に対応した型でなければなりません。文字 (CHARACTER) データ値を数値変数に書き込んだり、数値データを文字変数書きこむことは出来ません。数値データが NetCDF 変数型と異なる場合には型 (type) 変換が行われま
I2VAL, IVAL, す。詳細については 3.3 節「型変換」(p. 24) を参照してください。
RVAL, DVAL

エラー

関数 NF_PUT_VAR1_type はエラーが発生していない場合には NF_NOERR 値を返します。それ以外の場合は返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因としては：

- ・ 変数 ID が指定された NetCDF ファイルでは有効ではない。
- ・ 指定されたインデックスが指定された変数のランクの範囲外である。例えば、負のインデックスや対応する次元長より大きなインデックスを与えるとエラーを発生させる。
- ・ 指定された値が変数の外部データ型で表現できる範囲外である。
- ・ 指定された NetCDF ファイルがデータモードではなく定義モードにある。
- ・ 指定された NetCDF ID はオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では `NF_PUT_VAR1_DOUBLE` を使用して既存の NetCDF ファイル `foo.nc` の変数 `rh` の $(4, 3, 2)$ 要素を 0.5 にします。簡潔にするためにこの例では変数 `rh` の次元が `lon`, `lat`, `time` であることを既知とします。よって、書きこむ変数 `rh` の値は 4 番目の `lon` 値・3 番目の `lat` 値・2 番目の `time` 値に対応します。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER STATUS           ! エラーステータス
INTEGER NCID
INTEGER RHID             ! 変数 ID
INTEGER RHINDX(3)       ! 値の格納場所
DATA RHINDX /4, 3, 2/
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID) ! get ID
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_PUT_VAR1_DOUBLE (NCID, RHID, RHINDX, 0.5)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

7.6 すべての値を変数に書きこむ : `NF_PUT_VAR_type`

関数 `NF_PUT_VAR_type` のファミリーはオープンされた NetCDF ファイルの NetCDF 変数にすべての値を書きこみます。これはスカラー変数に値を書き込んだり多次元変数の値が一度にすべて書き込める場合に使用できるもっとも単純なインターフェースです。書きこまれる値は、FORTRAN インターフェースにおいて最も早く変化する NetCDF 変数が最初の次元であるという仮定の下に NetCDF 変数と関連付けられます。必要に応じて、値は外部データ型に変換されます。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR_TEXT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                  CHARACTER*(*) TEXT)

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR_INT1 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER*1 I1VALS(*))

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR_INT2 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER*2 I2VALS(*))

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR_INT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER IVALS(*))

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR_REAL (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   REAL RVALS(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR_DOUBLE(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   DOUBLE DVALS(*))
```

NCID	以前のNF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
VARID	変数 ID
TEXT, I1VALS, I2VALS, IVALS,RVALS, DVALS	書きこまれるデータ値のかたまり。データは呼び出した関数に対応する型でなくてはなりません。文字 (CHARACTER) データを数値変数に、または数値データを文字変数に入れることは出来ません。数値データについては、データ型が NetCDF 変数型と異なる場合には型変換が行われます。(詳細については 3.3 節「型変換」(p.24)を参照。)最初の次元が最も早く変化する順番で(通常の FORTRAN 変換と同様に)、データは指定された変数に書き込まれます。

エラー

関数 `NF_PUT_VAR_type` ファミリーに属する関数は、エラーが発生していない場合には `NF_NOERR` の値を返します。その他の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因としては：

- 変数 ID が指定された NetCDF ファイルでは有効ではない。
- 指定されたデータ値の一つ、もしくはそれ以上が変数の外部型として表現できる値の範囲外である。
- 指定された NetCDF ファイルがデータモードではなく定義モードになっている。
- 指定された NetCDF ID が開いている NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では `NF_PUT_VAR_DOUBLE` を使用して既存の NetCDF ファイル `foo.nc` の変数 `rh` の値すべてを 0.5 にします。簡潔にするためにこの例では変数 `rh` の次元は `lon`, `lat` と `time` であり、`lon` 値は 10 個、`lat` 値は 5 個そして `time` 値が 3 個である事は既知とします。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
PARAMETER (TIMES=3, LATS=5, LONS=10) ! 次元長
INTEGER STATUS, NCID, TIMES
INTEGER RHID ! 変数 ID
DOUBLE RVALS(LONS, LATS, TIMES)
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
DO 10 ILON = 1, LONS
  DO 10 ILAT = 1, LATS
    DO 10 ITIME = 1, TIMES
```

```

        RHVALS(ILON, ILAT, ITIME) = 0.5
10 CONTINUE
STATUS = NF_PUT_var_DOUBLE (NCID, RHID, RHVALS)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

7.7 値の配列を書きこむ：NF_PUT_VARA_type

関数 `NF_PUT_VARA_type` はオープンされた NetCDF ファイルの NetCDF 変数のに値を書き込みます。書き込む NetCDF 変数の部分は変数の部分配列の隅と縁の長さを与えることによって指定されます。書き込まれる値は NetCDF 変数の最初の次元が FORTRAN インターフェイスにおいて最も早く変化するという仮定の下に NetCDF 変数に関連付けられます。NetCDF ファイルはデータモードになっていなければなりません。

用法

```

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARA_TEXT(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                CHARACTER*(*) TEXT)

```

```

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARA_INT1(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                  INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                  INTEGER*1 I1VALS(*))

```

```

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARA_INT2(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                  INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                  INTEGER*2 I2VALS(*))

```

```

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARA_INT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                  INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                  INTEGER IVALS(*))

```

```

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARA_REAL(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                  INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                  REAL RVALS(*))

```

```

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARA_DOUBLE(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                    INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                    DOUBLE DVALS(*))

```

NCID 以前の `NF_OPEN` または `NF_CREATE` 呼び出しで返された NetCDF ID。

VARID 変数 ID。

START	最初にデータ値が書きこまれる変数内のインデックスを指定する整数のベクトル。インデックスは1に相対的なので、変数の最初のデータ値のインデックスは(1, 1, ..., 1)となります。STARTの長さは指定された変数の次元数と同じでなければなりません。STARTの要素は変数の次元と順番に対応していなければなりません。従って、記録変数の場合には、最後のインデックスがデータ値を書き込む開始記録番号となります。
COUNT	書き込まれるデータ値のかたまりの各次元の縁の長さを指定する整数のベクトル。単一のデータ値を書き込む場合には、COUNTを(1, 1, ..., 1)と指定します。COUNTの長さは指定された変数ベクトルの次元数と同じです。COUNTの要素は変数の次元に対応します。従って、記録変数の場合には、COUNTの最後の要素が書き込む記録数の総計に対応します。
TEXT, I1VALS, I2VALS, IVALS, RVALS, DVALS	書き込まれるデータ値のかたまり。データの型は呼び出された関数に適切な型でなければなりません。文字 (CHARACTER) データを数値変数に、または数値データを文字変数に入れることは出来ません。数値データについては、データ型が NetCDF 変数型と異なる場合には型変換が行われます。(詳細は 3.3 節「型変換」(p.24)にあります。)

エラー

関数 `NF_PUT_VARA_type` はエラーが発生していない場合には `NF_NOERR` 値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーの発生を示します。エラーの原因としては：

- ・ 変数 ID が指定された NetCDF ファイルでは無効である。
- ・ 指定された隅のインデックスが指定された変数のランクの範囲外である。例えば、負のインデックス、または対応する次元長より大きなインデックスはエラーを引き起こします。
- ・ 指定された隅に指定された縁の長さを加えると、参照するデータが指定された変数のランクの範囲外になってしまう。例えば、対応する次元長から隅のインデックスを引いたものより縁の長さが大きい場合にはエラーが発生します。
- ・ 指定された値の一つ、もしくはそれ以上が変数の外部型として表現可能な値の範囲外にある。
- ・ 指定された NetCDF ファイルがデータモードではなく定義モードになっている。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では `NF_PUT_VARA_DOUBLE` を使用して既存の NetCDF ファイル `foo.nc` 中の変数 `rh` の値に 0.5 を加えるか 0.5 にします。簡潔にするために、この例では、変数 `rh` の次元が `lon`, `lat` と `time` であり、`lon` 値は 10 個、`lat` 値は 5 個、そして `time` 値は 3 個あることが既知とします。

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
PARAMETER (NDIMS=3)          ! 次元の数
PARAMETER (TIMES=3, LATS=5, LONS=10) ! 次元長
INTEGER STATUS, NCID, TIMES
INTEGER RHID                 ! 変数 ID
INTEGER START(NDIMS), COUNT(NDIMS)
DOUBLE RHVALS(LONS, LATS, TIMES)
DATA START /1, 1, 1/        ! 最初の値から始める
DATA COUNT /LONS, LATS, TIMES/
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
DO 10 ILO = 1, LONS
  DO 10 ILAT = 1, LATS
    DO 10 ITIME = 1, TIMES
      RHVALS(ILO, ILAT, ITIME) = 0.5
10 CONTINUE
STATUS = NF_PUT_VARA_DOUBLE (NCID, RHID, START, COUNT, RHVALS)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

7.8 部分サンプルされた配列の値を書き込む : `NF_PUT_VARS_type`

関数 `NF_PUT_VARS_type` のファミリーに属するものはそれぞれ部分サンプルされた（ストライドされた）配列断面をオープンされた NetCDF ファイルの変数に書き込みます。部分サンプルされた配列断面は偶、カウントのベクトル、そしてストライドベクトルを与えることによって指定します。NetCDF ファイルはデータモードになっていなければなりません。

用法

```

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARS_TEXT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                  INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                  INTEGER STRIDE(*), CHARACTER*(*) TEXT)

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARS_INT1 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                   INTEGER STRIDE(*), INTEGER*1 I1VALS(*))

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARS_INT2 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                   INTEGER STRIDE(*), INTEGER*2 I2VALS(*))

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARS_INT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                  INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                  INTEGER STRIDE(*), INTEGER IVALS(*))

```

```
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARS_REAL (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                   INTEGER STRIDE(*), REAL RVALS(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARS_DOUBLE(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                    INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                    INTEGER STRIDE(*), DOUBLE DVALS(*))
```

NCID	以前のNF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
VARID	変数 ID
START	最初にデータ値が書きこまれる変数内のインデックスを指定する整数のベクトル。インデックスは1に相対的なので、変数の最初のデータ値のインデックスは(1, 1, ..., 1)となります。START の要素は変数の次元と順番に対応していなければなりません。従って、記録変数の場合には、最後のインデックスがデータ値を書き込む開始記録番号となります。
COUNT	各次元に沿って選ばれたインデックスの数を指定する指定する整数のベクトル。単一のデータ値を書き込む場合には、COUNT を(1, 1, ..., 1)と指定します。COUNT の要素は変数の次元に順番に対応します。従って、記録変数の場合には、COUNT の最後の要素が書き込む記録数の総計に対応します。
STRIDE	NetCDF 変数の各次元に対してのサンプリング間隔を指定する整数のベクトル。ストライドベクトルの要素は NetCDF 変数の次元に順番に対応します。(STRIDE(1) は NetCDF 変数の次元の中で最も早く変化する次元のサンプリング間隔を与えます。) サンプリング間隔は型独立の要素の単位 で示されています。(値が1の場合には対応する次元に沿って隣接する NetCDF 変数をアクセスし、値が2の場合には対応する次元の1つおきの値にアクセスします。)
TEXT, I1VALS, I2VALS, IVALS, RVALS, DVALS	書き込まれるデータ値のかたまり。データの型は呼び出された関数に適切な型でなければなりません。文字 (CHARACTER) データを数値変数に、または数値データを文字変数に入れることは出来ません。数値データについては、データ型が NetCDF 変数型と異なる場合には型変換が行われます。(詳細については3.3節「型変換」(p.24)を参照して下さい。)

エラー

エラーが発生していない場合にはNF_PUT_VARS_type は NF_NOERR の値を返します。その他の場合には、返されたステータスがエラーの発生を示します。エラーの原因としては：

- 変数 ID が指定された NetCDF ファイルに対して有効ではない。
- 指定された start・count・stride が領域外のインデックスを生成してしまう。
- 指定された値のうち、少なくとも一つが変数の外部データ型で表現可能な値の範囲

外である。

- ・ 指定された NetCDF ファイルがデータモードではなく定義モードになっている。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照しない。

例

この例は `NF_PUT_VARS_REAL` を使用して、内部配列から、`rh` という名の NetCDF 変数を一つおき書き込んでいく例です。変数 `rh` は FORTRAN 宣言文 `REAL RH(6,4)` において定義されています。(次元の大きさに注目してください。)

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
PARAMETER (NDIM=2)      ! NetCDF 変数のランク
INTEGER NCID            ! NetCDF ファイル ID
INTEGER STATUS          ! 返しコード
INTEGER RHID            ! 変数 ID
INTEGER START(NDIM)    ! NetCDF 変数のスタート地点
INTEGER COUNT(NDIM)    ! 内部配列のサイズ
INTEGER STRIDE(NDIM)   ! NetCDF 変数の部分サンプル間隔
REAL RH(3,2)           ! NetCDF 変数の次元の部分サンプルのサイズを記録
                        ! 次元
DATA START /1, 1/      ! 最初の NetCDF 変数から開始
DATA COUNT /3, 2/     ! 内部配列のサイズ：全体（部分サンプル）
                        ! NetCDF 変数
DATA STRIDE /2, 2/     ! NetCDF 要素の一つおきにアクセス
...
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID(NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_PUT_VARS_REAL(NCID, RHID, START, COUNT, STRIDE, RH)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

7.9 マップされた配列の値を書き込む： `NF_PUT_VARM_type`

関数 `NF_PUT_VARM_type` のファミリーはマップされた配列断面の値をオープンされた NetCDF ファイルの変数に書き込んでいきます。マップされた配列断面は隅の位置・カウンタのベクトル・ストライドベクトル・インデックスマッピングベクトルを与えることによって指定されます。インデックスマッピングベクトルとは整数のベクトルで、NetCDF 変数の次元と内部データ配列のメモリ内構造間のマッピングを指定するベクトルです。データ配列に関する次元の順番や長さに関する仮定は一切なされません。NetCDF ファイルはデータモードになっていなければなりません。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF _PUT_VARM_TEXT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),  
                                     INTEGER STRIDE(*), INTEGER IMAP(*),  
                                     CHARACTER*(*) TEXT)
```

```
INTEGER FUNCTION NF _PUT_VARM_INT1 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),  
                                     INTEGER STRIDE(*), INTEGER IMAP(*),  
                                     INTEGER*1 I1VALS(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF _PUT_VARM_INT2 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),  
                                     INTEGER STRIDE(*), INTEGER IMAP(*),  
                                     INTEGER*2 I2VALS(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF _PUT_VARM_INT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),  
                                     INTEGER STRIDE(*), INTEGER IMAP(*),  
                                     INTEGER IVALS(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF _PUT_VARM_REAL (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),  
                                     INTEGER STRIDE(*), INTEGER IMAP(*),  
                                     REAL RVALS(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF _PUT_VARM_DOUBLE(INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),  
                                     INTEGER STRIDE(*), INTEGER IMAP(*),  
                                     DOUBLE DVALS(*))
```

NCID	以前のNF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
VARID	変数 ID
START	最初にデータ値が書きこまれる変数内のインデックスを指定する整数のベクトル。インデックスは1に相対的なので、変数の最初のデータ値のインデックスは(1, 1, ..., 1)となります。START の要素は変数の次元と順番に対応していなければなりません。従って、記録変数の場合には、最後のインデックスがデータ値を書き込む開始記録番号となります。
COUNT	各次元に沿って選ばれたインデックスの数を指定する指定する整数のベクトル。単一のデータ値を書き込む場合には、COUNT を(1, 1, ..., 1)と指定します。COUNT の要素は変数の次元に順番に対応します。従って、記録変数の場合には、COUNT の最後の要素が書き込む記録数の総計に対応します。

STRIDE NetCDF 変数の各次元に対してのサンプリング間隔を指定する整数のベクトル。ストライドベクトルの要素は NetCDF 変数の次元に順番に対応します。(STRIDE(1) は NetCDF 変数の次元の中で最も早く変化する次元のサンプリング間隔を与えます。) サンプリング間隔は型独立の要素の単位 で示されています。(値が 1 の場合には対応する次元に沿って隣接する NetCDF 変数をアクセスし、値が 2 の場合には対応する次元の 1 つおきの値にアクセスします。)

IMAP NetCDF 変数と内部データ配列のメモリ内構造間のマッピングを指定する整数ベクトル。インデックスマッピングベクトルの要素は NetCDF 変数の次元と順番に対応します。(IMAP(1) は NetCDF 変数の次元のうち、最も早く変化する次元に対応する内部配列の要素間の距離を与えます。) 要素間の距離は要素の単位で示されます。(メモリ内で隣接している位置にある内部要素間の距離は 1 であり、NetCDF 2 の場合のように要素のバイト長ではありません。)

TEXT, I1VALS, I2VALS, IVALS, RVALS, DVALS 書き込まれるデータ値。データの型は呼び出された関数に適切な型でなければなりません。文字 (CHARACTER) データを数値変数に、または数値データを文字変数に入れることは出来ません。数値データについては、データ型が NetCDF 変数型と異なる場合には型変換が行われます。(詳細については 3.3 節「型変換」(p. 24) を参照してください。)

エラー

エラーが発生していない場合には関数 `NF_PUT_VARS_type` は `NF_NOERR` の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因としては：

- 変数 ID が指定された NetCDF ファイルに対して有効ではない。
- 指定された `START`, `COUNT` 及び `STRIDE` では範囲外のインデックスを生じてしまう。IMAP ベクトルにおいてはエラーチェックができないことに注意してください。
- 指定された値のうち、少なくとも一つが変数の外部データ型で表現可能な値の範囲外である。
- 指定された NetCDF ファイルがデータモードではなく定義モードになっている。
- 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照しない。

例

以下の IMAP ベクトルは 2x3x4 NetCDF 変数と同じ形の内部配列を簡潔な方法でマップします。

```
REAL A(2,3,4)           ! NetCDF 変数と同じ形
INTEGER IMAP(3)
DATA IMAP /1, 2, 6/     ! NetCDF 次元           要素間距離
                        ! -----
                        ! 最も早く変化           1
```

!	中間	2 (=IMAP(1)*2)
!	最も遅く変化	6 (=IMAP(2)*3)

上記の例で IMAP ベクトルとあわせて NF_PUT_VARM_REAL を使用すると、単に NF_PUT_VAR_REAL を使用した場合と同じ結果が得られます。

この例では NF_PUT_VARM_REAL を使用して、転置された内部配列から、NetCDF 変数 rh を書きます。変数 rh は FORTRAN 宣言文 REAL RH(4,6) で定義されています。(次元の大きさに注意してください。)

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
PARAMETER (NDIM=2)      ! NetCDF 変数のランク
INTEGER NCID            ! NetCDF ID
INTEGER STATUS          ! 返しコード
INTEGER RHID           ! 変数 ID
INTEGER START(NDIM)    ! NetCDF 変数のスタート地点
INTEGER COUNT(NDIM)    ! 内部配列のサイズ
INTEGER STRIDE(NDIM)   ! NetCDF 変数の部分サンプル間隔
INTEGER IMAP(NDIM)     ! 内部配列の要素間距離
REAL RH(6,4)           ! NetCDF 変数次元の置き換えに注意
DATA START /1, 1/      ! 最初の NetCDF 変数の要素から開始
DATA COUNT /4, 6/      ! NetCDF 変数全体; 順番は
                        ! NetCDF 変数に対応している -- 内部配列の順番ではない
DATA STRIDE /1, 1/     ! NetCDF 要素をすべてサンプルする
DATA IMAP /6, 1/       ! 置換しなければ /1, 4/

STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID(NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_PUT_VARM_REAL(NCID, RHID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, RH)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

この例では NF_PUT_VARM_REAL を使用して転置された内部配列から同じ NetCDF 変数からなる部分サンプル配列を、NetCDF 変数を一つおきのポイントに書き込むことによって作成します。

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
PARAMETER (NDIM=2)      ! NetCDF 変数のランク
INTEGER NCID            ! NetCDF データセットの ID
INTEGER STATUS          ! 返しコード
INTEGER RHID           ! 変数 ID
INTEGER START(NDIM)    ! NetCDF 変数のスタート地点
INTEGER COUNT(NDIM)    ! 内部配列のサイズ
INTEGER STRIDE(NDIM)   ! NetCDF 変数の部分サンプル間隔

```

```

INTEGER IMAP(NDIM)      ! 内部配列の要素間距離
REAL RH(3,2)           ! (部分サンプルされた)次元の置換に注意
DATA START    /1, 1/   ! 最初の NetCDF 変数の値から開始
DATA COUNT    /2, 3/   ! (部分サンプルされた)次元の順番は NetCDF 変数に対応
                   ! -- 内部配列の順番ではない
DATA STRIDE   /2, 2/   ! NetCDF 要素を一つおきにサンプル
DATA IMAP     /3, 1/   ! 置換しなければ `1, 2`
...
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID(NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_PUT_VARM_REAL(NCID, RHID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, RH)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

7.10 単一のデータ値を読み取る: `NF_GET_VAR1_type`

関数 `NF_GET_VAR1_type` はオープンされたデータモードにある NetCDF ファイルの変数から単一のデータ値を取得します。入力には NetCDF ID・変数 ID・取得する値を指定する多次元のインデックス・データ値が読み込まれる位置のアドレスです。この値は必要に応じて変数の外部データ型から変換されます。

用法

```

INTEGER FUNCTION  NF_PUT_VAR1_TEXT(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER INDEX(*), CHARACTER chval)

INTEGER FUNCTION  NF_PUT_VAR1_INT1(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER INDEX(*), INTEGER*1 ilval)

INTEGER FUNCTION  NF_PUT_VAR1_INT2(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER INDEX(*), INTEGER*2 i2val)

INTEGER FUNCTION  NF_PUT_VAR1_INT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER INDEX(*), INTEGER ival)

INTEGER FUNCTION  NF_PUT_VAR1_REAL(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER INDEX(*), REAL      rval)

INTEGER FUNCTION  NF_PUT_VAR1_DOUBLE(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                     INTEGER INDEX(*), DOUBLE   dval)

```

NCID 以前の `NF_OPEN` または `NF_CREATE` 呼び出しで返された NetCDF ID。

VARID 変数 ID。

INDEX	読み込まれるデータ値のインデックス。インデックスは1に相対的であるので、2次元変数の最初のデータ値のインデックスは(1,1)になります。indexの要素は変数の次元に対応していなければなりません。よって、記録変数の場合には、最後のインデックスが記録番号になります。
chval, ilval, i2val, ival, rval, or dval	データ値が読み込まれる位置。数値変数から文字 (CHARACTER) データを取得したり、文字変数から数値データを取得することは出来ません。数値データの場合には、データ型が NetCDF 変数型と異なれば、型変換が行なわれます。詳細については 3.3 節「型変換」(p. 24) を参照して下さい。

エラー

エラーが発生していない場合には関数 `NF_GET_VAR1_type` は `NF_NOERR` の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因としては：

- 変数 ID が指定された NetCDF ファイルに対して有効ではない。
- 指定されたインデックスが指定された変数のランクの範囲外であった。例えば、負のインデックスや、対応する次元の長さより大きなインデックスを与えるとエラーを引き起こす。
- 値が望まれるデータ型で表現可能な値の範囲外であった。
- 指定された NetCDF ファイルがデータモードではなく定義モードにあった。
- 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照しない。

例

この例では `NF_GET_VAR1_DOUBLE` を使用して、既存の NetCDF ファイル `foo.nc` から変数 `rh` の (4,3,2) 要素を取得します。簡潔にするために、この例では `rh` の次元が `lon`, `lat` 及び `time` であることを既知とし、よって、取得したいのは `rh` の 4 番目の `lon` 値、3 番目の `lat` 値、そして 2 番目の `time` 値ということになります。

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER STATUS, NCID
INTEGER RHID          ! 変数 ID
INTEGER RHINDX(3)    ! 値を取得する場所
DOUBLE PRECISION RHVAL !ここに置く
DATA RHINDX /4, 3, 2/
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_GET_VAR1_DOUBLE (NCID, RHID, RHINDX, RHVAL)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

7.11 全変数を読み取る : `NF_GET_VAR_type`

関数 `NF_GET_VAR_type` のファミリーはオープンされた NetCDF ファイルの変数の値をすべて読みます。これは、スカラー変数や多次元変数の値をすべて一度で読むためには最も簡単なインターフェースです。変数は連続した位置に 最初の次元が最も早く変化するように 次々と書き込まれていきます。NetCDF ファイルはデータモードになければなりません。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR_TEXT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                CHARACTER*(*) text)  
  
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR_INT1 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                INTEGER*1 ilvals(*))  
  
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR_INT2 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                INTEGER*2 i2vals(*))  
  
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR_INT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                INTEGER ival(*))  
  
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR_REAL (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                REAL rvals(*))  
  
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR_DOUBLE(INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                DOUBLE dvals(*))
```

変数から値の配列を読む FORTRAN 関数は 6 つあります。

NCID	以前の <code>NF_OPEN</code> または <code>NF_CREATE</code> 呼び出しで返された NetCDF ID。
VARID	変数 ID。
text, ilvals, i2vals, ival, rvals, dvals	読み込まれるデータ値のかたまり。。データの型は呼び出された関数に適切な型でなければなりません。文字 (CHARACTER) データを数値変数から、または数値データを文字変数から読み取ることは出来ません。数値データについては、データ型が NetCDF 変数型と異なる場合には型変換が行われます。(詳細については 3.3 節「型変換」(p. 24) を参照のして下さい。

エラー

エラーが発生していなければ、`NF_GET_VAR_type` は `NF_NOERR` の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因としては下記が挙げられます。

- 変数 ID が指定された NetCDF ファイルにおいて無効である。
- 一つ、もしくは複数の値が、指定された型によって表わせる値の範囲を超えている。
- 指定された NetCDF ファイルがデータモードではなく定義モードにある。
- 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照しない。

例

この例では `NF_GET_VAR_DOUBLE` を使用して既存の NetCDF ファイル `foo.nc` の変数 `rh` の値をすべて読み取ります。簡潔にするためにこの例では、変数 `rh` の次元は `lon`, `lat`, 及び `time` であり、`lon` 値が 10 個、`lat` 値が 5 個、そして、`time` 値が 3 個あることを既知とします。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
PARAMETER (TIMES=3, LATS=5, LONS=10) ! 次元長
INTEGER STATUS, NCID
INTEGER RHID ! 変数 ID
DOUBLE RHVALS(LONS, LATS, TIMES)
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_GET_VAR_DOUBLE (NCID, RHID, RHVALS)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

7.12 値の配列を読む : `NF_GET_VARA_type`

関数 `NF_GET_VARA_type` のファミリーはオープンされた NetCDF ファイルの変数から値の配列を読み取ります。配列は隅の位置と各辺の長さを表わすベクトルを与えて指定します。値は最初の次元が最も早く変化するように、次々と読み込まれます。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARA_TEXT(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                CHARACTER*(*) text)

INTEGER FUNCTION NF_GET_VARA_INT1(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                INTEGER*1 ilvals(*))

INTEGER FUNCTION NF_GET_VARA_INT2(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                INTEGER*2 i2vals(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARA_INT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                INTEGER ival(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARA_REAL(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                  INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                  REAL rvals(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARA_DOUBLE(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                     DOUBLE dvals(*))
```

NCID	以前の NF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
VARID	変数 ID
START	最初にデータ値が読み取られる変数内のインデックスを指定する整数のベクトル。インデックスは 1 に相対的なので、変数の最初のデータ値のインデックスは (1, 1, ..., 1) となります。START の長さは指定された変数の次元と一致していなければなりません。START の要素は変数の次元と順番に対応していなければなりません。従って、記録変数の場合には、最後のインデックスがデータ値を読み込む開始記録番号となります。
COUNT	読み込まれるデータのかたまりの各次元に沿った辺の長さを指定する整数のベクトル。単一のデータ値を読み込む場合には、COUNT を (1, 1, ..., 1) と指定します。COUNT の長さは指定された変数の次元の数と一致します。COUNT の要素は変数の次元に順番に対応します。従って、記録変数の場合には、COUNT の最後の要素が書き込む記録数の総計に対応します。
text, ilvals, i2vals, ival, rvals, dvals	読み込まれるデータ値のかたまり。。データの型は呼び出された関数に適切な型でなければなりません。文字 (CHARACTER) データを数値変数から、または数値データを文字変数から読み取ることは出来ません。数値データについては、データ型が NetCDF 変数型と異なる場合には型変換が行われます。(詳細については 3.3 節「型変換」(p. 24) を参照して下さい。

エラー

エラーが発生していなければ、関数 NF_GET_VARA_type は NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合は、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因としては：

- 変数 ID が指定された NetCDF ファイルに対して有効ではない。
- 指定された偶のインデックスが指定された変数のランクの範囲外であった。例えば、負のインデックス、もしくは対応する次元の長さよりも大きいインデックスなどを与えるとエラーが発生する。

- ・ 指定された縁の長さを指定された隅に加えると、参照すべきデータ値が指定された変数のランクの範囲外になってしまう。例えば、指定された次元長よりも大きい縁の長さから隅のインデックスを引くとエラーを生じる。
- ・ 値の一つもしくはそれ以上が望まれる型で表現できる値の範囲外になってしまう。
- ・ 指定された NetCDF ファイルがデータモードではなく定義モードになっている。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照しない。

例

この例では `NF_GET_VARA_DOUBLE` を使用して、既存の NetCDF ファイル `foo.nc` の変数 `rh` の値をすべて読み取ります。簡潔にするためにこの例では、変数 `rh` の次元が `lon`, `lat` と `time` であり、`lon` 値は 10 個、`lat` 値は 5 個、そして `time` 値が 3 個あることを既知とします。

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
PARAMETER (NDIMS=3)                ! 次元の数
PARAMETER (TIMES=3, LATS=5, LONS=10) ! 次元長
INTEGER STATUS, NCID
INTEGER RHID                        ! 変数 ID
INTEGER START(NDIMS), COUNT(NDIMS)
DOUBLE RHVALS(LONS, LATS, TIMES)
DATA START /1, 1, 1/                ! 最初の値から開始
DATA COUNT /LONS, LATS, TIMES/      ! すべての値を取得
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_GET_VARA_DOUBLE (NCID, RHID, START, COUNT, RHVALS)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

7.13 部分サンプルされた配列の値を読み取る： `NF_GET_VARS_type`

関数 `NF_GET_VARS_type` のファミリーはオープンされた NetCDF ファイルから部分サンプルされた (ストライドした) NetCDF 変数の配列断面の値を読み取ります。部分サンプルされた配列断面は隅・縁の長さを示すベクトル・ストライドベクトルを与えることによって指定されます。値は NetCDF 変数の中で最後の次元が最も早く変化するように読まれます。NetCDF ファイルはデータモードに無くてはなりません。

用法

```

INTEGER FUNCTION NF_GET_VARS_TEXT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                  INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                  INTEGER STRIDE(*), CHARACTER*(*) text)

```

```
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARS_INT1 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                   INTEGER STRIDE(*),INTEGER*1 ilvals(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARS_INT2 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                   INTEGER STRIDE(*),INTEGER*2 i2vals(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARS_INT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                   INTEGER STRIDE(*), INTEGER ival(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARS_REAL (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                   INTEGER STRIDE(*), REAL rvals(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARS_DOUBLE(INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                    INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),
                                    INTEGER STRIDE(*), DOUBLE dvals(*))
```

NCID	以前の NF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
VARID	変数 ID
START	最初にデータ値が読み取られる変数内のインデックスを指定する整数のベクトル。インデックスは 1 に相対的なので、変数の最初のデータ値のインデックスは (1, 1, ..., 1) となります。START の要素は変数の次元と順番に対応していなければなりません。従って、記録変数の場合には、最後のインデックスがデータ値を読み込む開始記録番号となります。
COUNT	各次元に沿って幾つのインデックスが選定されるかを指定する size_t の整数ベクトル。例えば単一の値を読み取る場合には、count を (1, 1, ..., 1) と指定して下さい。count の要素は変数の次元に順番に対応します。よって、記録変数の場合には count の最初の要素が読み取る記録数の総計に対応します。
STRIDE	各次元で選定されたインデックスの間隔を示す整数ベクトル、もしくはゼロの値。ベクトルの要素は変数の次元に順番に対応します。値が 1 の場合には対応する NetCDF 変数の隣接した値にアクセスします。値が 2 の場合には対応する NetCDF 変数の値を一つおきにアクセスします。引数 0 は (1, 1, ..., 1) として扱われます。
text, ilvals, i2vals, ival, rvals, dvals	読み込まれるデータ値のかたまり。データの型は呼び出された関数に適切な型でなければなりません。文字 (CHARACTER) データを数値変数から、または数値データを文字変数から読み取ることは出来ません。数値データについては、データ型が NetCDF 変数型と異なる場合には型変換が行われます。(詳細については 3.3 節「型変換」(p. 24) を参照して下さい。)

エラー

エラーが発生していない場合には、関数 `NF_GET_VARS_type` は `NF_NOERR` の値を返します。それ以外の場合には返されたステータスがエラーの発生を示します。エラーの原因としては：

- ・ 変数 ID が指定された NetCDF ファイルに対して有効ではない。
- ・ 指定された `start`・`count`・`stride` では範囲外のインデックスを生成してしまう。
- ・ 一つもしくはそれ以上の値が希望の型で表わせる値の範囲外である。
- ・ 指定された NetCDF ファイルがデータモードではなく定義モードになっている。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照しない。

例

この例では関数 `NF_GET_VARS_DOUBLE` を使用して NetCDF ファイル `foo.nc` の変数 `rh` の各次元から一つおきに値を読み取ります。値はパラメータが2つ存在する配列と同じ次元ストライドを割り当てられています。簡潔にするためこの例では、`rh` の次元が `lon`, `lat` と `time` であり、`lon` 値は10個、`lat` 値は5個、そして `time` 値は3個存在することが既知のこととします。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
PARAMETER (NDIMS=3)           ! 次元数
PARAMETER (TIMES=3, LATS=5, LONS=10) ! 次元長
INTEGER STATUS, NCID
INTEGER RHID ! variable ID
INTEGER START(NDIMS), COUNT(NDIMS), STRIDE(NDIMS)
DOUBLE DATA(LONS, LATS, TIMES)
DATA START /1, 1, 1/           ! 最初の値から開始
DATA COUNT /LONS, LATS, TIMES/
DATA STRIDE /2, 2, 2/
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_GET_VARS_DOUBLE(NCID, RHID, START, COUNT, STRIDE, DATA(1,1,1))
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

7.14 マップされた配列の値を読む： `NF_GET_VARM_type`

関数 `NF_GET_VARM_type` のファミリーはオープンされた NetCDF ファイルの NetCDF 変数からマップされた配列断面を読みます。マップされた配列断面は隅・縁の長さ・ストライドベクトル・インデックスマッピングベクトルを与えることによって指定されます。インデックスマッピングベクトルとは NetCDF 変数と内部データ配列のメモリ内構造との間のマッピングを指定する整数ベクトルです。データ配列に関しては順番や長さなど

についていかなる仮定もされません。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF _GET_VARM_TEXT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),  
                                     INTEGER STRIDE(*), INTEGER IMAP(*),  
                                     CHARACTER*(*) text)
```

```
INTEGER FUNCTION NF _GET_VARM_INT1 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),  
                                     INTEGER STRIDE(*), INTEGER IMAP(*),  
                                     INTEGER*1 ilvals(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF _GET_VARM_INT2 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),  
                                     INTEGER STRIDE(*), INTEGER IMAP(*),  
                                     INTEGER*2 i2vals(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF _GET_VARM_INT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),  
                                     INTEGER STRIDE(*), INTEGER IMAP(*),  
                                     INTEGER ival(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF _GET_VARM_REAL (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),  
                                     INTEGER STRIDE(*), INTEGER IMAP(*),  
                                     REAL rvals(*))
```

```
INTEGER FUNCTION NF _GET_VARM_DOUBLE(INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                     INTEGER START(*), INTEGER COUNT(*),  
                                     INTEGER STRIDE(*), INTEGER IMAP(*),  
                                     DOUBLE dvals(*))
```

NCID 以前の NF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID

VARID 変数 ID

START 最初にデータ値が読み取られる変数内のインデックスを指定する整数のベクトル。インデックスは 1 に相対的なので、変数の最初のデータ値のインデックスは (1, 1, ..., 1) となります。START の要素は変数の次元と順番に対応していなければなりません。従って、記録変数の場合には、最後のインデックスがデータ値を読み込む開始記録番号となります。

COUNT 各次元に沿って幾つのインデックスが選定されるかを指定する整数ベクトル。例えば単一の値を読み取る場合には、count を (1, 1, ..., 1) と指定して下さい。count の要素は変数の次元に順番に対応します。よって、記録変数の場合には count の最後の要素が読み取る記録数の総計に対応します。

STRIDE	各次元で選定されたインデックスの間隔を示す整数ベクトル、もしくはゼロの値。ベクトルの要素は変数の次元に順番に対応します。値が1の場合には対応する NetCDF 変数の隣接した値にアクセスします。値が2の場合には対応する NetCDF 変数の値を一つおきにアクセスします。引数0は (1, 1, ..., 1) として扱われます。
IMAP	NetCDF 変数の次元と内部データ配列とのメモリ内構造間のマッピングを指定する整数ベクトル。IMAP(1) は最も早く変化する NetCDF 変数の次元に対応する内部配列の要素と要素間の距離を示します。IMAP(N) は (N は NetCDF 変数のランク) 最も遅く変化する NetCDF 変数の次元に対応する内部配列の要素と要素の間の距離を示します。この二つ IMAP の要素間にある他の要素が他の NetCDF 変数の次元に対応することは自明です。要素間の距離は要素の型独立の単位で指定されます。(隣接する位置にある内部メモリ間の距離は1であり、NetCDF2 のように要素のバイト長ではありません。)
text, ilvals, i2vals, ivals,rvals, dvals	読み込まれるデータ値のかたまり。。データの型は呼び出された関数に適切な型でなければなりません。文字 (CHARACTER) データを数値変数から、または数値データを文字変数から読み取ることは出来ません。数値データについては、データ型が NetCDF 変数型と異なる場合には型変換が行われます。詳細は 3.3 節「型変換」(p. 24) を参照して下さい。

エラー

エラーが発生していなければ、関数 `NF_GET_VARM_type` は `NF_NOERR` の値を返します。その他の場合は返されたステータスがエラーの発生を示します。エラーの原因としては:

- 変数 ID が指定された NetCDF ファイルでは有効ではない。
- 指定された `START`, `COUNT` と `STRIDE` では範囲外のインデックスを生成してしまう。IMAP ベクトルではエラーチェックができないことに注意してください。
- 一つもしくはそれ以上の値が要求された型で表現し得る範囲外である。
- 指定された NetCDF がデータモードではなく定義モードになっている。
- 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照しない。

例

次の IMAP ベクトルは 2x3x4 の NetCDF 変数と同じ形の内部配列を自明な形でマップします。

```

REAL A(2,3,4)          ! same shape as NetCDF 変数と同じ形
INTEGER IMAP(3)
DATA IMAP /1, 2, 6/   ! NetCDF 次元                要素間距離
                    ! -----
                    ! 最も早く変化する                1
                    ! 中間                            2 (=IMAP(1)*2)

```

! 最も遅く変化する

6 (=IMAP(2)*3)

上記の IMAP ベクトルと NF_GET_VARM_REAL とを使用した場合と、単に NF_GET_VAR_REAL を使用した場合とは同じ結果が得られます。

この例では NF_GET_VARM_REAL を使用して FORTRAN 宣言文 REAL RH(4,6) (次元のサイズと順番に注目) で表わされた NetCDF 変数 rh を移項します。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
PARAMETER (NDIM=2)      ! NetCDF 変数のランク
INTEGER NCID            ! NetCDF データセット ID
INTEGER STATUS          ! 返しコード
INTEGER RHID            ! 変数 ID
INTEGER START(NDIM)    ! NetCDF 変数スタート地点
INTEGER COUNT(NDIM)    ! 内部配列のサイズ
INTEGER STRIDE(NDIM)   ! NetCDF 変数の部分サンプル間隔
INTEGER IMAP(NDIM)     ! 内部配列の要素間距離
REAL    RH(6,4)         ! NetCDF 変数の次元が置換されている点に注意
DATA START  /1, 1/     ! 最初の NetCDF 変数要素から開始
DATA COUNT  /4, 6/     ! NetCDF 変数全体; 順番は NetCDF 変数に対応
                        ! -- 内部配列ではない
DATA STRIDE /1, 1/     ! NetCDF 要素をすべてサンプル
DATA IMAP   /6, 1/     ! 置換していなければ /1, 4/
...
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID(NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_GET_VARM_REAL(NCID, RHID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, RH)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

関数 NF_GET_VARM_REAL を使用したこの別の例では、NetCDF 変数の点を一つおきにアクセスして同じ NetCDF 変数を移項すると同時に部分サンプルします。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
PARAMETER (NDIM=2)      ! NetCDF 変数のランク
INTEGER NCID            ! NetCDF データセット ID
INTEGER STATUS          ! 返しコード
INTEGER RHID            ! 変数 ID
INTEGER START(NDIM)    ! NetCDF 変数のスタート地点
INTEGER COUNT(NDIM)    ! 内部配列のサイズ
INTEGER STRIDE(NDIM)   ! NetCDF 変数の部分サンプル間隔
INTEGER IMAP(NDIM)     ! 内部配列の要素間距離
REAL    RH(3,2)         ! (部分サンプルされた) 次元の置換に注意
DATA START  /1, 1/     ! 最初の NetCDF 変数の値から開始
```

```

DATA COUNT    /2, 3/  ! (部分サンプルされた)次元の順番は NetCDF 変数に
                   ! 対応している -- 内部配列ではない
DATA STRIDE   /2, 2/  ! NetCDF 要素を一つおきにサンプル
DATA IMAP     /3, 1/  ! 置換していなければ `1, 2'
...
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID(NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_GET_VARM_REAL(NCID, RHID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, RH)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

7.15 文字列値を読み書きする

文字列は基本的な NetCDF 外部データ型ではありません。なぜならば、FORTRAN では可変長の文字列の抽象化をサポートしていないからです。(FORTRAN の LEN 関数は文字列の動的な長さではなく、静的な長さを返します。) その結果、NetCDF インターフェースでは文字列は単一のオブジェクトとして読み書きすることができません。文字列は文字の配列として扱わなければならないのです。したがって、NetCDF ファイルの変数データとして文字列を読み書きするためには配列アクセスをしなければなりません。さらに、NetCDF インターフェースでは可変長の文字列は規約による場合を除いてはサポートされていません。例えば、null 文字を文字列の終端として扱うことは可能ですが、NetCDF 変数に読み書きされる文字列の長さを明示しなければなりません。

文字列を属性値として扱えば使用しやすくなります。それは文字列がアクセスする際に一つの単位として扱われるからです。しかしながら、文字列の属性値の値はやはり固有の長さを持つ文字の配列であり、その長さは属性が定義されるときに指定される必要があります。

文字列値を持つ変数を定義する際には、**文字列位置次元** (character-position dimension) を最も早く変化する次元として使用しなければなりません (FORTRAN の変数において最初の次元)。文字列次元の長さは文字列変数に格納されるあらゆる文字列の最大長です。最大長の列を格納するスペースは、使用するか否かにかかわらず、文字列変数のディスク表現の中に割り当てられます。仮に、2 個以上の変数の最大長が同じである場合には、変数の形を定義するにあたって同じ文字位置次元を使用しても構いません。

文字列変数に文字列の値を書き込むには、全変数アクセスもしくは配列アクセスを使用します。後者を使用する場合には隅と縁の長さのベクトルの両方を指定する必要があります。文字位置次元の隅は FORTRAN において 1 です。もし書き込む列の長さが n と仮定すると、縁の長さのベクトルは文字位置次元に n を指定し、他の次元にはすべて 1 を指定します: $(n, 1, 1, \dots, 1)$ 。

FORTRAN においてはスペースを節約するために、固定長の文字列は NetCDF ファイルに終了文字無しで書き込むことができます。可変長の文字列は C の null 文字を加える規

約に従い、後に C または FORTRAN のプログラムで目的となる文字列の長さが識別できるようにしておかなければなりません。

文字列を読み書きするための FORTRAN インターフェイスは文字列値と数値をアクセスとをするには異なる関数を必要とします。それは、標準の FORTRAN では文字列値と数値の両方に同じ正式なパラメータを使用することが禁じられているからです。さらに、NF_PUT_VARA_TEXT と NF_GET_VARA_TEXT においては、指定された、値として扱われた文字列の長さを指定する別の引数が必要です。文字列の実際の長さは、対応する文字位置次元の縁の長さベクトルの値として指定されます。

この例では、文字列を扱う記録変数 tx を定義し、NF_PUT_VARA_TEXT を使用して文字列値を 3 番目の記録に書き込みます。ここでは、文字列変数とデータは既に未制限記録次元 time を持つ既存の NetCDF ファイル foo.nc に書き加えられると仮定します。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER    TDIMS, TXLEN
PARAMETER (TDIMS=2)      ! TX 次元の数
PARAMETER (TXLEN = 15) ! 文字列の例の長さ
INTEGER    NCID
INTEGER    CHID          ! 文字の位置の次元 ID
INTEGER    TIMEID        ! 記録次元の ID
INTEGER    TXID          ! 変数 ID
INTEGER    TXDIMS(TDIMS) ! 変数の形
INTEGER    TSTART(TDIMS), TCOUNT(TDIMS)
CHARACTER*40 TXVAL      ! 最大長 40
DATA TXVAL /'example string'/
...
TXVAL(TXLEN:TXLEN) = CHAR(0) ! null terminate
...
STATUS = NF_OPEN('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_REDEF(NCID)      ! 定義モードに入る
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
! 最大長が 40 文字の文字列の文字の位置の次元を定義
STATUS = NF_DEF_DIM(NCID, "chid", 40, CHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
! 文字列の変数を定義する
TXDIMS(1) = CHID ! 最初の文字の位置の次元
TXDIMS(2) = TIMEID
STATUS = NF_DEF_VAR(NCID, "tx", NF_CHAR, TDIMS, TXDIMS, TXID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_ENDDEF(NCID) ! 定義モードを抜ける
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
! write txval into tx NetCDF variable in record 3
TSTART(1) = 0 ! 先頭の変数から開始
```

```

TSTART(2) = 3          ! 書き込む記録の数
TCOUNT(1) = TXLEN     ! 書き込む文字数
TCOUNT(2) = 1        ! 一つの記録のみ記入
STATUS = NF_PUT_VARA_TEXT (NCID, TXID, TSTART, TCOUNT, TXVAL, 40)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

7.16 フィル値

オープンされた NetCDF ファイルに書き込まれたことのない値を読み取ろうとしたならば何が起るでしょうか？必ずエラーが発生し、エラーメッセージもしくはエラーステータスが返されると思われがちです。確かに、オープンされていない NetCDF ファイルからデータを読もうとした場合、指定された NetCDF ファイルにおいてその変数 ID が有効でない場合、または指定されたインデックスが指定された変数の次元長で定義された領域外にある場合にはエラーが発生します。しかし、それ以外の場合には、書き込まれていない値を読もうとすると、初めに NetCDF 変数が書かれたときに未定義のすべての値を埋めるための使用される特別な**フィル値** (fill value) が返されます。

このフィル値を無視して NetCDF 外部データ型の全領域を使うこともできますが、その場合には読む前にすべてのデータ値を書き込んだことを確認しなければなりません。もし、読む前にすべてのデータ値を書き込むことが確かであれば、書き込む前に `NF_SET_FILL` を呼び出すことによってフィル値を持っている変数が前もって埋められてしまわないと確信できます。これによって NetCDF の書き込み効率が著しく向上することもあります。

変数属性 `_FillValue` はある変数のフィル値を指定するためにも使えます。各型ごとにデフォルトのフィル値があり、インクルードファイル `netcdf.inc` の中で次のように定義されています：`NF_FILL_CHAR`, `NF_FILL_INT1` (`NF_FILL_BYTE` と同様), `NF_FILL_INT2` (`NF_FILL_SHORT` と同様), `NF_FILL_INT`, `NF_FILL_REAL` (`NF_FILL_FLOAT` と同様), `NF_FILL_DOUBLE`。

NetCDF バイトと文字型は異なるデフォルトのフィル値を持ちます。文字用のデフォルトのフィル値は零バイトであり、可変長の C 文字列の終わりを判別するのに役立ちます。バイト変数にフィル値が必要なときには、適切な `_FillValue` 属性を定義することをお勧めします。それは、`ncdump` 等の一般的なユーティリティではバイト変数に関してはデフォルトのフィル値を仮定しないからです。

フィル値の型変換は他の値の型変換と全く同様です。ある値をその値を表現できない別の型に変換しようとするするとレンジエラーが生じます。そのようなエラーは、大きな型（例えば倍精度型）から小さな型（例えば単精度型）へと読み書きする際に、大きい方のフィル値が小さい方の型では表現できない時に生じることがあります。

7.17 変数の名前を変更する： `NF_RENAME_VAR`

関数 `NF_RENAME_VAR` はオープンされた NetCDF ファイルの NetCDF 変数の名前を変更しま

す。もし新しい名前が以前の名前よりも長い場合には NetCDF ファイルは定義モードになっていなければなりません。既に存在している変数名に変更することはできません。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_RENAME_VAR (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                CHARACTER*(*) NEWNAM)
```

NCID	以前の NF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
VARID	変数 ID
NEWNAM	指定された変数の新しい名前

エラー

エラーが発生していなければ、関数 NF_RENAME_VAR は NF_NOERR 値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーの発生を示しています。エラーの原因としては：

- ・ 新しい名前が他の変数の名前として既に使用されている。
- ・ 変数 ID が指定された NetCDF ファイルで有効ではない。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照しない。

例

この例では NF_RENAME_VAR を使用して、既存の NetCDF ファイル foo.nc 内の変数 rh の名前を rel_hum に変更します。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'  
...  
INTEGER STATUS, NCID  
INTEGER RHID          ! 変数 ID  
...  
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_WRITE, NCID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)  
...  
STATUS = NF_REDEF (NCID) ! 定義モードに入る  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)  
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)  
STATUS = NF_RENAME_VAR (NCID, RHID, 'rel_hum')  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)  
STATUS = NF_ENDDEF (NCID) ! 定義モードを抜ける  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

8 属性

NetCDF 変数の性質である単位・特別な値・有効な値の最大値と最小値・スケーリングファクター・オフセット等を指定するために、各変数には属性を付け加えることができます。NetCDF ファイルの属性はファイル生成時に、NetCDF ファイルが定義モードにある時に定義されます。NetCDF ファイルを再度定義モードにすることによって、属性を追加することが可能です。NetCDF 属性はその属性が割り当てられている NetCDF 変数・名前・型・長さ・一つまたは複数の値のシーケンスを持っています。属性はその変数 ID と名前で示されます。属性名が不明の場合には、その変数 ID と数を使い、関数 `NF_INQ_ATTNAME` で名前を知ることができます。

変数に伴う属性は、通常、変数が生成された直後に、NetCDF ファイルがまだ定義モードにあるうちに定義されます。データ型・長さ・属性値はファイルがデータモードにあっても変更できます。ただしこれは、元々属性が定義された際に使用した以上のスペースが必要とされない場合に限りです。

どの変数とも関連していない属性を定義することも可能です。これらは**グローバル属性** (global attribute) と呼ばれ、関数 `NF_GLOBAL` を変数の擬似 ID として使います。グローバル属性は通常 NetCDF ファイル全体に関係し、NetCDF ファイルのタイトルや作業記録を付けるために使われます。

以下の操作が属性に対してサポートされています。

- 変数 ID・名前・データ型・長さ・値を与えて属性を作成する。
- 変数 ID と名前から属性のデータ型と長さを得る。
- 変数 ID と名前から属性値を得る。
- ある NetCDF 変数から別の変数に属性をコピーする。
- 属性番号から属性名を得る。
- 属性名を変更する。
- 属性を削除する。

8.1 属性の規約

アンダースコア (`_`) で始まる名前は NetCDF ライブラリ専用です。NetCDF ファイルを処理する一般的なアプリケーションは標準的な属性の規約を仮定しており、よほどの理由が無い限り、これらの規約に従いましょう。以下に、有用であることが証明済みの、推奨される標準的な属性の名前や意味が表記されています。これらの中には数値データを仮定しているものもあり (例えば、`units`, `valid_range`, `scale_factor`)、文字データ用には使うべきではない属性がいくつかあることに注意して下さい。

units	変数データの単位を指定する文字列。Unidata は自由に取得できるルーチンライブラリを開発・提供しています。これを使えば文字列と単位指定のバイナリ形式との間の変換やバイナリ形式で様々な有用な操作を行なうことができます。このライブラリはいくつかの NetCDF アプリケーションで使われています。推奨される単位構文を使用すれば、整合単位で表現されたデータを、算術演算用に一般的な単位に自動的に変換することが可能です。詳しくは、Appendix A 「単位」 (p.119) 参照。
long_name	長い記述的な名前。プロットのラベルなどに使える。変数に long_name 属性が割り当てられていなければ、変数名をデフォルトとして使用しましょう。
valid_min	この変数の有効値の最小値を示すスカラー
valid_max	この変数の有効値の最大値を示すスカラー
valid_range	この変数の有効値の最小値と最大値を示す 2 つの数値のベクトル。valid_min と valid_max 属性の値を指定することと等価です。これらの変数はどれも 有効範囲 (valid range) を定義している。valid_min または valid_max のどちらか一方でも定義されていたら、valid_range 属性を定義してはいけません。
	一般的なアプリケーションは有効範囲外の値は欠損として扱うのが望ましいです。各 valid_range, valid_min そして valid_max 属性の型はその変数の型と一致してしてなければなりません。(ただし、byte データ型は除く：これらは意図する範囲を符号付整数型によって指定できます。)
	valid_min, valid_max, valid_range のいずれも定義されていない場合には、一般的なアプリケーションは有効範囲を次の方法で定義するのが良いです。データがバイト型で _FillValue が明示されていない場合、有効範囲はすべての可能な値を含みます。それ以外の場合には、有効範囲から (明示された、もしくはデフォルト指定の) _FillValue を下記の要領で除外します。_FillValue が正の値の場合には、それが有効な最大値とし、正で無い場合には有効な最小値として定義します。整数型については、_FillValue とこの有効な最大値または最小値の差を 1 とします。浮動小数点型については、丸め誤差を念頭に置き、この差を表現可能な最小値 (最も下位のビットで 1) の 2 倍に設定します。
scale_factor	ある変数についてこの属性が与えられていれば、データにアクセスするアプリケーションによってデータが読み込まれた後に、データはこの係数と掛け合せられます。

add_offset

ある変数についてこの属性が与えられている場合、データはそれ
にアクセスするアプリケーションによって読み込まれた後にこの
数が加えられます。もし、scale_factor と add_offset の両方の属
性が与えられている場合には、データはまずスケールされ、その
後でオフセットが加えられます。scale_factor と add_offset を同
時に使うことによって、簡単なデータ圧縮を行なうことができ、
これによって、NetCDF ファイル内に低解像度の浮動小数点データ
を小さい整数として格納することができます。スケールされた
データが書き込まれた場合、アプリケーションはまず、オフセッ
トを差し引き、その後にスケールファクターで割ります。

scale_factor と add_offset が圧縮に使われる際には、関連する変
数（圧縮データを格納している）の型は通常、byte 型か short 型
です。一方で、解凍されたデータは float 型や double 型となりま
す。scale_factor と add_offset 属性は両方とも解凍されたデータ
の持つ型（float 型や double 型）でなければなりません。

_FillValue

_FillValue 属性は、変数に割り当てられているディスクスペース
をあらかじめ埋めるために使用される **フィル値** を指定します。こ
のようにあらかじめスペースを埋める動作は、NF_SET_FILL を使っ
て **ノーフィルモード (nofill mode)** が設定されていない限り行な
われません。詳細については、5.12 節 「書き込みのフィルモードを
設定する：nc_set_fill」 (p. 45) を参照して下さい。書き込ま
れた事のない値を読み取った時に **フィル値** が返されます。
_FillValue が定義されていれば、それはスカラーで、変数と同じ
型を取ります。デフォルトの **フィル値** が変数の型に合致していれ
ば、変数について _FillValue 属性をいちいち定義する必要はあり
ません。しかし、byte 型データにデフォルトの **フィル値** を使用す
ることはお勧めできません。この変数の属性の値を変更する際
には、その値がそれ以降の書き込みに対してのみ有効である点に注
意してください。それ以前に **フィル値** が書き込まれたデータは変
更されません。

一般のアプリケーションはしばしば、未定義の値または欠損値を
表現するために値を書き込む必要があります。 **フィル値** はこれに
対して適切な値を提供します。それは、 **フィル値** が通常、有効範
囲外の値を取るために、一般のアプリケーションでは欠損値とし
て扱われるからです。 **フィル値** を有効範囲内に設定することはで
きますが、薦められません。

より詳しい説明については、7.16 節 「フィル値」 (p. 83) を参照
して下さい。

missing_value	この属性はライブラリや規約に従った一般のアプリケーションによって特別扱いされるわけではありませんが、しばしば有用な情報であるので特定のアプリケーションで使われることがあります。missing_value 属性はスカラーでもベクトルでも良く、欠損データを示す値を含んでいます。一般のアプリケーションが、これらの値を欠損値として取り扱えるように、これらの値は有効範囲外にあるべきです。
signedness	使用価値の無くなった属性です。元は byte 値が符号付か符号無しのどちらで扱われるべきか指定するために作られました。現在ではこの目的のために、valid_min と valid_max の属性を使用できます。例えば、byte 変数に非負の値のみ格納したい場合には、valid_min = 0 と valid_max = 255 とを使えます。NetCDF ライブラリはこの属性を無視します。
FORTRAN_format	この変数の値をプリントする FORTRAN アプリケーションが使用するべきフォーマットを与える文字配列です。例えば、ある変数がある有効数字 3 桁の精度しかないことが明らかであれば、FORTRAN_format 属性を "(G10.3)" と定義するのが適当でしょう。
title	グローバル属性で、データセットの中身を簡潔に説明する文字配列。
history	検査履歴のためにグローバル属性。これは文字配列で、ファイルを修正したプログラムの各呼び出しに対して一列割り振られています。性質の良い一般の NetCDF アプリケーションは、アクセスする際に日付・時刻・ユーザー名・プログラム名・コマンドの引数を含む一行を追加します。
Conventions	存在する場合には、'Conventions' はグローバル属性であり、データセットが従う規約の名前を示す文字配列です。ある分野に固有な規約の集合体を記述した文書の貯蔵場所のディレクトリの相対的なディレクトリ名として解釈される文字列の形式を取ります。これによって、規約の階層構造が可能になり、規約の記述や例を、それを定義した機関やグループが保持する場所を与えています。規約のディレクトリ名は現在ではホストマシン ftp.uni-data.ucar.edu. 上の pub/NetCDF/Conventions/ ディレクトリから相対的に解釈される。代わりに、規約を記述した文書が維持されている WWW サイトを指定するために、完全な URL 指定子を使用しても構いません。

例えば、NUWG というグループが、ある分野に固有のデータ構造の次元名・変数名・必要な属性・NetCDF 表現に対する規約について合意したとします。NUWG は合意された規約を記述した文書を Conventions ディレクトリのサブディレクトリ NUWG/ に保管しておくことができます。これらの規約に従ったデータセットは "NUWG" という値を持ったグローバル Conventions 属性を含むこととなります。

後にこのグループが、NUWG データの特定の部分集合（例えば時系列等）について新たに規約を追加することに決めた場合、その追加される規約の記述は NUWG/Time_series/ サブディレクトリに保管されます。これらの追加された規約に従ったデータセットは "NUWG/Time_series" の値を持つグローバル Conventions 属性を使い、NUWG 規約と追加された NUWG 時系列規約にも従ったことを示します。

8.2 属性を生成する：NF_PUT_ATT_type

関数 NF_PUT_ATT_type は、オープンされた NetCDF ファイルの変数属性またはグローバル属性を追加・変更します。新規の属性、または属性を格納するために必要なスペースが前より大きくなる場合には、NetCDF ファイルは定義モードでなくてはなりません。

用法

どんな型の属性も生成可能ですが、ほとんどの用途にはテキストや倍精度属性で十分です。

```

INTEGER FUNCTION  NF_PUT_ATT_TEXT  (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                     CHARACTER*(*) NAME, INTEGER LEN,
                                     CHARACTER*(*) TEXT)

INTEGER FUNCTION  NF_PUT_ATT_INT1   (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                     CHARACTER*(*) NAME, INTEGER XTYPE,
                                     LEN, INTEGER*1 I1VALS(*))

INTEGER FUNCTION  NF_PUT_ATT_INT2   (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                     CHARACTER*(*) NAME, INTEGER XTYPE,
                                     LEN, INTEGER*2 I2VALS(*))

INTEGER FUNCTION  NF_PUT_ATT_INT    (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                     CHARACTER*(*) NAME, INTEGER XTYPE,
                                     LEN, INTEGER IVALS(*))

INTEGER FUNCTION  NF_PUT_ATT_REAL   (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                     CHARACTER*(*) NAME, INTEGER XTYPE,
                                     LEN, REAL RVALS(*))

INTEGER FUNCTION  NF_PUT_ATT_DOUBLE(INTEGER NCID, INTEGER VARID,

```

CHARACTER*(*) NAME, INTEGER XTYPE,
LEN, DOUBLE DVALS(*))

NCID	以前の NF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
VARID	変数 ID
NAME	属性名。アルファベットの文字で始まり、次にアンダースコア (‘_’) を含む 0 個以上の英数字が続きます。大文字小文字は区別されます。属性名の規約はいくつかの NetCDF の一般的なアプリケーションで仮定されています。例えば、units は NetCDF 変数に単位を与える文字列属性の名前です。規約的な属性名の一覧が前出の NetCDF インターフェースについての章にあります。
XTYPE	前もって定義された NetCDF 外部データ型の集合の一つ。有効な NetCDF 外部データ型は NF_BYTE, NF_CHAR, NF_SHORT, NF_INT, NF_FLOAT, NF_DOUBLE 等です。どんな型の属性も生成できますが、ほとんどの用途には NF_CHAR と NF_DOUBLE の属性で十分です。
LEN	属性に与えられた値の数、または NF_PUT_ATT_TEXT のテキスト属性の長さ
TEXT, I1VALS, I2VALS, IVALS, RVALS, DVALS	LEN 属性値の配列。データは呼び出し関数に妥当な型でなければなりません。数値属性に CHARACTER データを書き込んだり、テキスト属性に数値データを書き込むことは出来ません。数値データの場合、データの型が属性の型と異なれば型変換が行なわれます。(詳細については 3.3 節「型変換」(p. 24) を参照して下さい。)

エラー

エラーが発生していなければ、NF_PUT_ATT_type は NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として次のようなものが考えられます。

- 変数 ID が指定された NetCDF ファイルで無効である。
- 指定された NetCDF 型が無効である。
- 指定された長さが負の値である。
- 指定されたオープンされた NetCDF ファイルはデータモードにあり、指定された属性が大きくなっている。
- 指定されたオープンされた NetCDF ファイルはデータモードにあり、指定された属性がまだ存在していない。
- 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。
- この変数の属性の数が NF_MAX_ATTRS を越えている。

例

この例では、NF_PUT_ATT_DOUBLE を使って、既存の foo.nc という名前の NetCDF ファイルにおいて、rh という名前の NetCDF 変数に対して valid_range という属性、及び、

title という名前のグローバル属性を追加しています。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER STATUS, NCID
INTEGER RHID          ! 変数 ID
DOUBLE RHRNGE(2)
DATA RHRNGE /0.0D0, 100.0D0/
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_REDEF (NCID)      ! 定義モードに入る
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_PUT_ATT_DOUBLE (NCID, RHID, 'valid_range', NF_DOUBLE, &
                           2, RHRNGE)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_PUT_ATT_TEXT (NCID, NF_GLOBAL, 'title', 19,
                          'example NetCDF dataset')
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_ENDDEF (NCID)     ! 定義モードを抜ける
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

8.3 属性に関する情報を取得する：NF_INQ_ATT のファミリー

この関数のファミリーは NetCDF 属性に関する情報を返します。これらの関数は一つを除いてすべて変数 ID と属性名を必要とします。例外は NF_INQ_ATTNAME 関数です。属性に関する情報には型・長さ・名前・番号などが含まれます。属性値を取得する方法については NF_GET_ATT の節を参照してください。

関数 NF_INQ_ATTNAME は変数 ID と番号を与えると、属性の名前を返します。この関数は、他のすべての属性関数において属性は番号ではなく名前によってアクセスされるために、変数に関連した属性の名前をすべて必要とする一般的なアプリケーションにおいて役に立ちます。属性の番号は名前よりも揮発性があり、同じ変数の属性が削除された時に変わることがあります。このため、属性の番号は属性 ID とは呼ばれません。

関数 NF_INQ_ATT は属性の型と長さを返します。他の関数はそれぞれ、属性の情報を一つだけ返します。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_ATT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                             CHARACTER*(*) NAME, INTEGER xtype,
                             INTEGER len)
```

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_ATTTYPE(INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                CHARACTER*(*) NAME, INTEGER xtype)
```

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_ATTLEN (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                CHARACTER*(*) NAME, INTEGER len)
```

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_ATTNAME(INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                INTEGER ATTNUM, CHARACTER*(*) name)
```

```
INTEGER FUNCTION NF_INQ_ATTID  (INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                CHARACTER*(*) NAME, INTEGER attnum)
```

NCID	以前の NF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
VARID	属性の変数の変数 ID、またはグローバル属性の場合には NF_GLOBAL
NAME	属性の名前。NF_INQ_ATTNAME の場合を除いて、ここに属性名が返される。
xtype	返された属性の型。前もって定義された NetCDF 外部データ型の集合の一つ。有効な NetCDF 外部データ型は NF_BYTE, NF_CHAR, NF_SHORT, NF_INT, NF_FLOAT, NF_DOUBLE です。
len	現在属性に格納されている値の数。記号列の値を持つ属性では、これは記号列に含まれる文字数です。
attnum	NF_INQ_ATTNAME に対しては入力された属性番号。NF_INQ_ATTID に対しては、返された属性番号。各変数の属性は 1（最初の属性）から NATTS までの番号が振られています。（NATTS はその変数の属性の数で、NF_INQ_VARNATTS への呼び出しで返されます。）属性の情報を取得するためには属性の名前が必要であるので、属性の名前が既知であれば、この番号はあまり役に立ちません。

エラー

各関数は、エラーが発生していなければ NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として次のようなものが考えられます。

- 変数 ID が指定された NetCDF ファイルで無効である。
- 指定された属性が存在しない。
- 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。
- NF_INQ_ATTNAME に対して、指定された属性番号が負であるか、もしくは指定された変数に定義されている属性の数よりも多い。

例

この例では、NF_INQ_ATTLEN を使って、既存の foo.nc という名前の NetCDF ファイルにおいて、rh という名前の変数の属性 valid_range の長さと、title という名前のグロー

バル属性について問い合わせます。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER STATUS, NCID
INTEGER RHID          ! 変数 ID
INTEGER VRLEN, TLEN  ! 属性の長さ
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_ATTLEN (NCID, RHID, 'valid_range', VRLEN)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_INQ_ATTLEN (NCID, NF_GLOBAL, 'title', TLEN)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

8.4 属性値を取得する :NF_GET_ATT_type

NF_GET_ATT_type のファミリーの関数は、変数 ID と名前を与えると NetCDF 属性の値を返します。

用法

```
INTEGER FUNCTION NF_GET_ATT_TEXT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                  CHARACTER*(*) NAME,
                                  CHARACTER*(*) text)

INTEGER FUNCTION NF_GET_ATT_INT1 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   CHARACTER*(*) NAME,
                                   INTEGER*1 ilvals(*))

INTEGER FUNCTION NF_GET_ATT_INT2 (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   CHARACTER*(*) NAME,
                                   INTEGER*2 i2vals(*))

INTEGER FUNCTION NF_GET_ATT_INT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   CHARACTER*(*) NAME,
                                   INTEGER ival(*))

INTEGER FUNCTION NF_GET_ATT_REAL (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                   CHARACTER*(*) NAME,
                                   REAL rvals(*))

INTEGER FUNCTION NF_GET_ATT_DOUBLE (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                                      CHARACTER*(*) NAME,
                                      DOUBLE dvals(*))
```

NCID	以前の NF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
VARID	属性の変数の変数 ID、またはグローバル属性の場合には NF_GLOBAL
NAME	属性名
text, ilvals, i2vals, ivals,rvals, dvals	返された属性値。属性値のベクトルの要素はすべて返されるので、十分なスペースを確保する必要があります。どれだけのスペースを確保しておかなければならないか分からない時には、まず NF_INQ_ATTLEN を呼び出して属性の長さを調べましょう。数値変数から文字データを読み取ったり、テキスト変数から数値データを読み取ることは出来ません。数値データの場合には、データの型が NetCDF 変数の型と異なれば型変換が行われます。(詳細については、3.3 節「型変換」(p. 24) を参照してください。)

エラー

エラーが発生していなければ、NF_GET_ATT_type は NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として次のようなものが考えられます。

- 変数 ID が指定された NetCDF ファイルで無効である。
- 指定された属性が存在しない。
- 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。
- 属性値の一つまたはそれ以上が要求された型で表現し得る値の範囲から外れている。

例

この例は NF_GET_ATT_DOUBLE を使って、既存の foo.nc という名前の NetCDF ファイルの rh という NetCDF 変数の属性 valid_range の値と、title という名前のグローバル属性とについて調べます。この例では、幾つもの値が返されるか不明であると仮定します。そこで、格納するスペースが十分であることを確認するために、まず始めに属性の長さについて問い合わせます。

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
PARAMETER (MVRLLEN=3)           ! "有効範囲" の値の最大数
PARAMETER (MTLEN=80)           ! "title" 属性に最大長
INTEGER STATUS, NCID
INTEGER RHID                    ! 変数 ID
INTEGER VRLEN, TLEN            ! 属性長
DOUBLE PRECISION VRVAL(MVRLLEN) ! vr 属性値
CHARACTER*80 TITLE              ! title 属性値
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID)

```



```

IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
! 十分なスペースがあるか確認するために、属性長を取得
STATUS = NF_INQ_ATTLEN (NCID, RHID, 'valid_range', VRLEN)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_INQ_ATTLEN (NCID, NF_GLOBAL, 'title', TLEN)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
! 大きすぎなければ、属性値を取得
IF (VRLEN .GT. MVRLEN) THEN
    WRITE (*,*) 'valid_range attribute too big!'
    CALL EXIT
ELSE
    STATUS = NF_GET_ATT_DOUBLE (NCID, RHID, 'valid_range', VRVAL)
    IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
ENDIF
IF (TLEN .GT. MTLEN) THEN
    WRITE (*,*) 'title attribute too big!'
    CALL EXIT
ELSE
    STATUS = NF_GET_ATT_TEXT (NCID, NF_GLOBAL, 'title', TITLE)
    IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
ENDIF

```

8.5 一つの NetCDF から他へ属性をコピーする：NF_COPY_ATT

関数 NF_COPY_ATT はオープンされた NetCDF ファイルから他のファイルへ属性をコピーします。また同じ NetCDF 内で、ある変数の属性を別の変数にコピーするときにも使えます。

用法

```

INTEGER FUNCTION NF_COPY_ATT (INTEGER NCID_IN, INTEGER VARID_IN,
                             CHARACTER*(*) NAME, INTEGER NCID_OUT,
                             INTEGER VARID_OUT)

```

NCID_IN	属性のコピー元となる、以前の NF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された入力 NetCDF ファイルの NetCDF ID。
VARID_IN	属性のコピー元である入力 NetCDF ファイルの変数 ID、またはグローバル属性の NF_GLOBAL。
NAME	入力 NetCDF ファイルからコピーされる属性の名前。
NCID_OUT	以前の NF_OPEN または NF_CREATE から属性をコピーされる、出力 NetCDF ファイルの NetCDF ID。入力と出力 NetCDF ID が同じでも構いません。コピーされる属性が出力 NetCDF ファイル内にまだない場合、または存在する属性が大きくなる場合は、出力 NetCDF ファイルは定義モードにしておく必要があります。

VARID_OUT 属性のコピー先である、出力 NetCDF ファイルの変数 ID、またはグローバル属性をコピーする場合には NF_GLOBAL

エラー

エラーが発生していなければ、NF_COPY_ATT は NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として次のようなものが考えられます。

- ・ 入力または出力変数 ID が指定された NetCDF ファイルで無効である。
- ・ 指定された属性が存在しない。
- ・ 出力 NetCDF が定義モードになく、コピーされる属性が新しいか、または存在する属性より大きい。
- ・ 入力または出力 NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では、NF_COPY_ATT を使って、既存の foo.nc という NetCDF ファイルにおける変数 rh から変数属性 units をコピーして、他の既存の bar.nc という NetCDF ファイルの変数 avgrh に貼り付けます。変数 avgrh は既に存在するが、属性 units はまだ持っていないと仮定します。

```
INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER STATUS                   ! エラーステータス
INTEGER NCID1, NCID2             ! NetCDF ID
INTEGER RHID, AVRHID             ! 変数 ID
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_NOWRITE, NCID1)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_OPEN ('bar.nc', NF_WRITE, NCID2)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID1, 'rh', RHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID2, 'avgrh', AVRHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_REDEF (NCID2)   ! 定義モードに入る
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
! 変数属性を "rh" からコピーして "avgrh" に貼り付ける
STATUS = NF_COPY_ATT (NCID1, RHID, 'units', NCID2, AVRHID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_ENDDEF (NCID2)   ! 定義モードを抜ける
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

8.6 属性名を変更する：NF_RENAME_ATT

関数 NF_RENAME_ATT は属性の名前を変更します。新しい名前が元の名前より長い場合には、NetCDF ファイルは定義モードになっている必要があります。同じ変数の他の属性名と同じ名前になってしまうような属性名の変更はできません。

```
INTEGER FUNCTION NF_RENAME_ATT ( INTEGER NCID, INTEGER VARID,  
                                CHARACTER*(*) NAME,  
                                CHARACTER*(*) NEWNAME)
```

NCID	以前の NF_OPEN または NF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
VARID	属性の変数の ID、またはグローバル属性の NF_GLOBAL
NAME	現行の属性名
NEWNAME	指定された属性に割り当てられる新しい名前。新しい名前が現行の名前よりも長い場合には、NetCDF ファイルは定義モードになっていなければなりません。

エラー

エラーが発生していなければ、NF_RENAME_ATT は NF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として次のようなものが考えられます。

- 変数 ID が無効である。
- 新しい属性名は指定された変数の他の属性が既に使用している。
- 指定された NetCDF ファイルはデータモードになっていて、新しい名前は元の名前より長い。
- 指定された属性が存在しない。
- 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では、NF_RENAME_ATT を使って、既存の foo.nc という NetCDF ファイルにおける変数 rh の変数属性の名前を units から Units に変更します。

```
INCLUDE "netcdf.inc"  
...  
INTEGER STATUS      ! エラーステータス  
INTEGER NCID        ! NetCDF ID  
INTEGER RHID        ! 変数 ID  
...  
STATUS = NF_OPEN ("foo.nc", NF_NOWRITE, NCID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)  
...  
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, "rh", RHID)  
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

```

...
! 属性名を変更
STATUS = NF_RENAME_ATT (NCID, RHID, "units", "Units")
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)

```

8.7 属性を削除する：NF_DEL_ATT

関数NF_DEL_ATT はオープンされた NetCDF ファイルから NetCDF 属性を削除します。NetCDF ファイルは定義モードになっている必要があります。

用法

```

INTEGER FUNCTION NF_DEL_ATT (INTEGER NCID, INTEGER VARID,
                           CHARACTER*(*) NAME)

```

NCID	以前のNF_OPEN またはNF_CREATE 呼び出しで返された NetCDF ID
VARID	属性の変数の ID、またはグローバル属性のNF_GLOBAL
NAME	元の属性名

エラー

エラーが発生していなければ、NF_DEL_ATT はNF_NOERR の値を返します。それ以外の場合には、返されたステータスがエラーを示します。エラーの原因として次のようなものが考えられます。

- ・ 変数 ID が無効である。
- ・ 指定された NetCDF ファイルがデータモードになっている。
- ・ 指定された属性が存在しない。
- ・ 指定された NetCDF ID がオープンされた NetCDF ファイルを参照していない。

例

この例では、NF_DEL_ATT を使って、既存のfoo.nc という NetCDF ファイルから変数 rh の変数属性 Units を削除します。

```

INCLUDE 'netcdf.inc'
...
INTEGER STATUS           ! エラーステータス
INTEGER NCID             ! NetCDF ID
INTEGER RHID             ! 変数 ID
...
STATUS = NF_OPEN ('foo.nc', NF_WRITE, NCID)
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
STATUS = NF_INQ_VARID (NCID, 'rh', RHID)

```

```
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
...
! 属性の削除
STATUS = NF_REDEF (NCID) ! 定義モードに入る
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_DEL_ATT (NCID, RHID, 'Units')
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
STATUS = NF_ENDDEF (NCID) ! 定義モードを出る
IF (STATUS .NE. NF_NOERR) CALL HANDLE_ERR(STATUS)
```

9 NetCDF ファイルの構造と性能

この章では、NetCDF の性能について理解するのに必要な NetCDF のファイル構造の詳細を説明します。

NetCDF は配列指向のデータアクセスのためのデータ抽象化であり、その抽象化をサポートするインターフェースの具体的な実装を与えるソフトウェアライブラリです。この実装によって配列を表現するための機種独立型のフォーマットを提供します。NetCDF ファイルフォーマットはインターフェースの表面からは見ませんが、現行の実装と関連するファイル構造をいくらか理解していれば、どの NetCDF 操作が他よりコストがかかるか明らかになるでしょう。

NetCDF フォーマットの詳細に関しては、Appendix B 「ファイルフォーマット仕様」(p. 121) を参照してください。フォーマットの知識が無くても、NetCDF データの読み書きや効率に関する問題点のほとんどを理解することが可能です。文書化されたインターフェースのみを使い、フォーマットに関しては何の仮定もしていないプログラムは、将来 NetCDF フォーマットが変更されても機能しつづけます。それは、フォーマットの変更はすべて文書化されたインターフェースの下層で行なわれ、かつ、以前のバージョンの NetCDF ファイルフォーマットはサポートされるからです。

9.1 NetCDF ファイルの構成要素

NetCDF ファイルは 2 つの部分からなる一つのファイルとして格納されています。

- ・ ヘッダー部分は変数のデータ以外の次元・属性・変数の情報をすべて含みます。
- ・ データ部分は無制限次元を持たない変数のデータを含む固定サイズデータ、そして無制限次元を有する変数のデータを含む変動サイズデータからなります。

ヘッダー部分とデータ部分は両方とも機種独立型で表現されています。この形式は、配列や非バイトデータの効率的な格納をサポートするために拡張された XDR (eXternal Data Representation) と非常に似ています。

ファイルの先頭にあるヘッダー部分はファイルに含まれる次元・変数・属性についての名前・型・その他の性質に関する情報を含みます。各変数の情報には固定サイズデータについては変数データの先頭のオフセットや、記録中の他の変数の相対オフセット等があります。ヘッダーは、また、次元長や各変数の複数次元のインデックスを適切なオフセットにマップするのに必要な情報を含みます。

このヘッダーの使用可能なスペースに余分はありません。NetCDF ファイル中の次元・変数・属性（属性値をすべて含む）に必要な最低限の大きさしかありません。これによって、NetCDF ファイルはコンパクトであり、データを自己記述的にするための従属的なデータを格納するのにほとんどオーバーヘッドを必要としないという利点があります。この構造の欠点は、NetCDF ファイルのヘッダーを増大（または可能性としては低いが縮小）させるようななどの操作も、データをコピーすることによって移動させるということです。例えば、新しい次元や変数を追加したりする場合はそうです。このコスト

は `NF_REDEF` への呼び出しの後に `NF_ENDDEF` が呼び出されたときにかかります。データを書き込む前に必要な次元・変数・属性を生成して、ファイルのヘッダー部分により多くのスペースを必要とする生成後の NetCDF 要素の追加や名前の変更を避けることによって、その後のヘッダー部分の変更に伴うコストを回避することができます。

ヘッダーのサイズが変更されると、ファイル中のデータは移動され、ファイル内におけるデータ値の位置が変更されます。再定義中に他のプログラムがこのファイルを読み取っている場合には、そのファイルを間違っている可能性のある旧インデックスを使用して参照することとなります。NetCDF ファイルが再定義を超えて共有されるためには、再定義中の読み取りアクセスを防ぎ、次のアクセスの前に読み取る側に `NF_SYNC` を呼び出させるような、NetCDF ライブラリ外の機構が必要となります。

ヘッダーに続く固定サイズデータ部分は無制限次元を有さない変数の変数データをすべて含みます。各変数のデータはこのファイル部分に連続的に格納されています。無制限次元が無い場合には、これが NetCDF ファイルの末尾の部分となります。

固定サイズデータ部分に続く記録データ部分は、それぞれ記録データの情報をすべて含む固定サイズ記録の変数番号からなります。各変数の記録データは各記録中に連続的に格納されています。

各データ部分における変数データの順番は変数が定義された順番と同じで、NetCDF 変数 ID の昇順になります。これを知っていると、現行ではデータを連続的に読み書きすることが最適なデータアクセス法なので、場合によってはデータアクセス性能を向上させることができます。

9.2 拡張 XDR 階層

XDR はデータ記述とコード化のための標準であり、外部データ表現のためのライブラリでもあります。これによって、プログラマーは機種独立な手法によってデータ構造をコード化することができます。NetCDF はヘッダー部分とデータ部分で情報を表現するために拡張された XDR 形式を採用しています。この拡張 XDR はライブラリが実装されているどのマシン上でも読み取れるポータブルなデータを書くのに使用されています。

データ表現のために規範的な外部データ表現を使用するコストはデータの型によって異なり、また、その外部データ型がマシンの本来の形式であるかにもよります。

ある機種 of データ型では、外部データ形式からデータを変換したり、外部形式へと変換するのに膨大な時間を費やすかもしれません。最悪の場合は、IEEE 浮動小数点が本来の表現法では無いマシン上で浮動小数点データの大きな配列を読み書きすることでしょう。

9.3 I/O 階層

I/O 階層の実装は、NetCDF ファイルのポータブルデータを読み書きするための C standard I/O(`stdio`) ライブラリの実装とよく似ています。よって、標準的な I/O ライ

ブラリを理解すれば、同時にデータをアクセスする複数の処理や、I/O バッファの使われ方、NetCDF ファイルの開け閉めのコストに関する様々な疑問が解決されます。特に、NetCDF ファイルに対して一つの書き込み処理が行なわれている間に、別の複数の読み取り処理を行うことも可能です。データの読み書きには、stdio fread() や fwrite() への呼び出しより下位のものは使用していません。NF_SYNC 呼び出しはすべて C standard I/O ライブラリの fflush 呼び出しと類似しており、他の処理が読み取れるように未記入のバッファデータを書き込んでいきます。NF_SYNC はまた、ヘッダーの変更（例えば、属性値への変更）を最新のものにします。NF_SHARE は _IONBF フラグを setvbuf ステータスにした、バッファされていない stdio stream を設定することと同義です。

stdio ライブラリの場合と同様に、ファイルの異なる部分への“探索”が生じると、flush が実行されます。従って、書き込み操作の順番は I/O 性能に著しい影響を与えます。各記録中にデータが書き込まれたのと同じ順番でデータを読み取ることによってバッファ flush を最小限に留めることができます。

NetCDF データアクセスは、同一のファイルに同時に複数の書き込み処理が行えるようにはなっていません。

I/O 階層を別のプラットフォーム固有の I/O 階層に置き換えることにより、NetCDF の実装をあるプラットフォームに合わせて調整できます。これによって NetCDF と標準的な I/O との相似点、つまりデータ共有の性質・バッファ動作・I/O 操作のコストなどが変わる可能性があります。

配布された NetCDF 実装はポータブルであることを目標にしています。場合によっては、よりよい I/O 性能のために実装を最適化するようなプラットフォーム固有のポートの方が実用的でしょう。

9.4 UNICOS 最適化

前出のように、I/O 効率を向上させるために I/O 階層を置き換えることは可能です。Cray Y-MP と類似した、Cray コンピューターの OS である UNICOS に関して、これは既になされています。

更に、NetCDF_FFIO_SPEC 環境変数を正しく設定することにより、ユーザーは一層 I/O 効率を上げることができます。この変数は、UNICOS OS 下で実行中に、NetCDF I/O の Flexible File I/O バッファを指定します。（この変数は他の OS では無視されます。）適切な設定を選択すれば NetCDF I/O の効率を飛躍的に向上させることができます—デフォルトの FORTRAN bianry I/O を超えることもも可能です。下記のような指定が可能です。

- | | |
|-------------|---|
| bufa:336:2 | 2、非同期、各 336 ブロックの I/O バッファ（つまりダブルバッファ）。これはデフォルト指定で、連続的な I/O 向け。 |
| cache:256:8 | 8、同期、256 ブロックバッファ。大きいランダムアクセス向け。 |

<code>cachea:256:8:2</code>	<p>8、非同期、2ブロック先行読み取り / 後方書き込みファクタ付き 256 ブロックバッファ。より大きなランダムアクセス向け。</p>
<code>cachea:8:256:0</code>	<p>256、非同期、先行読み取り / 後方書き込み無しの8ブロックバッ ファ。これは小さなページ向けで、ランダムアクセス向きに先行読 み取り機能がありません。NetCDF 配列をスライスなどが例として挙 げられます。</p>
<code>cache:8:256,c achea.sds:102 4:4:1</code>	<p>これは2階層キャッシュです。最初の(同期)階層はメモリ内の 256個の8ブロックバッファからなり、2番目の(非同期)階層は SSD上の4個の1024ブロックバッファからなります。この機構は データセット内を2x1024ブロックの単位で波状にランダムアクセス する場合に向いています。</p>

CRI の FFIO ライブラリによってサポートされているオプション / 構成はこの機構を通じて利用できます。FFIO の機能を最大限利用するために CRI の I/O 最適化ガイドを参照することをお勧めします。この機構は、また、CRI の EIE I/O ライブラリとも互換性があります。

NetCDF_FFIOSPEC 変数をプログラムの I/O パターンに調整すれば、性能が飛躍的に向上します。何百倍というスピードが得られた例もあります。

10 NetCDF ユーティリティ

配列を扱うアプリケーションが NetCDF インターフェースを使用する主な理由の一つに、高位レベルの NetCDF ユーティリティと NetCDF データの一般的なアプリケーションを利用することがあります。現在では、NetCDF ソフトウェア配布版の一部として 2 つの NetCDF ユーティリティが用意されています。

- `ncdump` は NetCDF ファイルを読み、データ内の情報をテキスト表記で出力する。
- `ncgen` は NetCDF ファイルのテキスト表記を読み、対応するバイナリの NetCDF ファイルもしくはその NetCDF ファイルを作成する C または FORTRAN のプログラムを作成します。

より汎用の NetCDF ユーティリティが 2 つ FAN (File Array Notation) パッケージのに含まれている。

- `ncmeta` は一つまたは複数の NetCDF ファイルから選択されたメタデータを出力する。
- `ncrob` はテキストファイル / NetCDF 変数または属性の選択範囲から読み込まれ、そこに出力または書き込まれたデータに対して様々な操作 (コピー、合計、平均、最大値、最小値) を行なう。

FAN に関する詳細は http://www.unidata.ucar.edu/packages/NetCDF/fan_utils.html を参照して下さい。

他の NetCDF ユーティリティにはユーザーからの寄与があり、NetCDF データをアクセスする様々な可視化や解析パッケージが存在します。無償・有償両方の NetCDF データをアクセスし扱えるソフトウェアの最新情報については、NetCDF Software リストが次のサイトにあります。 <http://www.unidata.ucar.edu/packages/NetCDF/software.html>

この章には `ncgen` と `ncdump` ユーティリティの説明があります。これら 2 つのツールはバイナリの NetCDF ファイルと NetCDF ファイルのテキスト表記間の変換を行ないます。`ncdump` の出力と `ncgen` の入力 は CDL (network Common data form Description Language) として知られる簡単な言語によってテキスト表記されたものです。

10.1 CDL 構文

以下の CDL の例では、いくつかの名前付き次元 (`lat`, `lon`, `time`)、変数 (`z`, `t`, `p`, `rh`, `lat`, `lon`, `time`)、変数属性 (`units`, `_FillValue`, `valid_range`) とデータからなる NetCDF ファイルを記述しています。

```
NetCDF foo { // CDL による NetCDF 指定の例

  dimensions:
    lat = 10, lon = 5, time = unlimited;

  variables:
    int    lat(lat), lon(lon), time(time);
```

```

float    z(time,lat,lon), t(time,lat,lon);
double   p(time,lat,lon);
int      rh(time,lat,lon);

lat:units = "degrees_north";
lon:units = "degrees_east";
time:units = "seconds";
z:units = "meters";
z:valid_range = 0., 5000.;
p:_FillValue = -9999.;
rh:_FillValue = -1;

data:
  lat    = 0, 10, 20, 30, 40, 50, 60, 70, 80, 90;
  lon    = -140, -118, -96, -84, -52;
}

```

すべての CDL 宣言文はセミコロンで終わります。スペース・タブ・改行は可読性のために自由に使えます。コメントはダブルスラッシュ // に続き、どの行にも配置可能です。

CDL 記述は次元・変数・属性の 3 つのオプション部分から構成されます。変数部は変数宣言文や属性割り当てを含むことができます。

次元は CDL 記述で記述される多次元変数の形を定義するために使われます。次元には名前と長さがあります。CDL 記述の次元の内、一つの次元まで無制限長を持つことができ、それはこの次元を使う変数が任意の長さになり得る（ファイル中の記録番号のように）ことを意味します。

変数は同じ型の値の多次元配列を表現します。変数は名前・データ型・そして次元のリストによって記述された形を持ちます。各変数はデータ値の他に関連する属性（下記参照）も持ちえます。名前・データ型・変数の形は CDL 記述中の変数部分における宣言文によって指定されます。変数は次元と同じ名前を持つことができます。規約として、そのような変数は次元の座標値を名前に含んでいます。

属性は変数や NetCDF ファイル全体についての情報を含んでいます。属性は単位・特別な値・有効な値の最大値と最小値・圧縮パラメータのような特性を指定するのに使われます。属性情報は単一の値や値の配列によって表現されます。例えば、units は celsius 等の文字列によって表現される属性です。属性には関連する変数・名前・データ型・長さがあります。データ用の変数とは対照的に、属性は従属的なデータ（データに関するデータ）のためにあります。

CDL では、属性は変数と属性名とをコロン (:) で区切ったもので指定されます。変数名を省略し、属性名をコロン (:) ではじめることによって、NetCDF ファイル全体にグローバル属性を割り当てることもできます。CDL の属性のデータ型はそれに割り当てられている値の型で決まります。属性の長さはデータ値の数またはそれに割り当てられた文字列中の文字の数になります。文字でない属性に複数の値を割り当てる場合には、値をコンマ (,) で区切れば可能です。属性に割り当てられた値はすべて同じ型でなくてはなりません。

変数・属性・次元に対する CDL 名には、英数字と ‘_’ 及び ‘-’ の任意の組み合わせが許可されていますが、‘_’ で始まる名前はライブラリ専用です。CDL 名では大文字小文字は区別されます。NetCDF ライブラリは NetCDF 名に制約を加えていないので、有効な CDL 名ではない名前を使って変数を定義することも可能ですが薦められません。基本的なデータ型の名前は CDL では予約語であるので、変数・次元・属性の名前は型の名前は取ることはできません。

CDL 記述のオプションのデータ部分では、NetCDF 変数が初期化されます。初期化の構文は単純です。

```
variable = value_1, value_2, ...;
```

コンマで区切られた定数のリストは、空白・タブ・改行によって分けることができます。多次元配列では、最後の次元が最も早く変わります。よって、行列には行順ではなく列順が使われます。変数を満たすのに不十分な値が与えられた場合には、フィル値によって埋められます。定数の型は変数に宣言された型と一致していなくても良く、例えば、整数を浮動小数点数に強制的に変換するといった操作が行なわれます。意味のある型変換はすべてサポートされています。

フィル値用の特別な記述がサポートされています。‘_’ 文字は変換のためのフィル値を指します。

10.2 CDL データ型

CDL データ型には次のものがあります。

char	文字
byte	8 ビット整数。
short	16 ビット符号付整数
int	32 ビット符号付整数
long	(使用されない傾向にあります。現在は int と同義)
float	IEEE 単精度浮動小数点数 (32 ビット)
real	(float と同義)
double	IEEE 倍精度浮動小数点数 (64 ビット)

byte データ型が追加されていることと、unsigned 修飾子が無いことを除けば、CDL は C と同様の基本的データ型をサポートしています。宣言文では、型名の指定は大文字でも小文字でも構いません。

byte 型は 8 ビットデータ用である点が char 型と異なります。そして、零バイトは文字データにおけるような特別な意味を持ちません。ncgen ユーティリティは byte 宣言文

を、出力 C コードにおいては `char` 宣言文に、そして出力 FORTRAN コードにおいては `BYTE`, `INTEGER*1` もしくは同類のプラットフォーム固有の宣言文に変換します。

`short` 型は -32768 と 32767 の間の値を保持します。`ncgen` ユーティリティは `short` 宣言文を、出力 C コードにおいては `short` 宣言文に、そして出力 FORTRAN コードにおいては `INTEGER*2` 宣言文に変換します。

`int` 型は -2147483648 と 2147483647 の間の値を保持します。`ncgen` ユーティリティは `int` 宣言文を、出力 C コードにおいては `int` 宣言文に、そして出力 FORTRAN コードにおいては `INTEGER` 宣言文に変換します。CDL 宣言文では `integer` と `long` は `int` の同義語として認識されています。

`float` 型は -3.4×10^{38} と 3.4×10^{38} との間の値を保持でき、外部表現には 32 ビットの IEEE 規格化された単精度浮動小数点数が使われます。`ncgen` ユーティリティは `float` 宣言文を、出力 C コードにおいては `float` 宣言文に、そして出力 FORTRAN コードにおいては `REAL` 宣言文に変換します。CDL 宣言文では `real` は `float` の同義語として認識されています。

`double` 型は -1.7×10^{308} と 1.7×10^{308} の間の値を保持し、外部表現には 64 ビットの IEEE 規格化された倍精度浮動小数点数が使われます。`ncgen` ユーティリティは `double` 宣言文を、出力 C コードにおいては `double` 宣言文に、そして出力 FORTRAN コードにおいては `DOUBLE PRECISION` 宣言文に変換します。

10.3 データ定数の CDL 表記

この節は定数の CDL 表記についての説明です。

属性は CDL 記述の `variables` 部において、属性の型と長さを決める定数のリストを与えることによって、初期化されます。(NetCDF ライブラリへの C と FORTRAN の手続きインターフェースにおいては、属性の型と名前は定義されるときに明記されなければなりません。)CDL は、異なる NetCDF 型で区別がつくように、定数値の構文を記述している。CDL 定数の構文は C 構文と似ているが、`int` と `double` から区別するために、型の接尾子が `short` と `float` に添えてあります。

バイト定数は単一の文字、または、シングルクォートで囲んだ複数文字のエスケープ列で表現されます。例えば、

```
'a'      // ASCII a
'\0'     // null 文字
'\n'     // ASCII 改行文字
'\33'    // ASCII エスケープ文字 (8 進数で 33)
'\x2b'   // ASCII プラス (16 進数で 2b)
'\376'   // 8 進数で 377 = 10 進数で -127 (または 254)
```

文字定数はダブルクォートで囲まれています。文字配列はダブルクォートで囲んだ文字列として表現できます。複数の文字列は単一の文字配列に連結されます。これによっ

て、長い文字配列を複数の行に書くことができます。複数の可変長の文字列値をサポートするためには、`\\`,`\`,`\`のような規約的な区切り文字を使用することができますが、このような文字列区切りのための規約は NetCDF ライブラリ層の上のソフトウェアに実装されていなければなりません。通常の C 文字列のエスケープ規約はそのまま使用できません。例えば、

```
"a"           // ASCII `a`
"Two\nlines\n" // 2つの改行文字を埋め込んだ 10 文字の文字列
"a bell:\007" // ASCII ベルを含む文字列
"ab","cde"    // "abcde" と同じ
```

short 定数の形式は `s` または `S` を付加した整数定数です。short 定数が `0` で始まれば、8 進数であると解釈されます。`0x` で始まれば、16 進数の整数として解釈されます。例えば、

```
2s           // short 型の 2
0123s        // 8 進数
0x7ffs       // 16 進数
```

int 定数の形式は普通の整数定数です。int 定数が `0` で始まれば、それは 8 進数であると解釈されます。`0x` で始まれば、16 進数として解釈されます。有効な int 定数の例をいくつか挙げます。

```
-2
0123          // 8 進数
0x7fff        // 16 進数
1234567890L  // 現在では使用されない。古い long 接尾子を使用している。
```

float 型は有効数字 7 桁の精度を持つデータを表現するのに適しています。float 定数の形式は C 浮動小数点定数に `f` または `F` を付加したものと同じです。CDL float では整数と区別するために小数点が必要です。次に挙げる例はすべて、妥当な float 定数です。

```
-2.0f
3.14159265358979f // 低精度に丸められる
1.f
.1f
```

double 型は有効数字 16 桁の精度を持つデータを表現するのに適しています。double 定数の形式は C 浮動小数点定数と同じです。オプションとして `d` または `D` を付加しても構いません。integer と区別するために、CDL double には小数点が必要です。次に挙げる例はすべて妥当な double 定数です。

```
-2.0
3.141592653589793
1.0e-20
1.d
```

10.4 ncgen

ncgen ツールは NetCDF ファイル、または、NetCDF ファイルを生成する C または FORTRAN のプログラムを生成します。ncgen を呼び出す際にオプションを指定しなければ、そのプログラムは単に CDL 入力の構文をチェックし、CDL 構文に合致しないものがあればエラーメッセージを出すだけです。

ncgen を呼び出す UNIX 構文

```
ncgen [-b] [-o NetCDF-file] [-c] [-f] [-n] [input-file]
```

ここで、

- b (バイナリの) NetCDF ファイルを生成します。'-o' オプションが設定されていない場合は、NetCDF 名に拡張子 '.nc' を付加してデフォルトのファイル名が付けられます。(入力の際には NetCDF キーワードの後に指定されています。) **警告：指定されたファイル名と同じ名前のファイルが既に存在している場合、上書きされてしまいます。**
- o NetCDF-file 生成された NetCDF ファイルの名前。このオプションが選択されている場合、'-b' オプションが暗黙のうちに了承されます。(このオプションは、NetCDF ファイルが探索呼び出しによって生成される直接参照ファイルであり、それ故、標準出力に書き出すことができないために必要となります。)
- c NetCDF 指定に合った新しい NetCDF ファイルを生成する C ソースコードを作成します。C ソースコードは標準出力に書かれます。これは、生成されたプログラム中の変数を初期化した際にすべてのデータが含まれるので、比較的小さな CDL ファイルでのみ有用です。
- f NetCDF 指定に合った新しい NetCDF ファイルを生成する FORTRAN ソースコードを作成します。FORTRAN ソースコードは標準の出力に書かれます。これは、生成されたプログラム中の変数を初期化した際にすべてのデータが含まれるので、比較的小さな CDL ファイルでのみ有用です。
- n 現在は使用されません。出力ファイル名が '-o' オプションによって指定されていない場合に、'-b' オプションと同様に、NetCDF ファイル名を作成しますが、拡張子は '.nc' ではなく '.cdf' になります。このオプションは後方互換性の場合のみにサポートされています。

例

CDL ファイル `foo.cdl` の構文をチェックします。

```
ncgen foo.cdl
```

CDL ファイル `foo.cdl` より、`bar.nc` という名の等価な NetCDF バイナリファイルを作成します。

```
ncgen -o bar.nc foo.cdl
```

CDL ファイル `foo.cdl` より、等価な NetCDF バイナリファイルを作成するために必要な NetCDF 関数呼び出しを含む C プログラムを作成します。

```
ncgen -c foo.cdl > foo.c
```

10.5 ncdump

`ncdump` ツールは標準出力に NetCDF ファイルの CDL テキスト表現を出力します。オプションによって、入力されたデータの変数データの一部またはすべてを除外することもできます。`ncdump` からの出力は `ncgen` への入力として使用できるようになっています。よって、`ncdump` と `ncgen` はバイナリ表現とテキスト表現との間でデータ表現を変換するための正逆変換として使用できます。

`ncdump` はまた、NetCDF ファイル用の簡単なブラウザとしても使えます。これによって、NetCDF ファイル内の、次元名と次元長・変数名と型と形・属性名と値・オプションとしてすべてまたは選択された変数の値などを見ることができます。

`ncdump` は NetCDF の変数データの各型について使用されているデフォルトのフォーマットを定義しています。しかし、これは NetCDF 変数に `c_format` 属性が定義されていればこちらのほうが優先されます。この場合には、`ncdump` は `c_format` 属性を使ってその変数の値をフォーマットします。例えば、浮動小数点数である NetCDF 変数 `z` の有効数字が 3 桁しかないことが分かっている場合などに、この変数属性を使うと良いでしょう。

```
Z:c_format = "%.3g"
```

`ncdump` は、`'_'` を使って `_FillValue` 属性（これはまだ書かれていないデータを表現するためにあります）と等しい値を持つデータ値を表現します。もし、変数が `_FillValue` 属性を有していなければ、変数がバイト型で無い限り変数型のデフォルトフィル値が使用されます。

`ncdump` を呼び出す UNIX 構文

```
ncdump [-c | -h] [-v var1,...] [-b lang] [-f lang]
        [-l len] [-p fdig[,ddig]] [-n name] [input-file]
```

ここで、

- c すべての次元・変数・属性値の宣言文と、座標変数（次元でもある変数）の値を示します。座標変数でない変数のデータ値は出力に含まれません。任意の NetCDF ファイルの構造と内容をざっと見るのに最も適したオプションです。
- h 出力でヘッダー情報のみ示します。つまり、入力 NetCDF ファイルの次元・変数・属性の宣言文のみを出力し、変数のデータ値は一切出力しません。出力は '-c' オプションを使用した場合とほぼ同じですが、座標変数の値も出力に含まれません。（'-c' または '-h' オプションのどちらか一つのみ指定できます。）
- v var1, ... 出力は、すべての次元・変数・属性の宣言文と、指定された変数のデータ値を含みます。このオプションの後にあるカンマで区切られた表中に、一つまたは複数の変数を名前指定しなければなりません。この表はこのコマンドへの唯一の引数でなければならないので、空白や他の空白文字を含むことはできません。名前付き変数は入力ファイル中で有効な NetCDF 変数でなければなりません。このオプションが選択されておらず、さらに '-c' または '-h' オプションも選択されていない場合のデフォルトでは、すべての変数の値が出力されます。
- b lang 出力のデータ部分において、データの各 '列' に CDL コメント形式の ('//' で始まるテキスト) 簡潔な注釈が含まれるようになります。これによって多次元変数のデータ値の確認が容易になります。lang が 'C' または 'c' で始まれば、C 言語の規約（零基準のインデックス、最終次元が最も早く変わる）が使用されます。lang が 'F' または 'f' で始まれば、FORTRAN 言語の規約（1 を基準としたインデックス、最初の次元が最も早く変わる）が使用されます。どちらの場合にも、データは同じ順番で表示され、注釈のみが異なります。このオプションは大量の多次元データを一覧する時に便利です。
- f lang 各データ値（文字配列中の個々の文字は除く）についての注釈が、連なる CDL コメント形式 ('//' で始まるテキスト) でデータ部分に含まれます。lang が 'C' または 'c' で始まれば C 言語の規約（零基準のインデックス、最終次元が最も早く変わる）が使用されます。lang が 'F' または 'f' で始まれば、FORTRAN 言語の規約（1 を基準としたインデックス、最初の次元が最も早く変わる）が使用されます。どちらの場合にも、データは同じ順番で表示され、注釈のみが異なります。このオプションでは、各データ値が完全に識別された形で、別の行に表示されるので、データを他のフィルタを通してパイプする際に便利です。（'-b' または '-f' のオプションのどちらか一方のみしか指定できません。）
- l len 文字でないデータ値のリストをフォーマットする際に使われる、一行の最大長のデフォルト値 (80) を変えます。

`-p float_digits[,double_digits]`

属性や変数の浮動小数点数または倍精度のデータ値のデフォルトの精度（有効数字の桁数）を指定するのに使われます。指定された場合には、変数の `c_format` 属性の値より優先されます。浮動小数点データは有効数字 `float_digits` 桁で表示されます。`double_digits` も指定されている場合には、倍精度値も同じ桁数で表示されます。`-p` 指定がなされていない場合には、浮動小数点と倍精度のデータはそれぞれ有効数字 7 桁と 15 桁になります。精度を下げれば、CDL ファイルを小さくすることができます。浮動小数点と倍精度の両方が指定する場合には、2つの値をカンマ（空白無し）で区切り、このコマンドに対して単一の引数として与えなければなりません。

`-n name`

CDL では、`'ncgen -b'` がデフォルトで NetCDF ファイル名を付ける際に NetCDF ファイルの名前を必要とします。デフォルトでは、`ncdump` は入力 NetCDF ファイル名から拡張子を取り払った後、残されたファイル名の最後の要素でもって名前を付けます。違う名前を指定する場合には `'-n'` オプションを使いましょう。`'ncgen -b'` で使われる出力ファイル名を指定することは可能ですが、`ncdump` を使用し生成された CDL ファイルを編集し、その編集された CDL ファイルから `'ncgen -b'` によって新しい NetCDF ファイルを生成する際に、貴重な NetCDF ファイルをうっかり上書きしてしまわないように、`ncdump` にデフォルト名を変えさせることをお勧めします。

例

`foo.nc` という NetCDF ファイルのデータ構造を見ましょう。

```
ncdump -c foo.nc
```

注釈に C スタイルのインデックスを使い、NetCDF dataset `foo.nc` の構造とデータの CDL 版を注釈付きで生成します。

```
ncdump -b c foo.nc > foo.cdl
```

NetCDF dataset `foo.nc` の変数 `uwind` と `vwind` のみのデータを出力し、浮動小数点データを有効数字 3 桁で表示します。

```
ncdump -v uwind,vwind -p 3 foo.nc
```

インデックスに FORTRAN の規約を使用し、変数 `omega` のデータの完全注釈付き（一行につき 1 データ）リストを作成し、更に生成される CDL ファイル中の NetCDF ファイル名を `omega:` に変更します。

```
ncdump -v omega -f fortran -n omega foo.nc > Z.cdl
```

11 良くある質問とその答え (FAQ)

この章では、NetCDF に関して最も良くある質問に対して答えます。より包括的で最新の FAQ 文書は <http://www.unidata.ucar.edu/packages/NetCDF/faq.html> にあります。

NetCDF とは？

NetCDF (network Common Data Form) は配列指向のデータアクセスのためにインターフェースで、そのインターフェースの実装を与える C・FORTRAN・C++・Perl 用のソフトウェアライブラリを集めたものです。NetCDF ソフトウェアは Colorado 州の Boulder にある Unidata Program Center の Glenn Davis、Russ Rew、と Steve Emmerson によって開発され、他の NetCDF ユーザからの貢献によって増強されました。NetCDF ライブラリは配列を表現するための機種独立のフォーマットを定義しています。インターフェース・ライブラリ・フォーマットが合わさって配列指向データの生成、アクセス、そして共有をサポートしています。

NetCDF data は次のような特徴をもっています：

- ・ 自己記述的である。NetCDF ファイルはその中身のデータに関する情報を含んでいる。
- ・ ネットワーク透過性がある。NetCDF ファイルは、整数・文字・浮動小数点数を異なる形式で格納するコンピューターからでもアクセスできる。
- ・ 直接アクセスできる。大きなデータセットの小さな部分集合に、すべてのデータを最初に読み込む必要無しに、効率的にアクセスできる。
- ・ 追加ができる。一つの次元に沿って複数の変数に対し、そのデータをコピーしたり構造を再構築する必要無しに、NetCDF ファイルにデータを追加することができる。NetCDF ファイルの構造も変更できるが、場合によってはデータをコピーすることになってしまう。
- ・ 共有できる。同時に同一の NetCDF ファイルに、一つの書き込みと複数の読み込みができる。

NetCDF ソフトウェアパッケージの取得法は？

ソースの配布は下記のディレクトリから anonymous FTP 経由で手に入れることができます。

```
ftp://ftp.unidata.ucar.edu/pub/NetCDF/
```

このディレクトリには以下のファイルがあります。

- | | |
|-------------------|------------------------------------|
| NetCDF.tar.Z | 一般向けの最新版のソースコードの tar ファイルを圧縮したものの。 |
| NetCDF-beta.tar.Z | 現行のベータテスト版。 |

いくつかのプラットフォーム用のバイナリ配布版は以下のディレクトリから取得できません。

`ftp://ftp.unidata.ucar.edu/pub/binary/`

Perl インターフェイス用のソースは別のパッケージとして以下のディレクトリから anonymous FTP 経由で取得できます。

`ftp://ftp.unidata.ucar.edu/pub/NetCDF-perl/`

World Wide Web 上で NetCDF の情報にアクセスできますか？

はい、できます。この FAQ 文書の最新版、NetCDF User's Guide のハイパーテキスト版、及びその他の情報は以下にあります。

`http://www.unidata.ucar.edu/packages/NetCDF`

以前のバージョンから何が変わりましたか？

3 版は同じフォーマットを保持していますが、C と Fortran 用に、自動型変換に加え型変換の安全性を向上させた新しいインターフェイスを導入しています。詳細については下記を参照してください。

`http://www.unidata.ucar.edu/packages/NetCDF/release-notes.html`

NetCDF についての議論や質問のためのメーリングリストはありますか？

はい、あります。メーリングリストに関する情報や参加 / 脱会方法についての質問は `majordomo@unidata.ucar.edu` まで、subject 無しで本文に次のように記入したメールを送ってください。

`info NetCDFgroup`

他に誰が NetCDF を使っていますか？

NetCDF メーリングリストは 15 カ国に渡り 500 程の登録者がいます。(このうちのいくつかはより多くのアドレスへのエイリアスです。)いくつかのグループは NetCDF を配列指向データを表現する標準的な方法として採用しています。それらには、大気科学、水理学、海洋学、環境モデリング、地球物理学、クロマトグラフィ、質量分析学、ニューロイメージング等が含まれます。

NetCDF を使ったプロジェクトやグループのいくつかについての情報は下記にあります。

`http://www.unidata.ucar.edu/packages/NetCDF/usage.html`

NetCDF ファイルの物理的なフォーマットはどのようなものですか？

異なるデータ構成の性能の含みを明らかにするのに十分なレベルの NetCDF データの物理的構造の説明に関しては、9 章「NetCDF ファイルの構造と性能」(p. 101) を参照してください。また、ファイルフォーマットについての詳しい仕様については、Appendix B「ファイルフォーマット仕様」(p. 121) を参照してください。

NetCDF データをアクセスするプログラムは、すべてのアクセスを文書化したインターフェースを通じて行なうべきであり、NetCDF データの物理的フォーマットに依存するべきではありません。そのようにしておけば、将来フォーマットが変更されてもプログラムを変更する必要が生じません。なぜならば、そのような変更は旧バージョン・新バージョン両方のフォーマットをサポートするようにライブラリも変更されるからです。

NetCDF はどこで動作しているか？

NetCDF の現行のバージョンは下記のプラットフォーム上でテストされ、動作しています。

- AIX-4.1
- HPUX-9.05
- IRIX-5.3
- IRIX64-6.1
- MSDOS (using gcc, f2c, and GNU make)
- OSF1-3.2
- OpenVMS-6.2
- OS/2 2.1
- SUNOS-4.1.4
- SUNOS-5.5
- ULTRIX-4.5
- UNICOS-8
- Windows NT-3.51

NetCDF データには他にどんなソフトウェアが使えるか？

現行の Unidata からの NetCDF 配布版に含まれるユーティリティは、NetCDF ファイルを可読な ASCII 形式に変換する `ncdump`、可読な ASCII 形式のファイルからバイナリの NetCDF ファイルに変換し直すまたはその NetCDF ファイルを生成する C もしくは FORTRAN のプログラムコードを作成する `ncgen` です。

いくつかの商用または無償の解析及びデータ視覚化パッケージが NetCDF データアクセスに対応しています。これらのパッケージや NetCDF データを処理し表示するために使える他のソフトウェアについては下記を参照して下さい。

<http://www.unidata.ucar.edu/packages/NetCDF/software.html>.

科学的なデータ用には他にどんなフォーマットが存在するか？

Scientific Data Format Information FAQ が <http://fits.cv.nrao.edu/traffic/sci-dataformats/faq.html> にあり、CDF や HDF を含む配列指向データ用の他のアクセスインターフェースやフォーマットを分かりやすく紹介しています。

バグ報告はどうすれば良い？

バグを発見したら、その情報を support@unidata.ucar.edu に送ってください。これは NetCDFgroup メーリングリスト全体で扱うには適さない質問や議論をするためのアドレスでもあります。

過去の問題報告はどのようにして検索できるか？

NetCDF ホームページの一番下に検索フォームがあり、サポートの質問及び Unidata サポートスタッフの回答に対して全テキスト検索ができます。

C++ インターフェースは C インターフェースとどう違うのですか？

C++ は C インターフェースによって提供される機能をすべて持っています。(ただし、`nc_put_varm_type` と `nc_get_varm_type` のマップされた配列アクセスを除く。)C++ インターフェースを使用すると (http://www.unidata.ucar.edu/packages/NetCDF/cxxdoc_toc.html)NetCDF 要素の ID は不必要になり、属性を生成する際に型の指定が不要になります。さらに、次元を扱う際に、より直接的に扱うことができます。しかし、C++ インターフェースは C に比べて未成熟で、C ほど広く使われていません。さらに、C++ インターフェースの文章はあまり広範ではなく、ユーザーが NetCDF データモデルと C インターフェースに慣れていることを前提としています。

FORTRAN インターフェースと C インターフェースはどう異なるのか？

FORTRAN インターフェースは C インターフェースのすべての機能を提供しています。FORTRAN インターフェースは配列インデックス、添え字の順番、及び文字列に関して、FORTRAN 規約を使っています。異なる言語インターフェースを使用して書かれたデータのディスク上のフォーマットは同じです。C 言語のプログラムで書かれたデータは FORTRAN プログラムから読むことができ、また、逆も可能です。

Perl インターフェースと C インターフェースはどう異なるのか？

Perl インターフェースは C インターフェースすべての機能を提供しています。Perl インターフェース (<http://www.unidata.ucar.edu/packages/NetCDF-perl/>) は配列や文字列に関して Perl の規約に従っています。異なる言語インターフェースを使用して書かれたデータのディスク上のフォーマットは同じです。C 言語のプログラムで書かれた

データは Perl プログラムから読むことができ、また、逆も可能です。

Appendix A 単位

Unidata Program Center が開発した単位ライブラリによってフォーマットされたバイナリ形式の単位間の変換を行い、また、バイナリ形式で単位型代数演算を行なうことが可能です。単位ライブラリそのものは自己完結的であり、NetCDF ライブラリとの間には依存性はありません。それでもこのライブラリは一般的な NetCDF プログラムを書く際には非常に有用ですので、手に入れることをお勧めします。このライブラリと関連文書は <http://www.unidata.ucar.edu/packages/udunits/> から取得できます。

以下に Unidata 単位ライブラリの関数 `utScan()` によって解釈できる単位文字列の例を挙げてあります。

```
10 kilogram.meters/seconds2
10 kg-m/sec2
10 kg m/s^2
10 kilogram meter second-2
(PI radian)2
degF
100rpm
geopotential meters
33 feet water
milliseconds since 1992-12-31 12:34:0.1 -7:00
```

単位とは単位の任意の整数冪に任意の定数を掛けたものとして指定されます。割り算はスラッシュ `'/'`、掛け算は空白・ピリオド `'.'`・ハイフン `'-'`、のいずれか、冪算は整数の添え字または冪乗演算子 `'^'`・`'**'` で表わされます。括弧を用いて表記をグループ化したり明瞭化することもできます。最後の例のタイムスタンプは特殊なケースとして扱われます。

任意のガリレオ変換（すなわち、 $y = ax + b$ ）も許されています。特に、温度の変換は正しく扱われています。次の指定：

```
degF @ 32
```

は原点を華氏 32 度（つまり摂氏 0 度）にシフトした華氏での温度表記です。従って、摂氏での表記は次のような単位と等しくなります：

```
1.8 degF @ 32
```

原点シフトの演算が掛け算より優先されることに注意してください。演算の優先順位は（下位から上位に向かって）除算、乗算、原点移動、冪算になります。

関数 `utScan()` はすべての SI 接頭語（つまり、“mega”、“milli”）やそれらの短縮形（つまり、“M”、“m”）に対応できます。

関数 `utPrint()` は常に単位指定を一意にコード化します。誤った解釈を防ぐために、このコード化のスタイルをデフォルトとして使用することをお勧めします。一般的には、単位は基本単位・因数・冪指数によってコード化されます。基本単位は空白によって区

切られ、冪指数は対応する単位に直接付加されます。上記の例は次のようにコード化されます：

```
10 kilogram meter second-2
9.8696044 radian2
0.555556 kelvin @ 255.372
10.471976 radian second-1
9.80665 meter2 second-2
98636.5 kilogram meter-1 second-2
0.001 seconds since 1992-12-31 19:34:0.1000 UTC
```

(華氏単位が小さな Kelvin 単位での原点 255.372 Kelvin からの差としてコード化されていることに注意してください。さらに、最後の例では時刻が UTC に変換されていることにも注意してください。)

単位ライブラリのデータベースはフォーマットされたファイルで単位定義を含み、このパッケージを初期化するのに使われます。有効な単位名や記号等はまずここで探して下さい。

この単位ファイルのフォーマットに関しては内部に文書があり、ユーザーは必要に応じてファイルを修正することができます。特に、単位や定数(さらに既存の単位や定数の異なった綴り)は簡単に付け足していくことができます。

関数 `utScan()` は大文字小文字を区別します。これによって不都合が生じるようでしたら、単位ファイルに適切な項目を追加してください。

デフォルト単位ファイルにある単位の短縮形は直感的ではないかもしれません。特に次に挙げるものについては注意が必要です：

For	Use	Not	Which Instead Means
Celsius	Celsius	C	coulomb
gram	gram	g	<standard free fall>
gallon	gallon	gal	<acceleration>
radian	radian	rad	<absorbed dose>
Newton	newton or N	nt	nit (unit of photometry)

単位ライブラリについての更なる情報については、この配布版に付属のマニュアルページを参照してください。

Appendix B ファイルフォーマット仕様

この appendix では NetCDF ファイルフォーマット 1 版の仕様を述べます。このフォーマットは少なくとも NetCDF ライブラリ 3.0 版までは使用される予定です。

このフォーマットはまず最初に BNF 文法表記によって正式に表現されます。この文法では、オプションの要素は括弧 ('[' と ']') によって囲まれます。注釈は '//' の後に続きます。端末語でないものは小文字で、端末語は大文字で表記されます。0 またはそれ以上の項目を並べる場合には '[entity ...]' と表記されます。

フォーマット仕様詳細

```
NetCDF_file := header data

header := magic numrecs dim_array gatt_array var_array

magic := 'C' 'D' 'F' VERSION_BYTE

VERSION_BYTE := '\001' // ファイルフォーマットのバージョン番号

numrecs := NON_NEG

dim_array := ABSENT | NC_DIMENSION nelems [dim ...]

gatt_array := att_array // グローバル属性

att_array := ABSENT | NC_ATTRIBUTE nelems [attr ...]

var_array := ABSENT | NC_VARIABLE nelems [var ...]

ABSENT := ZERO ZERO // 配列が無いことを意味する ( nelems == 0 に同じ )

nelems := NON_NEG // 以下のシーケンスの要素数

dim := name dim_length

name := string

dim_length := NON_NEG // 0 であればこれは記録次元
// 記録次元は 1 つまで

attr := name nc_type nelems [values]

nc_type := NC_BYTE | NC_CHAR | NC_SHORT | NC_INT | NC_FLOAT | NC_DOUBLE

var := name nelems [dimid ...] vatt_array nc_type vsize begin
// nelems は変数のランク (次元数)
// スカラーなら 0、ベクトルなら 1、行列なら 2 など
```

```

vatt_array := att_array // 変数に特定の属性

dimid      := NON_NEG    // 変数形状のための次元 ID(dim_array へのインデックス)
// 最初の次元が記録次元である場合に限って、
// これを”記録変数”と呼ぶ。

vsize      := NON_NEG    // 変数サイズ。記録変数で無い場合には、
// 変数データに割り当てられたスペース（単位はバイト）
// この数は次元長と次元型のサイズの積であり、
// 4バイト境界に合わせて詰め込まれている。
// これが記録変数である場合には
// 記録ごとのスペースに対応する。
// NetCDF の”記録サイズ”は記録変数の
// vsize のを和として計算される。

begin      := NON_NEG    // 変数のスタート位置。この変数のデータの
// 先頭のファイル中におけるバイト単位の
// オフセット（インデックス必要）

data       := non_recs  recs

non_recs   := [values ...] // 記録変数ではない最初の変数、2番目、... のデータ。

recs       := [rec ...]   // 最初の記録、2番目の記録、...

rec        := [values ...] // 記録 n に対する最初の記録変数、
// 2番目の記録変数、... のデータ
// 特殊なケースについては下記の注釈を参照のこと

values     := [bytes] | [chars] | [shorts] | [ints] | [floats] | [doubles]

string     := nelems  [chars]

bytes      := [BYTE ...] padding

chars      := [CHAR ...] padding

shorts     := [SHORT ...] padding

ints       := [INT ...]

floats     := [FLOAT ...]

doubles    := [DOUBLE ...]

padding    := < 次の4バイト境界までの0, 1, 2, または3バイト >
// ヘッダーでは、詰め込むのは0バイト
// データでは、詰め込むのは変数のフィル値

NON_NEG   := < 非負の値を持つ INT >

```

```

ZERO      := < 0 の値を持つ INT >

BYTE      := < 8 ビット byte >

CHAR      := < 8 ビット ACSII/ISO でコード化された character >

SHORT     := < 16 ビット符号付整数・ビッグエンディアン・ 2 の補数表現 >

INT       := < 32 ビット符号付整数・ビッグエンディアン・ 2 の補数表現 >

FLOAT     := < 32 ビット IEEE 単精度浮動小数点・ビッグエンディアン >

DOUBLE    := < 64 ビット IEEE 二倍精度浮動小数点・ビッグエンディアン >

// タグは 32 ビット整数
NC_BYTE   := 1           // データは 8 ビット符号付整数の配列
NC_CHAR   := 2           // データは文字配列（テキスト等）
NC_SHORT  := 3           // データは 16 ビット符号付整数の配列
NC_INT    := 4           // データは 32 ビット符号付整数の配列
NC_FLOAT  := 5           // データは IEEE 単精度浮動小数点の配列
NC_DOUBLE := 6           // データは IEEE 二倍精度浮動小数点の配列
NC_DIMENSION := 10
NC_VARIABLE := 11
NC_ATTRIBUTE := 12

```

ファイルオフセットの計算

指定されたデータ値のオフセット（ファイル内の位置）を計算するには、指定された変数型 *nc_type* に適切なデータ値の一つの外部サイズ（バイト単位）を *external_sizeof* とします。

```

NC_BYTE      1
NC_CHAR      1
NC_SHORT     2
NC_INT       4
NC_FLOAT     4
NC_DOUBLE    8

```

NF_OPEN（もしくは NF_ENDDEF）呼び出しは前もって *var_array* と示された変数配列内をスキャンし、*recsize* を計算するために“記録”変数の *vsize* の和を計算します。

変数の次元サイズの積を右から左にとっていき、記録変数の最も左の（記録）次元は飛ばし、各変数についての結果を *product* 配列に格納します。例えば：

```

Non-record variable:

    dimension lengths:      [ 5 3 2 7]
    product:                [210 42 14 7]

```

Record variable:

```
dimension lengths:    [0  2  9 4]
product:              [0 72 36 4]
```

この時点では、最も左にある積を次の4の倍数に丸めたものが変数サイズ、すなわち、上の文法においては *vsize* になります。例えば、上記の非記録変数では、*vsize* フィールド値は212(210を次の4の倍数に丸めた値)です。記録変数に対しては、*vsize* の値はちょうど72です。なぜならば、72は既に4の倍数であるからです。

求めるデータ値の座標の配列を *coord* とし、求める結果を *offset* とします。この時、*offset* は単に、求める変数の最初のデータ値のファイルオフセット(その *begin* フィールド)に *coord* と *product* ベクトルの内積を変数の各データのサイズ(バイト単位)を掛けたものを加えた値となります。最後に、もしその変数が記録変数であれば、記録数 '*coord*[0]' と記録サイズ *recsize* との積が加算され、最終的なオフセット値が導かれます。

擬似Cコードにおける *offset* の計算は次のようになります。

```
for (innerProduct = i = 0; i < var.rank; i++)
    innerProduct += product[i] * coord[i]
offset = var.begin;
offset += external_sizeof * innerProduct
if(IS_RECVAR(var))
    offset += coord[0] * recsize;
```

したがって、(外部表現法の)データ値を取得するには、次のようになります。

```
lseek(fd, offset, SEEK_SET);
read(fd, buf, external_sizeof);
```

特殊例: 記録変数一つしかない場合には、各記録が4倍との境界に合っていないとしないという制限は外れるので、この場合には記録の詰め込みが行なわれません。

例

上の文法によれば、最も小さな有効な NetCDF file で次元、変数、属性を持たないのでデータを持たないものを代入することができます。空の NetCDF ファイルの CDL 表現は次のようになります:

```
NetCDF empty { }
```

この空の NetCDF ファイルは32バイトの大きさと、CDL 表現から '*ncgen -b empty.cdl*' を使って空の NetCDF ファイルを生成して確認することができます。この空ファイルはそれが NetCDF 1 版のファイルであることを示す4バイトの”マジックナンバー”である '*C', 'D', 'F', '\001*' で始まります。続いて、記録数・次元の空配列・グローバル属性の空配列・変数の空配列を表わす7つの32ビット0が後にきます。

以下は、次の Unix コマンドを使ってビッグエンディアンマシン上で生成されたファイルの（編集済みの）ダンプです。

```
od -xcs empty.nc
```

ファイルの 16 バイトの各部分は 4 行で表示されています。最初の行はバイトを 16 進数表示し、2 行目は文字表示しています。3 行目は 2 バイトごとにグループ化して、それを符号付 16 ビット整数として表示しています。4 行目は（手作業で追加されたものですが）バイトを NetCDF 要素及び値として解釈したものを表示しています。

```

4344    4601    0000    0000    0000    0000    0000    0000
C  D  F 001  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0
17220   17921   00000   00000   00000   00000   00000   00000
[magic number ] [ 0 records ] [ 0 dimensions (ABSENT) ]

0000    0000    0000    0000    0000    0000    0000    0000
\0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0
00000   00000   00000   00000   00000   00000   00000   00000
[ 0 global atts (ABSENT) ] [ 0 variables (ABSENT) ]
```

もう少し意味のある例として、このような CDL を考えてみましょう。

```

NetCDF tiny {
dimensions:
    dim = 5;
variables:
    short vx(dim);
data:
    vx = 3, 1, 4, 1, 5 ;
}
```

これは 92 バイト NetCDF ファイルに対応します。このファイルの編集済みのダンプは下記のようになります。

```

4344    4601    0000    0000    0000    000a    0000    0001
C  D  F 001  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \n  \0  \0  \0  001
17220   17921   00000   00000   00000   00010   00000   00001
[magic number ] [ 0 records ] [NC_DIMENSION ] [ 1 dimension ]

0000    0003    6469    6d00    0000    0005    0000    0000
\0  \0  \0  003  d  i  m  \0  \0  \0  \0  005  \0  \0  \0  \0
00000   00003   25705   27904   00000   00005   00000   00000
[ 3 char name = "dim"           ] [ size = 5       ] [ 0 global atts

0000    0000    0000    000b    0000    0001    0000    0002
\0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  013  \0  \0  \0  001  \0  \0  \0  002
00000   00000   00000   00011   00000   00001   00000   00002
(ABSENT) ] [NC_VARIABLE ] [ 1 variable ] [ 2 char name =

7678    0000    0000    0001    0000    0000    0000    0000
v  x  \0  \0  \0  \0  \0  001  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0  \0
30328   00000   00000   00001   00000   00000   00000   00000
```

```

"vx"          ] [1 dimension ] [ with ID 0 ] [ 0 attributes

0000 0000 0000 0003 0000 000c 0000 0050
\0 \0 \0 \0 \0 \0 \0 003 \0 \0 \0 \f \0 \0 \0 P
00000 00000 00000 00003 00000 00012 00000 00080
(ABSENT)      ] [type NC_SHORT] [size 12 bytes] [offset: 80]

0003 0001 0004 0001 0005 8001
\0 003 \0 001 \0 004 \0 001 \0 005 200 001
00003 00001 00004 00001 00005 -32767
[ 3] [ 1] [ 4] [ 1] [ 5] [fill ]

```

Appendix C FORTRAN インターフェースの まとめ

入力引数は大文字で、出力引数は小文字で表記してあります。すべての引数の FORTRAN 型は引数の名前によりアルファベット順にしてあり、関数の宣言の下にリストされています。

```
CHARACTER*80 FUNCTION  NF_INQ_LIBVERS()  
CHARACTER*80 FUNCTION  NF_STRERROR  (NCERR)  
INTEGER FUNCTION      NF_CREATE      (PATH, CMODE, ncid)  
INTEGER FUNCTION      NF_OPEN        (PATH, MODE, ncid)  
INTEGER FUNCTION      NF_SET_FILL    (NCID, FILLMODE, old_mode)  
INTEGER FUNCTION      NF_REDEF        (NCID)  
INTEGER FUNCTION      NF_ENDDEF      (NCID)  
INTEGER FUNCTION      NF_SYNC        (NCID)  
INTEGER FUNCTION      NF_ABORT       (NCID)  
INTEGER FUNCTION      NF_CLOSE       (NCID)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ         (NCID, ndims, nvars, ngatts,  
                                     unlimdimid)  
  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_NDIMS   (NCID, ndims)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_NVARS   (NCID, nvars)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_NATTS   (NCID, ngatts)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_UNLIMDIM (NCID, unlimdimid)  
INTEGER FUNCTION      NF_DEF_DIM      (NCID, NAME, LEN, dimid)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_DIMID    (NCID, NAME, dimid)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_DIM      (NCID, DIMID, name, len)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_DIMNAME  (NCID, DIMID, name)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_DIMLEN   (NCID, DIMID, len)  
INTEGER FUNCTION      NF_RENAME_DIM   (NCID, DIMID, NAME)  
  
INTEGER FUNCTION      NF_DEF_VAR      (NCID, NAME, XTYPE, NDIMS, DIMIDS,  
                                     varid)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_VAR      (NCID, VARID, name, xtype, ndims,  
                                     dimids, natts)  
  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_VARID    (NCID, NAME, varid)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_VARNAME  (NCID, VARID, name)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_VARTYPE  (NCID, VARID, xtype)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_VARDIMS  (NCID, VARID, ndims)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_VARDIMID (NCID, VARID, DIMIDS)  
INTEGER FUNCTION      NF_INQ_VARNATTS (NCID, VARID, natts)  
INTEGER FUNCTION      NF_RENAME_VAR   (NCID, VARID, NAME)  
INTEGER FUNCTION      NF_PUT_VAR_TEXT  (NCID, VARID, TEXT)  
INTEGER FUNCTION      NF_GET_VAR_TEXT  (NCID, VARID, text)  
INTEGER FUNCTION      NF_PUT_VAR_INT1  (NCID, VARID, I1VAL)  
INTEGER FUNCTION      NF_GET_VAR_INT1  (NCID, VARID, ilval)  
INTEGER FUNCTION      NF_PUT_VAR_INT2  (NCID, VARID, I2VAL)  
INTEGER FUNCTION      NF_GET_VAR_INT2  (NCID, VARID, i2val)  
INTEGER FUNCTION      NF_PUT_VAR_INT   (NCID, VARID, IVAL)  
INTEGER FUNCTION      NF_GET_VAR_INT   (NCID, VARID, ival)  
INTEGER FUNCTION      NF_PUT_VAR_REAL  (NCID, VARID, RVAL)  
INTEGER FUNCTION      NF_GET_VAR_REAL  (NCID, VARID, rval)
```



```

INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR_DOUBLE (NCID, VARID, DVAL)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR_DOUBLE (NCID, VARID, dval)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR1_TEXT (NCID, VARID, INDEX, TEXT)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR1_TEXT (NCID, VARID, INDEX, text)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR1_INT1 (NCID, VARID, INDEX, I1VAL)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR1_INT1 (NCID, VARID, INDEX, i1val)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR1_INT2 (NCID, VARID, INDEX, I2VAL)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR1_INT2 (NCID, VARID, INDEX, i2val)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR1_INT (NCID, VARID, INDEX, IVAL)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR1_INT (NCID, VARID, INDEX, ival)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR1_REAL (NCID, VARID, INDEX, RVAL)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR1_REAL (NCID, VARID, INDEX, rval)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VAR1_DOUBLE (NCID, VARID, INDEX, DVAL)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VAR1_DOUBLE (NCID, VARID, INDEX, dval)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARA_TEXT (NCID, VARID, START, COUNT, TEXT)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARA_TEXT (NCID, VARID, START, COUNT, text)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARA_INT1 (NCID, VARID, START, COUNT, I1VALS)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARA_INT1 (NCID, VARID, START, COUNT, i1vals)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARA_INT2 (NCID, VARID, START, COUNT, I2VALS)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARA_INT2 (NCID, VARID, START, COUNT, i2vals)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARA_INT (NCID, VARID, START, COUNT, IVALS)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARA_INT (NCID, VARID, START, COUNT, ivals)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARA_REAL (NCID, VARID, START, COUNT, RVALS)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARA_REAL (NCID, VARID, START, COUNT, rvals)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARA_DOUBLE (NCID, VARID, START, COUNT, DVALS)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARA_DOUBLE (NCID, VARID, START, COUNT, dvals)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARS_TEXT (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
TEXT)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARS_TEXT (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
text)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARS_INT1 (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
I1VALS)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARS_INT1 (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
i1vals)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARS_INT2 (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
I2VALS)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARS_INT2 (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
i2vals)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARS_INT (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
IVALS)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARS_INT (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
ivals)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARS_REAL (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
RVALS)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARS_REAL (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
rvals)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARS_DOUBLE (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
DVALS)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARS_DOUBLE (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
dvals)
INTEGER FUNCTION NF_PUT_VARM_TEXT (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
IMAP, TEXT)
INTEGER FUNCTION NF_GET_VARM_TEXT (NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE,
IMAP, text)

```

INTEGER FUNCTION	NF_PUT_VARM_INT1	(NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, I1VALS)
INTEGER FUNCTION	NF_GET_VARM_INT1	(NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, I1VALS)
INTEGER FUNCTION	NF_PUT_VARM_INT2	(NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, I2VALS)
INTEGER FUNCTION	NF_GET_VARM_INT2	(NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, I2VALS)
INTEGER FUNCTION	NF_PUT_VARM_INT	(NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, IVALS)
INTEGER FUNCTION	NF_GET_VARM_INT	(NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, IVALS)
INTEGER FUNCTION	NF_PUT_VARM_REAL	(NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, RVALS)
INTEGER FUNCTION	NF_GET_VARM_REAL	(NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, RVALS)
INTEGER FUNCTION	NF_PUT_VARM_DOUBLE	(NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, DVALS)
INTEGER FUNCTION	NF_GET_VARM_DOUBLE	(NCID, VARID, START, COUNT, STRIDE, IMAP, DVALS)
INTEGER FUNCTION	NF_INQ_ATT	(NCID, VARID, NAME, xtype, len)
INTEGER FUNCTION	NF_INQ_ATTID	(NCID, VARID, NAME, attnum)
INTEGER FUNCTION	NF_INQ_ATTTYPE	(NCID, VARID, NAME, xtype)
INTEGER FUNCTION	NF_INQ_ATTLEN	(NCID, VARID, NAME, len)
INTEGER FUNCTION	NF_INQ_ATTNAME	(NCID, VARID, ATTNUM, name)
INTEGER FUNCTION	NF_COPY_ATT	(NCID_IN, VARID_IN, NAME, NCID_OUT, VARID_OUT)
INTEGER FUNCTION	NF_RENAME_ATT	(NCID, VARID, CURNAME, NEWNAME)
INTEGER FUNCTION	NF_DEL_ATT	(NCID, VARID, NAME)
INTEGER FUNCTION	NF_PUT_ATT_TEXT	(NCID, VARID, NAME, LEN, TEXT)
INTEGER FUNCTION	NF_GET_ATT_TEXT	(NCID, VARID, NAME, text)
INTEGER FUNCTION	NF_PUT_ATT_INT1	(NCID, VARID, NAME, XTYPE, LEN, I1VALS)
INTEGER FUNCTION	NF_GET_ATT_INT1	(NCID, VARID, NAME, I1VALS)
INTEGER FUNCTION	NF_PUT_ATT_INT2	(NCID, VARID, NAME, XTYPE, LEN, I2VALS)
INTEGER FUNCTION	NF_GET_ATT_INT2	(NCID, VARID, NAME, I2VALS)
INTEGER FUNCTION	NF_PUT_ATT_INT	(NCID, VARID, NAME, XTYPE, LEN, IVALS)
INTEGER FUNCTION	NF_GET_ATT_INT	(NCID, VARID, NAME, IVALS)
INTEGER FUNCTION	NF_PUT_ATT_REAL	(NCID, VARID, NAME, XTYPE, LEN, RVALS)
INTEGER FUNCTION	NF_GET_ATT_REAL	(NCID, VARID, NAME, RVALS)
INTEGER FUNCTION	NF_PUT_ATT_DOUBLE	(NCID, VARID, NAME, XTYPE, LEN, DVALS)
INTEGER FUNCTION	NF_GET_ATT_DOUBLE	(NCID, VARID, NAME, DVALS)
INTEGER	ATTNUM	! 属性数
INTEGER	attnum	! 出力属性数
INTEGER	CMODE	! NF_NOCLOBBER, NF_SHARE フラグ表現
INTEGER	COUNT	! 値のかたまりの縁の長さの配列
CHARACTER(*)	CURNAME	! 現行の名前(変更前)

INTEGER	DIMID	! 次元 ID
INTEGER	dimid	! 出力次元 ID
INTEGER	DIMIDS	! 次元 ID のリスト
INTEGER	dimids	! 出力次元 ID のリスト
DOUBLEPRECISION	DVAL	! 単一のデータ値
DOUBLEPRECISION	dval	! 出力単一のデータ値
DOUBLEPRECISION	DVALS	! データ値の配列
DOUBLEPRECISION	dvals	! 出力データ値の配列
INTEGER	FILLMODE	! フィルモード設定のための NF_NOFILL または NF_FILL
INTEGER*1	I1VAL	! 単一のデータ値
INTEGER*1	i1val	! 出力単一のデータ値
INTEGER*1	I1VALS	! データ値の配列
INTEGER*1	i1vals	! 出力データ値の配列
INTEGER*2	I2VAL	! 単一のデータ値
INTEGER*2	i2val	! 出力単一のデータ値
INTEGER*2	I2VALS	! データ値の配列
INTEGER*2	i2vals	! 出力データ値の配列
INTEGER	IMAP	! インデックスマッピングベクトル
INTEGER	INDEX	! 変数配列の インデックスベクトル
INTEGER	IVAL	! 単一のデータ値
INTEGER	ival	! 出力データ値の配列
INTEGER	IVALS	! データ値の配列
INTEGER	ivals	! 出力データ値の配列
INTEGER	LEN	! 次元長または属性長
INTEGER	len	! 出力次元長または属性長
INTEGER	MODE	! オープンされたモード NF_WRITE または NF_NOWRITE の一つ
CHARACTER(*)	NAME	! 次元、変数、または属性名
CHARACTER(*)	name	! 出力次元、変数、または属性名
INTEGER	natts	! 出力属性数
INTEGER	NCERR	! NF_xxxä÷êî 呼び出しによる出力エラー
INTEGER	NCID	! オープンされた NetCDF ファイルの NetCDF ID
INTEGER	ncid	! 出力 NetCDF ID
INTEGER	NCID_IN	! オープンされたソースの NetCDF ファイルの NetCDF ID
INTEGER	NCID_OUT	! オープンされたデスティネーションの NetCDF ファイルの
NetCDF ID		
INTEGER	NDIMS	! 次元数
INTEGER	ndims	! 出力次元数
CHARACTER(*)	NEWNAME	! 次元・変数・属性の新規名
INTEGER	ngatts	! 出力グローバル属性の数
INTEGER	nvars	! 出力変数の数
INTEGER	old_mode	! 以前のフィルモード、NF_NOFILL または NF_FILL
CHARACTER(*)	PATH	! NetCDF ファイルの名前
REAL	RVAL	! 単一のデータ値
REAL	rval	! 出力データ値の配列
REAL	RVALS	! データ値の配列
REAL	rvals	! 出力データ値の配列
INTEGER	START	! 最初の値の変数配列インデックス
INTEGER	STRIDE	! 変数配列の次元ストライド

CHARACTER(*)	TEXT	!	入力テキスト値
CHARACTER(*)	text	!	出力テキスト値
INTEGER	unlimdimid	!	無制限次元の返された ID
INTEGER	VARID	!	変数 ID
INTEGER	varid	!	出力変数 ID
INTEGER	VARID_IN	!	変数 ID
INTEGER	VARID_OUT	!	変数 ID
INTEGER	XTYPE	!	外部型: NF_BYTE, NF_CHAR, ... ,
INTEGER	xtype	!	出力外部型

Appendix D NetCDF 2 FORTRAN トランジションガイド

FORTRAN インターフェースの変更のまとめ

NetCDF-3 版では NetCDF ライブラリが完全に書き直されています。このバージョンは以前のものより 2 倍は早くなっています。NetCDF ファイルのフォーマットはそのままなので、3 版で書かれたファイルは 2 版で読むことができ、また、逆も可能です。

ライブラリの中心部は現在、ANSI C で書かれています。このバージョンをコンパイルするには ANSI C コンパイラが必要です。FORTRAN インターフェースは、NetCDF-2 で使用されたのとは異なる技術を利用して C インターフェースの上の層にのせてあります。

ライブラリを書き直すことによって、進歩した C や FORTRAN のインターフェースを利用する機会が得られ、かなりの恩恵がありました。

- ・ 引数に type punning を使用する必要性が無くなることによる型の安全性。
- ・ 言語非依存型である外部 NetCDF 型 (NF_BYTE, ..., NF_DOUBLE) と言語依存型である内部データ型 (INT*1, ..., DOUBLE PRECISION) との間の不適切なカップリングを排除することによる自動型変換。
- ・ 圧縮データ及びマルチスレッドのサポートを問題なく加えるための障害を取り除くことによる、将来の改正に対するサポート
- ・ 各関数の返し値の呼び出しプログラムにエラーステータスを一律に伝達することによる標準的なエラー動作の確立

2 版の FORTRAN インターフェースを使用しているプログラムは書き直す必要がありません。なぜならば、NetCDF-3 ライブラリにはかつての関数・グローバル変数・動作をすべてサポートする後方互換性インターフェースが含まれているからです。この新しいインターフェースの恩恵が NetCDF のアプリケーション中でそれらを使用するきっかけになることを願います。NetCDF-2 の呼び出しを一つ一つ対応する NetCDF-3 の呼び出しに置き換えていくことで、旧アプリケーションを新しいインターフェースに徐々に変換していくことは可能です。

NetCDF の実行の変更は、ほとんどすべてのプラットフォーム上での携帯性、保水性、及びパフォーマンスの向上に繋がりました。I/O と型層を完全に切り離すことによりプラットフォーム固有の最適化が簡単になりました。新しいライブラリは販売元が提供している XDR ライブラリを使用していないので、NetCDF を使用するプログラム同士をリンクすることが簡易になり、ほとんどの場合においてデータアクセスのスピードが速くなっています。

新しい FORTRAN インターフェース

まず最初に NetCDF-2 インターフェースを使った FORTRAN コードの例です。

```

! どんな型の値にも対応できる十分な大きさのバッファを使用
DOUBLE PRECISION DBUF(NDATA)
REAL RBUF(NDATA)
...
EQUIVALENCE (RBUF, DBUF), ...
INT XTYPE      ! データの実際の型を保持する
INT STATUS     ! エラーステータス用
! Get the actual data type
CALL NCVINQ(NCID, VARID, ...,XTYPE, ...)
...
! データを取得
CALL NCVGT(NCID, VARID, START, COUNT, DBUF, STATUS)
IF(STATUS .NE. NCNOERR) THEN
    PRINT *, 'Cannot get data, error code =', STATUS
    ! エラーに対応する
    ...
ENDIF
IF (XTYPE .EQ. NCDOUBLE) THEN
    CALL DANALYZE(DBUF)
ELSEIF (XTYPE .EQ. NCFLOAT) THEN
    CALL RANALYZE(RBUF)
...
ENDIF

```

同じことを新しい NetCDF-3 の FORTRAN インターフェースを使って扱うとこのようになります。

```

! 解析に倍精度を使用したい
DOUBLE PRECISION DBUF(NDATA)
INT STATUS
! よって、データを倍精度として取得する関数を使用する
STATUS = NF_GET_VARA_DOUBLE(NCID, VARID, START, COUNT, DBUF)
IF(STATUS .NE. NF_NOERR) THEN
    PRINT *, 'Cannot get data, ', NF_STRERROR(STATUS)
    ! エラーに対応する
    ...
ENDIF
CALL DANALYZE(DBUF)

```

上の例は関数の名前、データ型の変換、エラーの取り扱い等における変更を表わしています。詳細については後述してあります。

関数名の規約

NetCDF-3 のライブラリは新しい命名の規約に従っており、NetCDF プログラムをより読み易くしようと試みています。例えば、変数名を変更する関数の名前は以前の NCVREN ではなく NF_RENAME_VAR となります。

すべての NetCDF-3FORTRAN 関数名は NF_ 接頭辞で始まります。関数名の 2 番目の部分は

動詞のようなもので、GET, PUT, INQ(問い合わせるの inquire), OPEN などがあります。名前の3番目の部分は一般的に動詞の目的語にあたります。例えば、次元、変数、属性を扱う関数では DIM, VAR, ATT となります。様々な変数の I/O 操作を識別するためには、一文字の修飾子が VAR に付加されます。

- VAR 変数全体へのアクセス
- VAR1 単一の変数へのアクセス
- VARA 配列または配列断面へのアクセス
- VARS 値の部分サンプルへのストライドアクセス
- VARM メモリ内で隣接していない値へのマップされたアクセス

変数名と属性関数の末尾には最終の引数の型を示す部分があります:TEXT, INT1, INT2, INT, REAL, DOUBLE です。関数名のこの部分はプログラム中で使用しているデータの格納庫の型を指しています: 文字列、1 バイト整数等です。

更に、すべての FORTRAN インターフェースでは、パラメーター名は接頭辞 NF_ で始まります。例えば、以前 MAXNCNAM であったパラメーターは現在、NF_MAX_NAME であり、以前 FILFLOAT であったものは NF_FILL_FLOAT となっています。

既に述べたように、後方互換性を保証するために古い名前はすべてサポートされています。

型変換

新しいインターフェースにおいては、どのような数値型へも、または数値型からの自動変換も提供されているので、ユーザーは数値変数の外部データ型を知っている必要はありません。この特徴を使って、コードを外部データ型に依存しないようにして簡単にすることができます。type punning を排除することによって、以前のインターフェースでは起こりえたいくつかの種類別の型エラーを防げるようになりました。変数の外部データ型を扱う際にプログラムを変更する必要が無いために、新しいインターフェースはプログラムをより強固にすることができます。

外部数値型からの変換が必要な場合はライブラリによって扱われます。この自動変換機能と外部データ表記の内部データ型からの分離は NetCDF4 版においてより重要になります。4 版では、自然に対応する内部データ型が存在しない圧縮データ(例えば 11 ビット値の配列)用の新しい外部データ型が用意される予定です。

ある数値型から他の型に変換する操作は、ターゲットの型に変換された値を表現できない場合にエラーを引き起こします。(NetCDF-2 においては、そのようなオーバーフローは XDR 階層でのみ起こり得ました。)例えば、REAL は外部では NF_DOUBLE (IEEE 浮動小数点数)として格納されているデータをもつことができないかもしれません。値の配列をアクセスする際には、表現し得る範囲を超えた値が一つまたはそれ以上ある場合には、NF_ERANGE エラーが返されますが、他の値は正しく変換されます。

型変換において、単に精度のロスが生じただけではエラーが返されないことに注意して

ください。そのため、例えば INTEGER に倍精度の値を読み込んだ場合には、その倍精度の値の大きさがプラットフォーム上の INTEGER で表現できる範囲を超えない限りエラーは生じません。同様に、仮数部分に整数のビットをすべて収めることのできない REAL に大きな整数を読み込み、精度が失われてもエラーは生じません。このような精度のロスを防ぐためには、アクセスする変数の外部データ型を確認し、それと互換性のある内部データ型を使用しましょう。

新しいインターフェースはテキスト列を表現する文字配列と小さい整数を表わす 8 ビットバイトの配列とを区別します。このインターフェースはテキスト列のための CHARACTER, INT1, 1 バイト整数の内部データ型をサポートします。

エラーの取り扱い

新しいインターフェースのエラーの取り扱いは NetCDF-2 の方法とは異なります。NetCDF-2 のインターフェースでは、エラーが検知された時のデフォルト動作はエラーメッセージを出力して exit することでした。エラーの取り扱いをコントロールするには、関数 NCP0PT を呼び出さなければならず、エラーの原因を究明するために、返されたエラー引数の値をテストしなければなりません。

新しいインターフェースにおいては、関数が返す整数ステータスは成功 / 失敗のみではなく、エラーの原因をも示します。ライブラリは何かを出力したり、exit を呼び出そうとすることはありません。(ただし、NetCDF-2 互換の関数を使用している場合はこの限りではありません。) 関数の返されたステータスを確認し、手動で行なわなければなりません。平行した (マルチプロセッサ) 実行を問題なくサポートするために、また、NetCDF が使用される環境についての仮定を減らすために、これらのグローバル変数は削除されました。新しい動作は、独自の GUI インターフェースを持つアプリケーション中で、NetCDF を隠された階層として使用するのにより適したサポートを提供しているはずです。

NCLONG と NF_INT

NetCDF-2 インターフェースが NCLONG を使って 32 ビット整数に対応した外部データ型を同定していたのに対して、新しいインターフェースは NF_INT を使います。NCLONG は後方互換性のために、NF_INT と同じ値を取るように定義されていますが、新しいコードでは使用されるべきではありません。新しい 64 ビットプラットフォームが 64 ビット整数に long を使用しているので、この名前の衝突によって引き起こされる混乱を少なくしたいのです。未だに 64 ビット整数に対応する NetCDF 外部データ型が存在しないことに注意してください。

何が欠けているか？

2 版のインターフェースの関数 NCTLEN に対応する関数はありません。内部データ型と外部データ型を分離することと、新しい型変換インターフェースによって、NCTLEN は

不要になります。ユーザーは言語本来の型に対して読み書きするので、言語本来の型に必要なスペースの知識さえあれば、完璧にある値に割り当てるスペースを決定することができます。

以前のライブラリでは、NetCDF オブジェクトの名前に使用された記号が CDL の制約に沿っているか判断する方法がありませんでした。CDL を使用している `ncdump` と `ncgen` のユーティリティは、名前に関しては英数字、`"_"`、`"-"` のみの使用を許可しています。この制約は新しい次元・属性・変数を生成する際に、ライブラリによっても強制されることになりました。制約の弱い名前を冠する既存の要素はまだ問題なく使えます。

その他の変更

NetCDF-2 に対応する関数が存在しない、新しい関数が NetCDF-3 には 2 つあります。`NF_INQ_LIBVERS` と `NF_STRERROR` です。現行の NetCDF ライブラリは `NF_INQ_LIBVERS` の文字列として返されます。NetCDF 関数の呼び出しによって返されたステータスに対応するエラーメッセージは関数 `NF_STRERROR` によって記号列として返されます。

新しい `NF_SHARE` フラグはアクセスのデフォルトバッファを防ぐために、`NF_OPEN` または `NF_CREATE` 呼び出しで使用できます。`NF_SHARE` を使用することによって NetCDF ファイルに同時にアクセスすれば、ディスクのアップデートが同期であることを確認するために、アクセスが終了するたびに `NF_SYNC` を呼び出す必要がありません。従属的なデータ（例えば属性値）への変更にも注意しなければなりません。なぜならば、これらは `NF_SHARE` フラグを使用しても自動的に伝達されないからです。このためには、まだ `NF_SYNC` 関数が必要です。

2 版のインターフェースの問い合わせ関数は一つしかなく、`ncvinq` によって名前、型、変数の形を得ていました。同様に、次元・属性・NetCDF ファイルに関する情報を得る関数も一つしかありませんでした。この情報の部分集合が得る場合には、不必要な情報を押さえるためにダミー引数を与えなければなりません。新しいインターフェースでは、新たな問い合わせ関数ができ、これらの項目を個別に返します。それによって引数の数え損ねによるエラーが起りにくくなりました。

以前の実装では `ncvpt` と `ncvgt` 呼び出し中で 0 値のカウント要素が指定されているとエラーが返されました。この制約が外されたことによって、`NF_PUT_VAR` と `NF_GET_VAR` のファミリーの関数が 0 値のカウント要素を使って呼び出せることになりました。これはデータがアクセスされないことを意味し、一見、無意味のように思われますが、0 値のカウントを特殊なケースとして扱わなくて良いので、プログラムによっては単純になります。

以前の実装では `ncvardef` 中の変数の形を指定するのに同じ次元を 2 回以上使用するとエラーが返されました。自己相関行列など同じ次元を 2 度使用することに意味のある良い例があるので、この制約は NetCDF-3 実装では緩められました。

新しいインターフェースでは、`NF_PUT_VARM` と `NF_GET_VARM` 族の関数に対する `IMAP` 引数の単位は、望まれる内部データ型のデータ要素の数によって表わされ、NetCDF2 版の

マップされたアクセスインターフェースのようにバイトでは表わされません。

下記は NetCD-2 の関数名と対応する NetCDF-3 関数の対応表です。NetCDF-2 関数の引数のリストは NetCDF-2 User's Guide に載っています。

NCABOR	NF_ABORT
NCACPY	NF_COPY_ATT
NCADDEL	NF_DEL_ATT
NCAGT	NF_GET_ATT_DOUBLE, NF_GET_ATT_REAL, NF_GET_ATT_INT, NF_GET_ATT_INT1, NF_GET_ATT_INT2
NCAGTC	NF_GET_ATT_TEXT
NCAINQ	NF_INQ_ATT, NF_INQ_ATTID, NF_INQ_ATTLEN, NF_INQ_ATTTYPE
NCANAM	NF_INQ_ATTNAME
NCAPT	NF_PUT_ATT_DOUBLE, NF_PUT_ATT_REAL, NF_PUT_ATT_INT, NF_PUT_ATT_INT1, NF_PUT_ATT_INT2
NCAPTC	NF_PUT_ATT_TEXT
NCAREN	NF_RENAME_ATT
NCCLOS	NF_CLOSE
NCCRE	NF_CREATE
NCDDEF	NF_DEF_DIM
NCDID	NF_INQ_DIMID
NCDINQ	NF_INQ_DIM, NF_INQ_DIMLEN, NF_INQ_DIMNAME
NCDREN	NF_RENAME_DIM
NCENDEF	NF_ENDDEF
NCGOPT	(none)
NCINQ	NF_INQ, NF_INQ_NATTS, NF_INQ_NDIMS, NF_INQ_NVARS, NF_INQ_UNLIMDIM
NCOPN	NF_OPEN
NCPOPT	(none)
NCREDEF	NF_REDEF
NCSFIL	NF_SET_FILL
NCSNC	NF_SYNC
NCTLEN	(none)
NCVDEF	NF_DEF_VAR
NCVG1C	NF_GET_VAR1_TEXT

NCVGGC	NF_GET_VARM_TEXT, NF_GET_VARS_TEXT
NCVGT	NF_GET_VARA_DOUBLE, NF_GET_VARA_REAL, NF_GET_VARA_INT, NF_GET_VARA_INT1, NF_GET_VARA_INT2
NCVGT1	NF_GET_VAR1_DOUBLE, NF_GET_VAR1_REAL, NF_GET_VAR1_INT, NF_GET_VAR1_INT1, NF_GET_VAR1_INT2
NCVGTC	NF_GET_VARA_TEXT
NCVGTG	NF_GET_VARM_DOUBLE, NF_GET_VARM_REAL, NF_GET_VARM_INT, NF_GET_VARM_INT1, NF_GET_VARM_INT2, NF_GET_VARS_DOUBLE, NF_GET_VARS_REAL, NF_GET_VARS_INT, NF_GET_VARS_INT1, NF_GET_VARS_INT2
NCVID	NF_INQ_VARID
NCVINQ	NF_INQ_VAR, NF_INQ_VARDIMID, NF_INQ_VARNAME, NF_INQ_VARNATTS, NF_INQ_VARNDIMS, NF_INQ_VARTYPE
NCVP1C	NF_PUT_VAR1_TEXT
NCVPGC	NF_PUT_VARM_TEXT, NF_PUT_VARS_TEXT
NCVPT	NF_PUT_VARA_DOUBLE, NF_PUT_VARA_REAL, NF_PUT_VARA_INT, NF_PUT_VARA_INT1, NF_PUT_VARA_INT2
NCVPT1	NF_PUT_VAR1_DOUBLE, NF_PUT_VAR1_REAL, NF_PUT_VAR1_INT, NF_PUT_VAR1_INT1, NF_PUT_VAR1_INT2
NCVPTC	NF_PUT_VARA_TEXT
NCVPTG	NF_PUT_VARM_DOUBLE, NF_PUT_VARM_REAL, NF_PUT_VARM_INT, NF_PUT_VARM_INT1, NF_PUT_VARM_INT2, NF_PUT_VARS_DOUBLE, NF_PUT_VARS_REAL, NF_PUT_VARS_INT, NF_PUT_VARS_INT1, NF_PUT_VARS_INT2
NCVREN	NF_RENAME_VAR
(none)	NF_INQ_LIBVERS
(none)	NF_STRERROR